天空の要塞

天音 雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天空の要塞

【Nコード】

N7742H

【作者名】

天音 雪

【あらすじ】

2030年以降更に強大な軍事力を付け始めたアメリカから日本は日米安全保障条約を破棄される。

空前の危機にさらされた日本と世界は国際連合を脱退し、ロシアを筆頭にアジア・ヨーロッパ諸国で軍事同盟を締結させる。

そんな中、日本は世界を根本的に変えるために歴史を変えることに決めた。

そして日本はアメリカの属国となったお主な原因の太平洋戦争に艦隊時間転移計画「時滑計画」を始動させる。

序章 プロローグ

1944年5月、マーシャル諸島を席卷した米軍がいよいよトラックに迫り、連合艦隊司令部は避退をはかった。

その頃、帝国本土房総半島沖で謎の巨大空母が出現した。

軍令部は米国艦隊が攻めて来たのかと軍令部は混乱し、万一に備えて東京都周辺の基地から次々と戦闘機が舞い上がった。

しかし、航空隊はそこで奇妙なものをみた。空母の飛行甲板はこの時代の方形と違い、艦橋が中央にあり飛行甲板も両舷から斜めに張りだしていたのだった。

また、機銃員が1人もいない。と言うより、機銃はおるか高角砲とみられる小口径砲すら見られない。航空隊の隊長は初めは戸惑ったが、すぐに命令を下した。

「攻撃開始!!」

隊長の言葉とともに、戸惑っていた多数の搭乗員達が五月雨式に攻撃を始めた。

しかし、また航空隊は奇妙な光景をみた。空母の艦橋から白い煙が上がったかと思うと、ロケットのようなものが飛んできたのだ。

「逃げろ!!」

隊長が叫んだが、遅かった。戦闘機は全て落とされた。

五隻いたその巨大空母はその場から離脱した。

航空隊の通信が途切れたため、全滅ではないかと、駆逐艦が、漂流している搭乗員を助けにいった。

運よく駆逐艦に拾われた搭乗員から聞いた話によると、空母は五隻、日章旗を掲げていたが、見慣れない艦だったそうだ。

当の空母は日章旗を掲げて、再び本土の横須賀周辺で姿を現したが、一向に攻撃してくる様子はない。

軍令部では、得体の知れない軍艦をむやみに沈める訳にもいかず、取り敢えず空母戦闘に詳しい源田実中佐を空母の調査にだした。

上からの命を受けた源田中佐は駆逐艦で空母に近づいたが、全く攻撃してくる様子はない。

不審思いながらも、タラップを登ると、40歳位の男が艦橋から出てきた。男が近付いて来たため、源田中佐は短剣に手を伸ばし、両脇の2人は銃に手を伸ばした。

両脇の2人が引き金をひこうとしたとき、源田中佐ははつとした。

「銃をおろせ。ここで撃てばこちらが蜂の巣にされる。」

男は近付いて来ると源田は取り敢えず敬礼をした。男も敬礼をする
と、

「貴方は源田中佐ですね。私はこの機動艦隊司令長官の楯岡と言う
ものです。私は貴方方を助けに来ました。」

源田は男の柔らかな口調に親近感を覚えた。しかし得体のしれない
相手の話を信じるわけにもいかず、何より源田自身自らの口から話
しているとは思えなかった。

「助けて戴けるのは嬉しいが、我々は貴方を拘束しなければなりま
せん。」

男は少し考えると

「分かりました。手錠を掛けて構いませんからお話をさせて下さい。

」

源田はそこまでして話したいことがあるならいいかと、手錠をかけ楯岡という男と艦橋に入った。

長官室と書かれた扉の前で、楯岡はカードを取り機械に触れると、扉が自動で開いた。

「率直に言いますと私は未来から来ました。貴方もここまで来る際に色々見たもので信じて戴けるでしょうか。」

「確かにその様だな。しかし何故我々を助けるのですかな。」

男は赤いノートのようなものを取り出し、それについている画面を此方に見せた。

「貴方がいずれ特攻作戦と言うものを始めるからです。こちらがその映像です。」

源田は惨憺極まる黒島少将の口に出した特攻作戦の悲惨さに、息をのんだ。

「こんなにも悲惨な作戦なのか…。貴方が未来から来たと言うもの確証をえた。貴方の存在を知ってもらうために、作戦室で話しても

らおう。」

翌日作戦室には中沢中将や伊藤次長も来ていた。きっかり10時になると、源田の部下に連れられ1人の男が現れた。

「初めまして。源田中佐から話はお聞きしたと思われませんが、横須賀の空母群の司令長官の楯岡という者です。」

楯岡は、特攻作戦の映像を見せたり、1時間程話をした。

中沢中将を初め、作戦室にいた者は男の言ったことを信じざるを得なくなつた。

しかし、この後のマリアナ攻略を連合艦隊は防ぎきる確証があまりない。その為、楯岡に任せることとなつた。

「それでは貴方が米国艦隊を防ぐことが出来たら、貴方の要求をのみましよう。」

此方にいる人間で最も階級の高い中沢中将が言った。

第1章 第五艦隊の悪夢

6月10日新しい空母の存在など知るよしもない、ニミッツ麾下のマリアナ攻撃部隊はマーシャル諸島から出撃し、サイパンから500マイルの距離に近づいていた。

その時、先頭を進むニュージャージーのレーダーに、高速の飛行物体、つまり五隻の空母の艦上戦闘機『美雷』を捉えた。

美雷はミサイルを二機、その他は無誘導爆弾をありったけ積んできた。

一隻あたり60機もの美雷を載せているが、楯岡はあえて150機しか出さなかった。理由としては言うまでもなく150機で十分な戦力であると考えたからである。

飛行甲板には第2波のために準備していたグラマンが兵装転換をしていた。一方、第1波はまだ上空に居たため、あっという間に美雷に叩き落とされた。

美雷の落とした爆弾は飛行甲板のグラマンに誘爆し七隻の正規空母は一瞬で火の海とした。

米国空母戦闘群は突然の大被害に騒然としたが、スプルーアンスは敵機が去った後直ぐ無傷の軽空母から全機のF6Fを発艦させた。無論送り狼としてだが、当然敵機が速いため一瞬で突き放された。しかし、日本軍は美雷のレーダーで、送り狼に気付いていた。その為前方の4機編隊から離れた。

この4機は隊長機と副隊長機を含むチームである。

「お前達は先に戻ってきてくれ。」

そう言って、グラマン隊に向かっていった。

すると後ろから

「俺も行きます」

と言ってさらに10機程度的美雷が付いてきた。

美雷は巡航速度のM2、3で飛行してるので、あっという間に会敵した。

右手側にあるノートPCのキーボードを叩くと、画面に

>BOGY | <と表示される。

「Engage」
エンゲージ

今井は紺色の機体を視認すると通信用端末に向かいそう言った。
画面にも同じく>Engage<と表示される。

「FOX3!!」

今井が宣言する。ディスプレイには>RDY GUN | <と表示される。
レディ ガン

美雷の操縦士、今井らは出会い頭にガトリング砲を撃った。FCSとそれを統括する中枢コンピュータにより射撃制度はかなり高い。従来隊長機は2人のりであったため、後部にはフライトオフィサが乗るはずであるが、そこに中枢コンピュータとリンクした戦術コンピュータが搭載されている。

送り狼を叩きに来た美雷は、10機程を一瞬で撃墜。コックピット

中央にあるFCSのマークが敵機と重なるとすぐに引き金を引く。更にグラマン隊の中でも暴れ回り、20機。もちろんグラマン隊も黙って見ているわけではない。しかし敵機が速すぎるので適当に機関砲をぶっぱなしたが、在らぬ方向に飛んでいった。美雷はそんなことに眼もくれず、今度は後ろから照準をつけ、50機。

ガトリング砲は特有のモーター音を鳴らし、敵機をバタバタと撃ち落としていく。パイロンに装備された可動式バルカン砲も、弾頭にヴァリユアブル・タイムVT信管を付けており、可動式バルカン砲自体もアウトに敵機を追う。

真つ先にF6Fと交戦を始めた今井の美雷は、ガトリング砲のモーターが虚しく唸る。弾切れだ。

しかし、残りの美雷は次々とグラマンを叩き落とし、たった11機の美雷はものの20分でグラマンをほぼ全機叩き落とした。

今井は逃げ帰っていく敵機を見たが、

「深追いはするな、ビンゴに近い」

燃料計の残り燃料を確認して今井はそう言った。

> Roger <
リ
ン
ギ

といくつかの返答が返って来た。

第2章 戦力増強

美雷は全機帰還した。遅れてもう1機帰還した。

その頃、米軍は空母2隻の喪失、及び五隻の損傷によって、フィリピンへの攻撃のスケジュールの変更が余儀なくされた。

また、マリアナ沖海戦の日本軍の巨大空母について議論された。

数日後、スプルーアンスはハワイに呼び出された。

米軍統合参謀本部では、事態を重くみてキング大将が自らハワイに飛んできた。また、マッカーサーもホーランディアから戻って来た。

「各空母の飛行長からは、敵が五隻の巨大空母を擁していたそうだが、君もそれを確認したのかね？」

キングはスプルーアンスに詰問した。

「はい。生き残ったF6Fのパイロットの報告では、敵機の視認が不可に近い速度だったと証言しています。」

キングは苦笑いをした。

「そんなことが在るわけ無いだろう。負けた言い訳を聞く為に君を呼び出したのではない。」

「しかし実際にワズプが撃沈。ホーネット・バンカーヒル・ヨークタウンが大破。エセックスが中破、エンタープライズが小破の被害を受けています。バンカーヒルは機関損傷で10ktが限界。また

艦橋も半壊で浸水が少なくなるとか動く状態です。」

「比較的、被害の少ないエンタープライズとエセックスはフィリピン攻略に使えるだろう。後は艦載機を失った軽空母を入れれば、なんとかフィリピンは攻略できるだろう。新鋭戦艦を一隻補充する。マック、君はこの戦力を以て7月にフィリピンの攻略を開始してくれ。」

また、大本営もいい意味で混乱した。

あれだけの戦力でマリアナを防衛したのだ。また、楯岡からの要求で、新型艦戦の開発が進められた。

あと、空軍専用の工場の建設も承認された。技術者は空母の中で研究を続けている。

これは、楯岡らがこの世界に来た時に軍首脳と話をした時に要求したものだ。

楯岡艦隊は帝国海軍独立機動艦隊と、正式に海軍に編入された。また、三国同盟も脱退した。

何故なら、イタリアは既に降伏。ドイツとは表向きは技術提供もメカニックが複雑過ぎて、前線での修理がはかどらない。詰まり役に立たないということでもとめた。かわりに経済的な日独同盟を結んだ。これはドイツと対立しないために打ち出した苦肉の策だった。しかしその前に海軍がJu-87スツーカーを譲ってほしいと申し出した。これはスツーカーの爆弾搭載量を見てである。

スツーカーのスペックは

ユンカース Ju mo 2 1 1 離昇出力1315HP

全長：15.0m

全幅：11.5m

全高：3.84m

最大速度：375 km

実用上昇限度：7500 m

航続距離：1000 km

だが、エンジンの換装や引込み脚にすることで、最高速度420 km、航続距離1900 km（過荷）を目指した。これにより、機動部隊の打撃力の向上を図った。

第3章 零戦改初出撃

楯岡の要求により、新型艦戦に零戦の改造型を載せることとなった。エンジンは誉二一型を、また防御性能向上のため、風防は強化ガラスと防護板を燃料タンクにはゴムを貼ることになった。

またアメリカは、建造中止となったイリノイを急遽再建することになった。

また、空軍技術陣はMe 262に似た艦戦の設計図を海軍に提供した。

5日後、零戦改が完成した。

デモ飛行は源田中佐が任せられた。

源田が乗った零戦改は今までの零戦より少し長い滑走距離で飛び立った。また、所々強化され、急降下性能も上がった。降りてきた源田は少し緊張した顔で叫んだ。

「こんなに速くて操縦しやすい飛行機は乗ったことがない！・・・これならグラマンに勝てるかも知れない。」

「源田がそう言うなれば、間違いはなかるぞ。」

中沢少将はいった。

それから、誉二一型の増産が始まった。更に烈風の開発を進めるように、海軍から三菱に呼び掛けた。勿論川西や愛知等も支援を惜しまなかった。

7月23日午前11時41分米国艦隊エンタープライズの出した偵察機がフィリピン沖を肅々と進む大艦隊を発見した。偵察機は雲間隠れに報告を入れた。

「正規空母3、軽空母6、戦艦5、重巡6、その他多数。」

「空母の数では彼我共に大差なしだな。しかし戦艦はおそらくあのヤマト・クラスがいるはずだ。」

マッカーサーは艦載機の性能はこちらが上であることを信じていた。また数分後、武蔵の出した水偵も米国艦隊を発見した。

「正規空母2、軽空母8、戦艦6その他軽快艦艇多数。」

米軍とは打って代わって小沢中将は顔をしかめた。

「零戦改、及び艦攻・艦爆を全機発艦。」

発艦後、編隊を組んで攻撃に向かった。

距離は450マイル互いに500km以上の速度で飛んでいたので、一時間程で会敵した。

グラマン隊は零戦など完全に馬鹿に仕切っていたが、零戦改の存在を知らなかった。

第4章 大和咆哮ス

志水中尉率いる零戦改部隊はいち早くF6F・F4Uと遭遇した。120機の零戦改は従来と同じ一騎討ちに出たが、グラマンの銃撃を受け退散した。しかし速度は従来よりかなり速いため、機体の一部に損傷を受けたただけだ。

「各々の判断で戦え。」

志水は短い命令を出すと敵機に機銃を乱射しながら突っ込んでいった。

「喰らえっ！！」

ダダダッ

バババッ

機銃の発射煙と音が上空に広がる。

志水は既に一機のグラマンを落としてコルセアと戦っていた。

バババババババッ

不意に後方から銃声が聞こえた。一機のグラマンが後ろに回り込んでいた。

ベテランの志水はひらりと交わした。曳光弾は志水機がいたところに吸い込まれて行く。

そこに艦爆が追い付いたので、両者艦攻・艦爆の護衛に戻った。零戦は80機程に減っていた。しかしグラマンも同数に近い数を落とすとしたらう。

米軍は編隊を組んで敵艦上空にやってきた。

「対空三式弾よーい。」

大和武蔵の艦内は慌ただしくなった。

ドオオオオオン

米軍機は突然の硝煙に驚いたが、子弹に襲われ十数機の艦攻が落ちていった。

今度は対空機銃と高角砲が火をふいた。

攻撃は大和と武蔵、正規空母三隻に集中した。艦攻と艦爆の息の合った攻撃で大和の上部構造はめちゃくちゃになった。

結果、大和、武蔵、大鳳が小破。翔鶴、瑞鶴が中破。長門大破。米国艦隊上空でも、日本機の攻撃が始まった。零戦改は高角砲を狙い打ちして、そこに艦攻が魚雷を叩き込む。更に艦爆が飛行甲板に爆弾を落とす。

「我、空母一隻を大破、軽空母三隻を中破、せしむる。」

志水中尉の報告を受けた司令部は

「どつやら、戦艦同士の夜戦になりそうだな。」

「しかし零戦改もあれほど威力が有るとは思いませんでした。」

と、戦果を喜ぶより、艦隊決戦への喜びの声が大きかった。ここまで負け続けたが、ついに日本の誇りである大和・武蔵の砲が火を吹くのである。これで士気が上がらないわけがない。

午後7時20分、両艦隊は単縦陣で互いに進路に立ちはだかる状態で敵対した。

大和の水偵が吊光弾を落とすと、大和・武蔵の斉発が始まった。狙われたのは先頭を進む戦艦ニュージャージーだ。キンケイドは驚愕した。まだ22マイルも離れている。それでも撃ってきたのだ。大和と武蔵は試射を続ける。

第二斉射は二発挟又した。

ここでアメリカ艦も射程に入った。こちらは改良を重ねたレーダーによる射撃である。

四隻のアイオワ級戦艦の斉発はかなり正確なものだ。恐らくマリアナでの敗退後、かなり頑張ったのだろう。

斉発を済ませ、斉射を行うアイオワ級戦艦の弾着も正確である。

ここでアラバマとサウスダコタも斉射を行った。

大和の放った第三斉射はニュージャージーに命中。

更に長門も砲戦に加わった。

第5章 巨艦激突

長門は斉発を始めた瞬間、艦が激しく揺さぶられた。

サウスダコタの第一斉射が長門に挟みつけた。

しかし長門は突進を続ける。長門は斉発を早めに切り上げ、斉射を行った。

試射のためかなりアバウトなものだったがサウスダコタの舷側に一発命中した。

しかし米軍はアラバマもいる。長門にアラバマの斉射が4発命中した。長門は甚大な被害を受けたが、機関には影響はなかった。

「よし、命中したぞ。うちかえせ！」

米軍艦隊の乗組員の士気は一気に上がった。

一方大和と戦うアイオワは悲惨だった。第四斉射から立て続けに命中して、アイオワの弾薬庫に引火しアイオワは天に柱する火柱を立てて、漂流する鉄屑となった。

また武蔵と戦うニュージャージーも次第に武蔵が優勢となってきた。武蔵の抗堪性の高さが明らかとなってきたのだ。

二隻と戦う長門は第三砲塔に直撃、斉射ができなくなった。大和の艦長は武蔵に座乗する司令官は自艦のことで手いっぱいだろうと、独断で長門と戦うアラバマに照準を合わせた。

すると、形勢は一気に逆転した。長門に気を取られていたアラバマに、大和は落ち着いて照準を合わせることができた。

アラバマが長門に斉射を当てたときに艦内は湧きあがった。しかし次の瞬間大和がアラバマに牙を剥いた。大和は斉発を近づけていく。

そんな中、金剛と榛名が戦闘に参加した。敵戦艦はノースカロイナ級戦艦、ノースカロイナ、ワシントンの二隻である。無論、36cm砲の巡洋戦艦が16in砲を持つ本格的戦艦に勝てるはずがない。

また、すでに金剛と榛名は至近弾を受けている。通常戦艦の速力なら命中していただろう。

長門はサウスダコタと少しサウスダコタ優勢の状態で戦っていたが、長門の斉射がサウスダコタの砲塔に命中したことで砲塔数が対等となった。

大和はアラバマをも平らげたが、かなりのダメージを受けていた。

武蔵はニュージャージーと戦っていたが武蔵の砲がニュージャージーの艦首に命中し、ニュージャージーのバイタルパートを貫通して浸水が止まらなくなり、艦首のほうからずぶずぶと沈んでいった。武蔵は第一砲塔を使えなくなったが、あからさまに不利な金剛と榛名を手助けするためにニュージャージーの隣を進んでいたノースカロイナに照準を合わせた。

「艦長。いくら相手が旧式だからといって、この状態では・・・」

副艦長は中破に近いダメージを受けたため、戦闘を拒んだ。

「構わん武蔵は不沈艦だからな」

艦長はそういうとノースカロイナに照準を合わせた。

斉射は行わず初めから斉射を行ったので初めの三斉射はみだれたが、15000mに縮んだ距離での斉射は鍛えられた日本艦隊にとつてたやすいことだった。

アイオワ級相手に勝ったヤマト・クラス相手に前代戦艦が挑むのは無謀だと、ノースカロイナの艦長は反転を命じた。

「逃げる！逃げる！あいつには敵わん！」

しかし、金剛は悲惨だった。金剛の36cm砲はワシントンのバイタルパートを貫通しない。ワシントンの艦長は、それに気づき一隻ずつ沈めようと考え、金剛に砲塔を集中させた。それがワシントンに悲劇をもたらした。榛名の斉射が艦橋をぶち抜いた。

「やったぞ！もつと撃て！」

榛名の艦長は突然勇猛果敢になり、榛名は斉射を繰り返す。ワシントンは艦長等が死亡し指揮系統が乱れ、レーダーも破壊された。こうなれば各砲塔から法則照準で撃ち続けたが命中しない。戦艦は斉射ができなければ戦闘能力はがたりと落ちる。武蔵の艦長は

「武士の情けだ沈めてやれ」

静かにこう言つとワシントンに敬礼をした。武蔵は最後の斉射を撃つて、海戦は幕を閉じた。

第5章 巨艦激突（後書き）

同名の架空戦記小説が存在しました。

内容はベツモノなので宜しくお願いいたします。

約10日間4話と同じものを掲載していました。すいません

第6章 開発

今井は完成した空軍専用技術開発部の一室で、美雷の後継機の開発をしていた。

今井悠紀は現在美雷の、飛行隊長を任せられているが、元々は学校での研究が認められて、21XX年の開発部に着任。その後技術開発中將になった。

しかし、アメリカが日米安保に莫大な費用がかかるため、日本に空母を就役させる資金を一部提供した。

そこに人員補充に今井が空軍に編入した。

「今井、空母の名称決まったよ。」

入って来たのは技術開発部副局長、沖田沙紀だ。今井が研修だったころひよんなことから、今井の指導員になった。

また、同じ空母群の友達の福田遥の親友だ。

話を戻そう。空母群の旗艦で、今井がのる一〇〇号艦が帝鳳。福田が乗る一〇一号艦が神龍。その他は

一一〇号艦・鳳雷

小型な空母は飛龍、蒼龍となった。

「失礼します…。」

ガチャリ

入って来たのは福田だった。

「遙ちゃんいらっしやい…。誰？」

福田の後ろに1人の青年が立っている。

「おつ。山城どうした？」

「いやあ。今日空母の名前が決まるって聞いたんで、センパイは聞いたんじゃないかと思って…。」

今井をセンパイと呼ぶのは空母帝鳳の美雷部隊隊員山城柚彦だ。

「ここで立ち話も何だから、部屋で話そう。」

一方アメリカでは、フィリピンでの海戦で出現した、日本の新型戦闘機について話があった。

「ハルゼー中将。新型艦戦の特徴を上げてくれ。」

ハルゼーは立って、話し始めた。

「内のボーズの話だと、外観はジークと変わらないが、速度は大体600km近い速度だったと言っている。後、機体自体の防御はジークと変わらないが、コックピットはかなり防御が高いそうだ。」

F6Fも落とせると源田は言ったが、味方の過大評価である。しかし零戦だと舐めてかかったため、総数400機の内、50機あまりが撃墜、または損傷途中帰還した。

その為、日本がF6Fを超える機体を作るのではないかと、新型艦戦の設計が始まった。

また、ヤマトクラスの抗堪性の高さが証明された為、艦載機の反復攻撃がかなり必要だろうということ、艦載機の最大離陸重量を上

げて、一回の出撃で高いダメージを与えることが出来るよう、馬力向上が最優先事項となった。

第7章 M4ノ天敵アラワル

米軍は取り敢えず陸軍航空隊にP-51を大量に送り込んだ。正規空母は2隻の修理を終わらせたが、新しく新造する時間はなかった。代わりに護衛空母を2隻就役させた。

軍令部 某所

取り敢えず米国艦隊を壊滅近くまで追いやったが、アメリカの国力は無限に近い。

また、長門の修理や零戦改『零戦六三型』の配備は帝鳳などに載せていた支援物資で何とかなったが、いずれそれも尽きる。その為一式戦車などの改装を含め、陸戦隊の増強を図り、連合艦隊はポートモレスビーとポートダーウィンの攻略を計画した。また、大破した長門の近代化改修による、速力増加及び、逼迫した空母への改造が決まった。

今井の部屋

「いただきます。」

沙紀は真っ先にお菓子に手を伸ばす。今井の部屋には小型の冷蔵庫がある。お菓子は未来から持って来たものである。

今井は大の甘党でお菓子を欠かさず持っている。

「今井、あんた新しい艦戦の開発のことだけど設計図位出来たの？」

「いや、まだ。沙紀は出来たのか？」

「もちろん、問題のエンジンも一応設計図は未来から持ってきた太極があるからね。」

山城と福田も聞いていたがさっぱり分からない。

「沙紀ちゃん、そっちの話より次期作戦の話をしたいんだけど…。」

福田が話を止め、本題に入る。

「そうだ。12月8日に連合艦隊はポートモレスビーとポートダーウィンの攻略を計画してる。その為楯岡長官は帝鳳ら三隻は米国艦隊の殲滅にミッドウェイへ、また飛龍と蒼龍は連合艦隊の支援にまわるらしいです。」

山城が福田の代わりに説明する。

ちなみに4人は同じ年齢だが、今井が山城にセンパイと呼ばれるのは航空隊に入るのが今井のほうが早かったからだ。

この中で福田と今井は同期で、技術開発部で沖田のほうが先輩になるのは沖田が飛級で大学に行ったが、今井は気の合わない先輩と喧嘩をしたため、海軍を基盤とする高校だったので高一で退学になったからだ。

条件の高校卒業資格を持たなかった為通信教材で勉強したので一年遅くなった。

一方福田は視力が低かった為視力矯正に、山城は航空隊入隊試験に二度滑った。

そんな日本軍にある報告が届いた。次期艦戦のジェット機のロ - 8
8エンジンの試作が完成した。しかしサイズがどうしても大きく、
二三試戦には載せられないそうだ。

代わりに後に火龍と呼ばれる陸軍機にこれを搭載し、単発機の開発
に技術提供した。実際の火龍は双発機だが、陸軍は大喜びした。ま
あ陸軍に技術提供したところで、変わることはほとんどないのだが
・
・

また、ポートダーウィン攻略作戦の旗艦を務める飛龍の艦長宮本秀
明中將にも報告が届いた。

長門は作戦に参加出来ず
とのことだ。長門は次期艦戦の搭載に備え、蒸気カタパルトとアレ
ステイングワイヤの装備もしなければならぬからだ。

陸戦隊の増強も次々と進み、一式戦車改の完成配備まで後少しとな
った。

無論一式戦車改は対戦車戦を予想し砲、装甲ともに75mmだ。
両軍は着々と準備を進めていった。

第8章 PM作戦始動

上陸作戦の決行日Xデーが決まった。

12月8日、真珠湾攻撃の日であり日本軍のゲン担ぎである。一式戦車改は更に改造の余地があるため、更に傾斜装甲に変更し始めた。また、新型陸戦隊専用重戦車の開発も始めた。前面装甲鉄とチタンの複合装甲で75mm、砲が駆逐艦の主砲を転用した127mm砲とヨゼフ・スターリン戦車を超える重戦車である。

しかし速度は火星エンジンつまり航空エンジンを積み、目標速度45km/hとかなり速い。独ソ戦のようにティーゲルをスターリン戦車で引き付け、T-34で側面に弾を打ちこむというような、煩わしいことは行わず正面から一種類の戦車で効率を上げようという考え方だ。

12月8日

豊田副武率いる連合艦隊は、マリアナ沖海戦に参加しなかったため、とよたでえむいまだ健在の第一航戦に未来艦の飛龍と蒼龍を中核としてポートルスビーの攻略に向かった。潜水艦などと触接したが、一度も会敵せずに進撃できた連合艦隊は、前にいる第一戦隊の艦砲射撃で攻略を始めた。

「砲撃開始！」

砲撃長の叫び声とともに大和・武蔵の巨弾がポートルスビーの大地に降り注いだ。

ポートルスビーの米軍の指揮を執るのは、フィリピンでの撤退のあと日本軍の作戦暗号を解き、攻撃目標を突き止めた司令部から命

の下ったダグラス・マッカーサーであったが。

「くそっ！ジャップの奴らめ、戦闘機で攻撃しろ！」

マッカーサーは叫んだ。

「しかし、こちらは陸軍機です。海上での飛行に慣れていません」

航空隊の指揮官は海上の飛行の難しさを知っている。ミッドウェイでもそうだった。陸軍機の搭乗員は海上飛行に慣れていないので、編隊が長くよじれた。まあそれが逆に時間差攻撃となったのだが。

「ジャップの連中は英国艦隊を沈めたではないか。ジャップの連中にできたのだから、うちのボーイズにできないわけがなかるう」

指揮官はそう聞くと直ちにP-51やP-38などの戦闘機を率いて出撃した。

半ば逃げるような形でP-51とP-38は飛び立ったが、やはり編隊は乱れ零戦六三型と会敵した。世界最強のレシプロ戦闘機でも、浮足立っているうえ慣れていない海上飛行で何機か撃墜された。

ペロハチャメザシなどと呼ばれたP-38は格闘戦に無理やり巻き込まれた。二一型にも落とされたため六三型にはすぐに落とされた。また武装も更新され、15mm機銃4丁という変わった武装である。20mm機銃より携行弾数は多く、7.7mm機銃より貫通力が高くなっている。

今回飛龍と蒼龍は美雷を積んでおらず、特型大発を積んでいる。飛龍型は強襲揚陸艦としても使えるため一気に増速して、特型大発を下ろし始めた。

特型大発は重戦車一両の他30人の兵士を乗せられる。今回は陸戦隊員と一式戦車改を積んでいる。大発は海岸に上陸すると一式戦車改を前に歩兵や重砲を下ろし始めた。

アメリカ軍は日本軍にクロス・ファイヤを浴びせてきたが、一式戦車改に阻まれて弾は通らない。

続いてM4シャーマンを繰り出してきたが一式戦車改は互角、いや防御力の高い一式戦車改が有利となった。更に数で圧倒しようとするM3グラント・ハニーやM4シャーマンを繰り出してきた。

しかし、零戦が50機程その他天山艦攻20機と彗星艦爆20機が爆弾を抱えて飛来した。

零戦は機銃掃射を浴びせ、艦攻と艦爆は戦車に爆弾をたたきつけた。

第9章 ポートモレスビー陥落

M4戦車は日本機の攻撃を受けて次々と炎上していく。

はつきり言って戦車相手に250kg爆弾は過剰である。500kg爆弾ならなおさらである。中には2両以上巻き込んで爆発するものもある。

艦攻、艦爆は爆弾を落とすと米兵に機銃掃射を浴びせていく。零戦は対空砲に機銃を浴びせる。

爆弾、機銃を使い果たすと航空機は反転していった。

「やっと終わったか。ジャップは世界一獰猛な連中だな！」

マッカーサーは毒づいた。

「よし。こちらも航空機でジャップのあの戦車を蹴散らせ。」

これで五分になったように思われたが、米軍の戦車の残りはわずかに15両である。しかし日本軍はまだまだ戦車がいる。また戦車に阻まれ、日本兵の被害は少ない。

米軍は戦車に対抗するために重砲を撃つが、あまり数が多くないため中々破壊できない。

「畜生、なんなんだ？ジャップのあの戦車は。」

そうこうしているうちに日本軍の第二波が来た。

しかし今度は米軍がP-47リパブリック・サンダーボルトを繰り

出し、一式戦車改を蹴散らしていく。
幸いP-51の奮戦で、零戦六三型も消耗していたが、やはり米軍もP-51を消耗している。

リパブリック・サンダーボルトは欧州戦線でタンク・キラーとして恐れられたがそれは日本軍にも通用するものだった。

またP-38も編隊を組んで、爆撃機のように爆弾を撒き散らしていく。

零戦六三型はそんな中半数はM4の破壊に努め、半数は米軍機と戦っている。

日本軍は中の兵員を殺傷された戦車を特型大発に戻し、試験的に送り込んだスターリン重戦車を越える特式重戦車を残し、他の戦車を全て後退させた。

しかし特式重戦車は三両しかない。それでも生存率が高く、攻撃に於いても現在無敵の存在は、兵の士気が上がる。

「なんなんだ？あの化け物戦車は。」

前線にいた米兵は驚愕した。

まだ爆弾を残している航空隊の隊員は、瞬時に爆弾を浴びせた。

無論、戦車に爆弾を当てることは難しい。しかし至近弾となれば通常の戦車は破壊される。

航空隊の隊員は爆弾を落とすとほっとした。

しかし特式重戦車はそんなものに怯まず進撃を続ける。

「なんだ。爆弾を受けて無傷だと！」

前線の兵士は反転、避退するか、降伏してきた。

また、次々と反転した米兵を見た指揮官は兵士の話聞いて、まさかと思いき前線に出て来てそれを視認すると、降伏してきた。指令部のマツカーサーはB-24に乗り、ヌーメアまで避退する事に決めた。

一部の勇敢な海兵隊はジャングルに逃げ込んで、ゲリラ戦を展開したが、一式戦車改の残敵掃討作戦により殲滅または、捕虜となった。ここにポートモレスビーは陥落した。

捕虜となった米兵は、航空基地建設等の労働をさせられたが、残された米軍基地等で暮らすことになった。

第9章 ポートモレスビー陥落（後書き）

今回はポートダーウィン奪回と太平洋艦隊殲滅作戦のいずれかを予定してます。

第10章 第二次真珠湾攻撃（前書き）

これから更新速度が低下すると思います。

第10章 第二次真珠湾攻撃

マッカーサーはB-24に乗り込むと、慌て離陸した。ヌーメアに着くまで安心は出来ない。P-51はジークに勝るが、追ってこないという保証はない。マッカーサーは飛び立ってから何度か後ろを振り返った。背中には汗がへばりついていていた。

その頃楯岡麾下の機動艦隊はミッドウェイ沖で米国機動部隊を迎え打つつもりだったが、巡洋艦が時折通るだけで、大艦隊の気配はない。

楯岡は思いきってパールハーバーに攻撃掛けることにした。

ミッドウェイ沖ハワイ・ミッドウェイ諸島の間には楯岡艦隊は即時出撃待機命令を下していた、美雷部隊の出撃を始めた。

同時に帝鳳、神龍、鳳雷も最高速度まで増速させた。

「全艦全速前進」

この三隻の空母はいや正確には機動戦艦は72ktという驚異の速度を誇る。

三隻の機動戦艦から美雷と初戦では登場しなかった、戦闘攻撃機「極星」を出撃させた。

一方米軍はパールハーバーにロケット弾を満載した航空機を大量配備していた。

中にはB-17等重爆もいる。

前回の戦訓から数で揆じ伏せようと、考えたのだ。

また、重爆の中に何機か優秀な機上レーダーを積んでいる。

これは敵機が速すぎて、目視が難しいためである。

しかし日本軍のレーダーのほうも優秀であることを知らなかった。

フェイズドアレイレーダーに映ったパールハーバー上空には航空機の大軍が待ち構えているのだ。

「結構多いな」

今井は呟く。

美雷はアムラームを放つと、ロケット弾を満載した米軍機は10機程自軍機を巻き込んで爆散した。

しかし、ロケット弾を一齐に放つたため、7、8機が墜落した。

40機ごとに分けられた美雷部隊はバルカン砲を放ちながら、米軍機を叩き落としていく。

B-17は40%程が生存している。しかしその他の戦闘機等は98%以上が撃墜された。

「畜生、ジャップのあれはなんなんだ！」

戦闘機隊を率いる指揮官達は最期に機銃を乱射して、脱出していつ

た。

そこに極星が追い付き、残存している太平洋艦隊を攻撃、美雷は燃料タンクにミサイルを叩きつけた。

当然のことながら、日本軍は攻撃を済ますと、颯爽と編隊を組んで帰還した。

しかし美雷の喪失は手痛いものだ。未来機を失うとこの時代では増産出来ない。

確実にポートダーウィンを占領し、キンバリー大地の鉱産資源を手に入れ、アメリカを屈伏もしくは講和しなければならぬ。

連合、楯岡両艦隊は12月8日中に第一任務を成功させると、

「9日の夜明けまでにポートダーウィンへ向かう、CICの人間と航空隊の人間は十分に休息を摂らせておけ。」

楯岡がそう言うと、3隻の機動戦艦はゆるゆると変進した。

連合、楯岡両艦隊はポートダーウィン攻略に向かった。

また、アメリカの支援を失った欧州戦線の行方はどうなるのだろうか。

第10章 第二次真珠湾攻撃（後書き）

評価、感想お待ちしております。

第11章 嵐の前の静寂（前書き）

ありがとうございます！アクセスが1万を越えました。

第11章 嵐の前の静寂

大鳳指令部

「次はポートダーウィンの攻略ですね。」

機動部隊を率いる小沢は普段は厳しい顔をしているが、今回は違った。

「そうだな。次は楯岡艦隊も戦闘に加わるそうだ。」

「長官、冗談はよして下さい。ポートダーウィンからミッドウェイまで3300海里は離れてますよ。30ktでも4日はかかります。」

艦長が4日と直ぐに計算できたのは慣れで大体察しがつくからだ。

「どうやら何か秘密があるらしい。どちらにせよ航空兵力が増すことは我が軍に嬉しいことだ。」

帝鳳飛行甲板

今井は美雷のコックピットで寝ていた。

因みに美雷は酸素マスクの備えはない。直接コックピットに酸素を流し込むため、体の自由が利く。

また、美雷のシートは低反発シートのため、長時間の巡航もかなり楽である。

今井は目を覚ますと部屋に戻った。

すると、お菓子のカスが落ちている。今井はこの頃ある怪奇現象に悩んでいた。お菓子が少しずつ減っているのだ。

他に目をやると、ベッドに誰かがいる。

「誰だ？」

布団がムクムクと動いた。ベッドから現れたのは、将官服を着た少女だった。

「何者だ！名を名乗れ！」

帝鳳には女性がいるが将官は司令長官楯岡隆志大将と艦長の村松信彦少将のほか、参謀長の足立美穂中将の三名だけだ。

他の艦の将官は男しかない。女性の将官は足立中将だが違う。

今井は技術開発中将なので、将官に会ったことがある。その内の誰でもない。

「あつ。やつちやった」

今井は構えた銃を突き付け

「誰だと聞いているんだ。お菓子泥棒」

「貴方、私が見えるの？」

少女は驚いた様に聞いてきた。

「はあ、馬鹿なこと言つな見えるに決まってるだろ」

少女はあからさまにイラツとした表情を見せた。

「私はお菓子泥棒でも馬鹿でもないわ。この帝鳳の艦魂よ。覚えときなさい、今井中佐」

少女は皮肉を込めて言った。

「てめえ、なんで俺の名前を知ってやがる。艦魂ねえ…冗談きついで。シャブでもやってラリってんのか？」

「アンタねえ、誰に向かってそんな口きいてるのか分かってるの！
！」

ゴンッ

今井の頭上にたらいが落下、鈍い音が鳴る。

「いつてえ。何なんだよ」

「これが艦魂の力よ。わかった？」

帝鳳の艦魂は誇らしげに自己主張の少ない胸を張った。

「艦魂つてことは認めよう。だが、俺のお菓子を食っていい理由にはならねえ」

「なに言ってるの。私の中にあるものなんだから私の自由でしょ？」

ある意味、もつともな正論を言われ当の今井も何も言えなかった。

「仕方ねえ。それはやるよ」

テーブルの上の食べ掛けのクッキーを見て言った。

今井は袋を取りだし、クッキーの缶ごと袋に入れ、帝鳳に渡した。帝鳳は目をキラキラさせて受け取った。

「いいの？ 貴重なお菓子なんじゃ…」

今井は呆れた顔をして

「盗み食いしてたくせによく言うよ。どうせ無くなるんだ、言っておくがそれが最後の一つだからな」

「ありがとう！ お礼に私を真名で呼ぶことを許可するわ」

帝鳳は袋を抱き抱えて威張る様に言った。

「真名って何？」

「真名も知らないの？ 信っじらんないっ！」

「悪かったな、艦魂さんよ」

今井は新しいお菓子を取り出しつつ艦魂を冷たい目で見た。

「いい？ 真名っていうのは私たち艦魂の本当の名前。あんたたち人間が付けたものじゃなくて、生まれた時から決まっている名前よ。だから私たちはその名前に誇りを持っているの。その名前を呼ばし

「てあげるわ」

「いいのか？真名は大切だって、言ってるのにか」

「構わないわ。貴方の实力はよく知ってるわ。私の真名は玲よ。心を込めて呼んでね」

玲は最後にクッキーありがとうと言って、部屋を出ていった。数分後玲は2人の少女を連れて、今井の部屋に入って来た。

「今井、お菓子いる？後何か飲み物出して」

玲は何処から持って来たのか、大量のお菓子を持っている。今井は明らかに迷惑そうな顔をした。

「玲さん、なぜここに？」

「いいじゃない。ここ以外寛げる場所ないんだから。私当分ここに寝るからよろしく」

玲が言ったことを理解しきれないまま、今井は仕方なく紅茶を出した。

「あなたが今井中佐ね、未来での活躍は聞いてるわ。うちの飛行部隊にも欲しいな。どう、来ない？」

現代風の少女は今井を勧誘してくる。

「ところで、あなたは玲に真名で呼ぶことを許されたみたいね。玲

が良いなら私も教えてあげる。私は神龍の艦魂の希よ。」

もう一人は今井を睨んでくる。今井は嫌われていることを、悟った。今井が目を逸らすと、少女が初めて口をきいた。

「あなた、いま目を逸らしたでしょ。大体玲も希もこんな雑魚に真名を教えるなんて…。私はあなたを認めないわ」

すると玲は、初めからこうなることを見越した様に言った。

「じゃあ、泉の得意な剣道で勝負したら。それなら泉も認めるよね」

泉は即答した。

今井に拒否権はないため、鳳雷との決闘が決まった。

第11章 嵐の前の静寂（後書き）

次は今井vs鳳雷です。

感想、評価お待ちします。

第12章 今井vs鳳雷(前書き)

どうでもいい内容です。

第12章 今井vs鳳雷

道着に着替えた今井と鳳雷は、帝鳳の中にある訓練場の一角で再び向かい合った。

審査員は神龍である。

双方は蹲踞の後、神龍の「はじめ」の宣告と同時に鳳雷の喉元を抉るような突きが、今井を襲った。

「突きいいい！」

パアアアアン

今井は間一髪で鳳雷の竹刀を弾き、距離をとる。

再び鳳雷は今井の面を取ろうと高い位置から一気に竹刀を振り下ろす。

「えええい!!！」

一気に鳳雷は間を詰めてくる。今井は後退し、間合いをとる。

2分程このような攻防が続き、竹刀の刃部が捲れ始めたので、神龍は休憩がてら中断した。

「はじめっ!!！」

神龍の掛け声と共に、鳳雷の中段構えからの面が今井に叩き込まれる。

今井は霞の構えから鳳雷の面を防ぎ、

「面!!!!！」

今井の短い声とともに、鳳雷は引き面を受けた。

「面あり！」

判定が宣告され、二本目が始まった。

鳳雷は流石に今井は強い、と思った。絶対的な自信があつた剣道で、人間に一本取られるとは思ひもしなかつた。それどころか、格上だと思えるほどだ。

「けど・・・前へ」下がって得られるものなど何もない。格上相手なら、狙ってラッキーパンチを拾うしかないのだ。

「突きっ！！」

鳳雷が打つのが速いか、今井の突きが鳳雷の喉元を襲つた。

「突きあり！」

二本目は、流れに乗つた今井が一瞬で決めた。

一本目を取るのに時間がかかり、面の中は汗で蒸れており、面夕オ
ルも汗で濡れていた。

今井が勝つたことにより、鳳雷は真名を教えることとなつた。

「貴方結構強いわね。約束通り私の真名を教えるわ。既に玲が言っ
たけど、私の真名は泉よ。よろしく

」

今井と鳳雷は握手をして、また軍服に着替えた。

「じゃあ、アメリカ力艦隊壊滅を祝ってパーティを再開しよう」

やけにハイテンションな帝鳳が疲れている二人をよそに、今井の部屋に行こうとした。

「玲さん、まさかパーティーって俺の部屋でするの？」

「もちろん」

第12章 今井vs鳳雷（後書き）

霞の構えなんかほとんど使う人いません。
評価・感想・ダメだしお待ちしています

第13章 ガトー級の悲劇

「それじゃあ、アメリカ艦隊壊滅を祝って乾ぱい」

帝鳳が乾杯の音頭をとる。

ウウ~~~~

艦内にサイレンが響く。

「敵潜警戒、敵潜警戒。対潜戦闘員各所第一種戦闘配備」

*第一種戦闘配備・・・対潜戦闘における、聴音手・ソナー員の増員。及びアスロツク短魚雷発射用意

「なんだ敵潜か。どうせガトー級でしょ。」

神龍はつまないと不貞腐れている。

「ちよつとCICに行つてきます」

今井は席を外した。

帝鳳CIC

「今井か、ちよつど良かった。シーウルフで対潜警戒はつといてくれ」

楯岡はモニターを見ながら短く命令を下した。

帝鳳など機動戦艦はすべて人員が少ないため、兼任することが多々ある。特に上位官であるほど任務が増える。

「長官、わざわざガトー級数隻相手にシーウルフは必要ないかと思えますが。特に今井は明朝から航空隊を率いてポートモレスビーに向かいますので」

足立は今井の身を案じて進言した。

「いや、確かに彼は優秀だが実戦経験を行うことは彼のためだ。この程度でくたばっちゃあ、それほどの器だったってことだが。大丈夫、彼ならちゃんと任務をこなしてくれるよ」

そういつて楯岡もCICから出て行った。

長官室

「涼介、今井に任務を任せただしょ」

今井の部屋にいたはずの帝鳳はいつの間にか長官室に戻っていた。

「なんだ、玲も今井のこと知ってるのか。今井ならお前のことが見えてもおかしくないな。何してたんだ？」

玲は聞かれなくなかったことを聞かれたため、顔をしかめた。

「実は今井の部屋でおやつを盗み食いしてたら、見つかったやつだ。」

「ハハッ。それはいかんぞ。大体お菓子ならここにもあるだろ。」

「だって、あっちのお菓子のほうがおいしんだもん。あと泉と剣道してたの。今井って剣道強いよ、泉に勝っちゃった」

帝鳳は自慢げに話す。

「それはすごいな。俺も勝てなかったんだがな」

楯岡は玲の話聞きながら、コーヒを飲み終わるとUSBを持って慌ただしく部屋を出た。

帝鳳CIC

「長官戻られたんですか」

「ああ。敵潜はどうした？」

モニターにはシーウルフとガトー級4隻、機動戦艦3隻の現在地が示されている。因みに時滑計画で送り込まれたのは、機動戦艦3隻と強襲揚陸艦2隻の他に人工衛星3基も送り込まれている。

「見ての通りです。そろそろシーウルフが射程内に入りますが、攻撃させますか？」

「もちろんだ。偵察機もあれば落とすとしていいと伝えておけ」

「今井中佐、CICより敵潜迎撃命令が下りました。アスロツクの発射用意はできております」

「よし、攻撃開始」

シーウルフから4発のアスロックが発射された。

「艦長、魚雷音が近付いております」

ガトー級潜水艦「ブルーフィッシュ」の聴音手はスクリー音をとらえた。

「馬鹿言つな。聞き間違えだ、そんなことがあるものか。耳の掃除でもして来い」

艦長は聴音手のいうことを全く無視して罵った。

「魚雷接近、自艦に衝突します！！」

聴音手の悲痛な叫び声のあと、ブルーフィッシュはシーウルフの雷撃を受け鈍い爆発音をあげ圧碎された。ブルーフィッシュの乗組員のせめてもの救いは痛みは一瞬で過ぎ去ったことだ。

同様に他の潜水艦もアスロックの攻撃を受け沈んでいった。

「帰還するぞ」

シーウルフは爆発音を確認すると帝鳳に戻っていった。夜間のため偵察機との接触はなかった。

第13章 ガトー級の悲劇（後書き）

今日学校に行ったら23人も休んでいたので学年閉鎖でした。家で
食べる弁当って寂しい（笑）

明日も更新する予定です。

感想などよろしく願います

第14章 キンバリー台地陥落

9日早朝、機動戦艦3隻のカタパルトが放電し始めた。

「山城、そろそろ行くか」

出撃待機命令を受けた今井と山城は、ヘルメットを持って艦橋を降りて行った。

キイイイイイン

電磁カタパルトは甲高い金属音を上げながら、美雷を発艦させていく。

一方連合艦隊も夜明けを待って、零戦を発艦させた。

「ポートダーウィンか・・・キンバリー台地まで一気に近づくな」

「センパイ、昨日の夜ほとんど寝てなかったらしいですけど、大丈夫ですか？」

「ああ、敵潜警戒で出撃したことが。あんなことで疲れてたら軍人なんかやっつてられんよ」

今井も山城もこれから戦闘だというのに、それほど重い空気はない。美雷部隊は零戦隊より先に到着したため、美雷は高射砲を主に破壊した。さらにポートダーウィンに配備されているP-40やP-38はまだ滑走路に並んでいる。美雷の空襲は完全に奇襲となり、こちらにダメージはない。

「ちっ。張り合いがねえな」

「センパイ後で模擬空戦でもしますか」

「センパイはやめろっていっただろ。あと、まだキンバリー台地への空襲がのこってるだろ」

美雷隊が帰還しようとしたとき、零戦隊が到着した。

「仕上げは我々がやる。ご苦労だ」

無線の声は源田中佐だ。零戦隊は既に燕のように飛び回っている。邪魔するものは何もなく。オーストラリア軍はアメリカの手を借りていたが、軽く一蹴された。

空襲が始まったところ、強襲揚陸艦兼機動戦艦「飛龍」「蒼龍」は第一戦隊とともに大和の出せる27ktでポートダーウィンに接近した。また機動部隊は機動艦隊の護衛の下、ポートモレスビーに戻った。

攻略部隊は、まず大和を含む戦艦の艦砲射撃のあと、飛龍と蒼龍のみの単独行動となる。

ポートモレスビー攻略と同じように、特型大発により、戦車や歩兵を大量に送り込んだ。ここでもまた、特式戦車は高い能力を発揮し、イギリス戦車を蹴散らした。

まさか、上陸されるとは思っていなかったオーストラリア軍の兵士は、艦砲射撃だけでも戦場恐怖症にかかるものが続出したが、負傷者などを含め、カシユアリティ損害は35%を上回った。

「よし、ここで一旦進撃を停止する」

戦車連隊長は歩兵や一式中戦車の陸揚げを待った。キンバリー台地

の占領は中々難しいだろうと踏んでいた。しかし、タフな米兵と違いのんびり屋のオージー（オーストラリア人）はキンバリー台地の防衛線をともに構築していなかった。

特式戦車3両を先頭に戦車連隊30両と歩兵部隊5000人は、かつてのドイツ軍の電撃作戦のごとく進撃した。

「進め！進めえ！！」

連隊長は叫ぶ。すさまじい速度で進撃する攻略部隊の上を、零戦など航空隊が支援する。

しかし、そこに大量のF6Fが立ちはだかった。このF6Fは軽空母部隊から送られた、米軍の隠し玉だ。

しかし零戦は、更に改造されてF6Fと互角に戦うことのできる七五型であった。それでも一式戦車は数量破壊されてしまった。また、オーストラリア軍もかつて砂漠のネズミと謳われるほど、高い潜在能力を発揮する。そのため、生き残ったものはゲリラ戦を展開した。

しかし、さすがに日本兵は白兵戦に強い、日本刀や銃剣を振りかざしゲリラ兵を殺していく。

さらにF6Fも退却していった。

キンバリー台地を目前にして日本軍にM4シャーマンの大部隊が立ちはだかった。大体200両は超えているだろう。またこのシャーマンは、欧州戦線で活躍した100mm砲を持つ戦車である。

それでもシャーマンごときでは、特式戦車の敵ではなかった。端から一両ずつ破壊された。シャーマンも最期に一式中戦車を道ずれに消えていった。最後の切り札を失った豪軍・米軍は撤退し、キンバリー台地は占領された。

第15章 烈風現る

「ということで、米国機動部隊及び、ポートモレスビー・ポートダーウィン・キンバリー大地の占領に成功しました」

「それについて、私の方から御願いがありません」

「何じゃ？申してみよ」

東条英機は持ち前の高い声で聞いた。

「はい。強大な米国は次々と艦隊を再建しているため、此方も艦隊計画を考えております」

小沢は強い口調で言った。

「かつて、ワシントン海軍軍縮条約で立ち消えとなった、八八艦隊計画です」

「成る程、ここ数日のそちらの活躍には陛下も御喜びだ。よかろう、そちらの更なる奮迅を楽しみにしておる。その為なら、助力を惜しまんつもりだ。下がってよいぞ」

楯岡と小沢は東条の執務室から出ていった。

「それにしても小沢さん、八八艦隊計画とは大きく出ましたな」

「八八艦隊計画ならば、中断しても十分な艦艇が手に入りますからな。その為には楢岡さん、貴方の力が必要です」

「それについてだが、技術開発局の人間に掛け合ってみますか」

技術開発局は、空軍設立と共に空軍基地に創られた、技術開発部の本拠地であり、未来の人間の居住地である。二人は雑談を交えながら、技術開発局長・葛城仁^{カツラキヒトシ}技術大将のもとに向かった。

トントン

「どなたですか？」

中から低い威厳のある声が聞こえてきた。

「楢岡です」

「楢岡さんですか。ちょっと待ってください」

30秒くらいすると、40代くらいの男が現れた。

「はじめまして、小沢中将ですね。葛城です」

「此方こそはじめまして。小沢治三郎です」

「八八艦隊計画ですか……。予算にもよりますが、やはり空母の建造が最も高くなりますね。しかしで

きれば名前が名前のため空母は造りたいですね」

「はい、戦艦はあまり必要ないでしょう」

「大艦巨砲主義は廃れた文化ですからね。機動部隊に正規空母は3隻しかありませんからね。こちらとしても、空母の建造は必要です」

小沢と葛城だけで話は進んでいく。元々楢岡は葛城博士にはようがなかったもので、端でコーヒーを飲んでいた。

「空母はとりあえず、天城と葛城の建造ですね。」

既にこの頃昭和十六年度戦時急造計画によって、雲龍型空母二番艦・三番艦『天城』『葛城』が就役していたがこの2艦は那須と岩木に改名されていた。

「そつえば楢岡さん、試作烈風が完成しました。液冷エンジンを搭載しましたので、最高速度が374.7ktを記録しました。武装は20mm機銃4丁を予定しています。航続距離は2200kmというところです。格納庫にありますか、見ますか。」

格納庫から現れた機体は、液冷エンジン特有の流麗な機体を持っているが、飛燕より重厚な機体であり、見た目は米軍のP-39エアロコブラのようなものであった。

第15章 烈風現る（後書き）

実際の烈風とは違います。もちろん史実の烈風より優秀な機体です。ご意見、ご感想お待ちしております。

第16章 烈風デモ飛行

小沢中将は驚愕した。

飛燕・彗星は同じ液冷エンジンだが、零戦と大差ない能力である。しかし、この烈風は軍の要求を軽く上回るのだ。

「これからデモ飛行を行いたいのですが、誰か優秀なパイロットはいませんか？」

「私から推薦してもよろしいですか？」

小沢が名乗り出る。葛城はどうぞと行って、小沢から推薦された菅野直が現れた。

「自分でよければ喜んでやらせていただきます」

菅野はそう言って烈風に乗り込んだ。

烈風は中も広く作られており、無線機も小さく零戦のように重く邪魔なものではなくなっている。烈風は滑走路に入り、250mほどで離陸した。

烈風はぐんぐん上昇していき、ほとんど見えなくなった。言い忘れていたが、烈風には酸素ボンベも取り付けられている。雲が縦横に描かれている。また旋回すると零戦よりはるかに小さい半径で旋回した。

その後も菅野はアクロバット飛行を楽しんで降りてきた。

菅野は顔をすこし紅潮させて烈風からでてきた。

「どうだったかね？」

「とても乗りやすいです。座席も広く零戦よりはるかに乗りやすく操縦もしやすいです。何より上昇力が素晴らしいです3万フィートは軽くいけます」

葛城は少し顔をほころばせた。

「気に入っていただけたようですね。小沢さんどうされますか？ すぐにも量産を始められますが・・・」

「もちろんです。しかし、できれば新たに建設された工場で作らせていただきたい」

「構いませんよ」

結局空軍基地は今まで通りミサイルの量産を続けることになった。また、烈風は三菱淡路島工場で量産されることになった。

「……………玲さんなぜここで寝てるんですか」

「ううん……………何？」

「（イラッ）なんで俺のベッドで寝てるんですかと聞いてるんです今井は眉間に皺を寄せて迷惑そうにしている。」

「あれ？聞いてなかったの。あたし当分ここに寝るって言ったはずだけど……………」

「どつでもいいからどいてください。ここで寝たいならベッドでも持ってきたらいいじゃないですか」

「ブ、良いじゃんケチ」

ぶつぶつ言いながらも、帝鳳はベッドを持ってきた。ようやく今井は寝ることができた。作戦が重なり中々仮眠をとれなかったため、すぐに眠りについた。

「あゝまた負けた」

「次は、希がアメリカやつてよ」

どうやら、戦記シュミレーションゲームをしているようだ。しかしソ連が勝つとは不吉である。

「今度こそ、大和魂を見せてやる」

玲は意気込んでいる。

「・・・・・・・・」

寝ぐせでクシャクシャになった今井が3人を睨んでいる。

「いい加減にしてください」

「そんな一緒に遊んでももらえないからといって、ヤキモチやかな
い」

ふざけた口調で神龍が言った。

「焼いてません」

今井は物凄い形相で睨んだ瞬間、鳳雷は転移していなくなった。

「あっ」

「まあまあ、今度あたしが一緒に寝てあげるから」

またも神龍は今井の神経を逆撫でする発言をした。

「そんなことしなくても結構です」

今にも怒り出しそうな顔を見て

「ごめんごめん、今度神龍にも誘ってあげるから」

今井はあきらめて、白衣に着替えた。

「どこ行くの？」

玲がきく。

「技術開発局。新しい艦戦の設計が残ってるので」

そういつて部屋を出ようとすると神龍があたしも行くと言い出した。

どうしようかと思ったが、転移させてくれるそうなので、仕方なく帝鳳と神龍も一緒に行った。

第16章 烈風デモ飛行（後書き）

感想などお願いします。

第17章 技術開発局

「はあ、ダメだな」

「何やってるの」

床を蹴って、椅子のままコーヒーを入れる。

「ジジくさ〜」

「希さんうるさいですよ。彼方達のせいで疲れてるんですから」

ガチャ

「おはようございます」

入ってきたのは沖田である。

「……………」

「……………」

「……………」

部屋に変な空気が漂う。

「彼方達だれ？ココの人間^{ヒト}じゃないみたいだけど」

「ああこの2人は艦魂。簡単に言えば、艦^{フネ}に宿る守り神だ。周りの

奴には見えていない」

今井はサラッと紹介する。因みにここにいるのは、艦魂2人を含む4人だけだ。

「はじめまして、技術開発局副局長・技術開発中將の沖田沙紀です」とりあえず沖田は自己紹介をする。

「はじめまして、私は機動戦艦『帝鳳』の艦魂です」

「私は機動戦艦『神龍』の艦魂です。よろしく」

「ところであなたはいい加減設計ぐらいはできたよね」

「いや、まだ」

「あんたいい加減にきなさいよ、ゲームなんか作る暇あったら、さっさと仕事終わらせなさい」

沖田は呆れた顔をしている。今井はそんなこともそっちのけで、ゲームのプログラミングを続ける。

「そつえば、長門の改装終わったよ」

今井はあっそつとそっけない。気づけば今井はパソコンでゲームをしている。

ボッコ

「っ痛つてえ」

「ちゃんと仕事しなさい」

「ちっ」

「遙ちゃんは朝からちゃんと、トレーニングしてるのにあんたはほんとに怠け者ね」

沖田は本を持って出て行った。

「はあっ、面倒くせえ」

「ねえ今井。何に行き詰ってるの」

帝鳳が声をかける。

「言いません。機密事項ですから」

今井はきつぱりと言い切った。

今井が開発している第7世代戦闘機は、最低でも2つの新しい能力が必要である。

要求される能力は、ビジュアル・ステルス光学迷彩を含むステルス・無人・運動性能・レーザー砲などのうちの2つである。

無論、これには今井が搭乗するためステルスと運動性能がなければ第7世代戦闘機とは呼べない。

第7世代戦闘機と呼ばれるためには、他に超越した能力が必要不可

欠なのである。

今井は当初の予定を変更し、レーザー砲もしくは大口徑機関砲と卓越した運動性能に焦点を絞りなおした。

沖田は初めからレーザー砲を搭載する予定だったため、設計が終了しているのだ。

しかし1000年先といっても現在はネズミ1匹殺すのに30分かかるのでは、レーザーで鋼鉄を撃ちぬくことなどできるのであろうか。

ましてや、電波吸収素材を用いた場合、レーザーも光の一種のため威力は半減することは目に見えている。

それならば大口徑機関砲の方が信頼できる。しかし、弾数に制限がある機関砲と際限なく撃てるレーザー砲ならばレーザー砲が有利である。

今井の設計はまだまだ続きそうだ。

第17章 技術開発局（後書き）

評価・感想お待ちしております。

拙い文章ですがよろしくお願ひします

第18章 金剛被雷

ボタン

突然、技術開発局のドアが開いた。入って来たのは自分の部下で会った。

「今井隊長！シーウルフでの対潜警戒命令です。呉軍港で金剛が被雷しました。その他軽巡3隻等、7隻が被雷しました」
今井は今日は非番だったため、通信機を持っていなかった。

10分前、バラオ級潜水艦『アトウル』

「方位二八〇、開口角30度、前部発射管6発」

アトウルは6発の魚雷を発射した後、80mの深みへと潜っていった。

アメリカのこの作戦には、計10隻の潜水艦が動員された。他にもバラオ級3隻、ガトー級6隻の潜水艦は、軍港の各ドックに狙いを定め日本艦艇に雷撃した。

潜水艦を沈めるはずの駆逐艦デストロイヤーが雷撃を受けたため、反撃できなかった。

呉に停泊していた艦艇の内雷撃を受けた主要艦艇の金剛は艦尾に直撃はしたものの、舵やスクリューに損傷はなく、浸水はわずかだった。

帝鳳の乗組員の2割、つまり130人も航空隊隊員がいるのにもか

かわらずシーウルフ3機の中に非番の人間を入れるのかというと、簡単な話、統率が取れないからだ。

だからと言って上級将官をむやみに戦地に送り込むのは危険が伴う。しかし、航空隊員のほとんどが20歳前後という中、士官だけ出すよりは生還率が高いからだ。もっとも潜水艦がへりを落とせるものは機銃か主砲だけであるが。

「命中音確認。二次攻撃行いますか？」

「もちろんだ、攻撃は反復しろ。ソナー員スクリー音にも気をつける」

艦長が海図台に肘をつく。

再びアトウルが浮上を始める。金剛はまだ沈んでいない。

「潜望鏡上げ！」

副艦長が潜望鏡のハンドルを開き、アイピースに目を当てる。

潜望鏡は蒼天を仰ぎ航空機がないかを調べる。

バリバリバリッ

不意に上空からエンジンの爆音が聞こえた。

「上空方位〇六七、奇怪な飛行物体」

副艦長の叫び声が艦内を騒然とさせる。副長が見た奇怪な飛行物体は、当時で言うオートジャイロに近いものだったが、彼がそんなことを知る由もない。しかし、彼の軍人としての直感がコイツはヤバ

い。と言っているのだ。

「潜望鏡下げ！急速潜航！メインバラスタタンク、ベント開放！」
艦長が叫ぶ。

バラオ級は優秀な潜水艦といえど、完全潜航には1分ほどかかる。更にベントの開放は浅い瀬戸内海に着底、損傷しかねない。つまり、慌てて潜るあまり、着底、損傷しかねない。しかし、今はそんなことを言っている場合ではない。

潜望鏡はスルスルと収納されて、アトウルは仰角7度で沈み始める。それがアトウルの最期だった。シーウルフが機雷を投下し、

「敵機、爆雷投下！」

「総員、衝撃に備えエー！」

爆発の衝撃で怪我をしないよう、いつでも体を支えられるために近くにある手すりなどに手を掛けた。最初から体を押し付けると、逆に背骨が直に衝撃を受けて骨折しかねない。

爆雷が艦殻にあたり、艦艦と音がする。そのまま更に深くに沈み、その直後爆発し、アトウルは海面に躍り出た。機関は損傷し、艦殻は破壊されている。

乗組員は重油まみれの海面で、浮遊物につかまり助けを待つしかなかった。

そこに日本の駆逐艦が現れた。

急遽新しく建造された夕雲型の改良版、吹雪型の二番艦『旋風』^{ツシカゼ}だった。未来のソナーを搭載し、2009年現在のDDに劣らない対

潜能力を持つ。

乗組員は駆逐艦に拾われ、中でコーヒー（もちろん大豆を焼いて作ったようなものではなく、酸化が進み香りが薄くなつてはいるが純粹なコーヒー豆を煎ったもの）を渡された。アトウルの乗組員は、学校で習った日本人とは違い、人道的な日本人をみて戦うべきはむやみに人を殺すドイツだったと痛感した。

艦長に選出された、史実でのガトー級潜水艦『アルバコア』の艦長ブランチャードは海面に投げ出された際、重油を飲んでしまい、医务室で点滴を受けていた。

「体調如何ですか？」

流暢な英語で軍医と思われる青年は尋ねてきた。

視界が霞み、吐き気を催すが、自分が生きていることは分かった。

「視界が霞む、後吐き気もする」

「そうですね。重油を飲んだようですから胃洗浄を行いました。吐き気も視界も少し経てば回復するでしょう。安静になさってください」

気づけば胸ポケットにしまっていた家族写真が写真立てに飾られている。

史実では彗星艦爆に阻まれながら、空母大鳳を沈めるといった大戦果をあげ、戦場にかりだされると、捕虜になり労働はあるが一人の人間として暮らせるようになったこちらと、どちらの方が幸せだったのだろう。

第18章 金剛被雷（後書き）

うまく日常がかけずに、ごまかすために戦闘を入れました。

雷撃深度一九・五を読んで、潜水艦を登場させようと思いました。

親が作家だとか関係なく、デビュー作の割に完成度が高いなと思った作者でした。

評価・感想お待ちしております。

第19章 誓い(前書き)

半分読み切りっぽいです

第19章 誓い

ズガーリーン

軌道エレベーター『バベル』が崩壊する。

米軍機St・Vampireがヨーロッパ全土に林立する中で、ドイツの軌道エレベーターにミサイルを発射したのだ。

世界のショックは大きかった。無論、長年アメリカの犬と成っていた日本は気付いていた。

「いつかやるだろう」と・・・

その為に軍事同盟を結び、世界通貨を\$からユーロに変え、アメリカに経済制裁を加えた。

無論すぐに功を奏すものでは無いため、アメリカは強行策に出た。

アメリカは第6世代戦闘機群『五七航空機部隊』つまりF-58E vil・Venusがイギリス本土に攻撃をしかけた。

更にB-4 Invisible・Lionによる、超高度精密爆撃とミサイル攻撃を行った。

しかも、空母『ウィリアム・ハルゼー』が、エスコート艦を連れて、地中海で暴れだした。

対してイギリス・フランス・ドイツ等EU加盟国ほか、ヨーロッパ・アジア諸国は世界連邦帝国を創設した。連邦帝国軍はロシアの空母『モロトフ』、『クズネツォフ』が、地中海で戦闘を繰り広げた。

しかし結果モロトフ小破、クズネツォフ中破、ハルゼー大破だった。実質的敗退である。

何しろ排水量が違う。ハルゼーが満載排水量113450tに対し、モロトフ・クズネツォフは86500tしかないのだ。

艦載機の質も違う。

アメリカが最新鋭の第五世代戦闘機F/A-38を使用しているのに対し、第五世代戦闘機の先駆けという程度のSu-42CBAである。

しかし対空砲火の密度では、連邦帝国側の方が高い。何しろ護衛艦艇の数がアメリカは20隻しかないが、空母二隻に100隻を超える艦艇がいる。

合計排水量はアメリカ側228450t、連邦帝国側636500tである。

空母『摂津』、『薩摩』、『日向』

たぐさんの軍人が、空母他、護衛艦艇に乗り込んでいく。ほとんどの人間が25歳以上のベテランである。

既に日本軍は3隻の護衛艦と1隻の小型空母を失っている。

ベテランといっても質が落ちている。

「時滑計画か・・・この時代で戦わせてもいいのにな。歴史を変えられるのか」

一〇〇号艦、後の帝鳳の艦首で今井は呟いた。

「義父さん・・・」

今井は幼いころに両親を失った。事故でも事件でもない。原因は不明・・・

そこそこ裕福な夫婦に引き取られ、私立学校に通った。

中退する羽目になり、夫婦に迷惑をかけまいと家を出た。しかし対米戦により、夫婦までも失ってしまった。これはその夫婦の娘、今井の義姉から教えられた。

ミッドウェイ攻撃。日本軍実に3度目の作戦である。

一度目は言うまでもなく1942年のMI作戦、義父を失ったミッドウェイ主要艦艇撃滅作戦、そして次期作戦MO（ミッドウェイ・オアフ方面同時攻撃）作戦である。

今井はアメリカが嫌いだった。

国益しか考えない、貪欲な精神が嫌いだった。

熊本から兵庫に移ったとき、あの夫婦に引き取られたとき、今井は幸せだった。

綺麗な義姉、精悍な義父、優しい義母、何もかも幸せだった。

それが一瞬にして砕かれた。

今井にとって、MO作戦は一種の仇討ちだ。

これ以上、アメリカに覇権を握らせるわけにはいかない。そう思いながら、シーウルフで機雷を投下するのだった。

これ以上、親しい人間を失いたくない、この命に変えても。そう誓った。

この蒼天に死すとも

第19章 誓い（後書き）

如何だったでしょうか？

くらまの事故、残念です

評価・感想お待ちしております。

第20章 ガトー級の厄日・長門、信濃進水

「ソノブイに反応あり。前方20度、600mです」

乗員が報告する。

「爆雷投下」

今井は静かに命ずる。

「爆雷深度はどうしますか？敵潜の深度は大体65mですが」

2100年当時、ソナー・MADは敵潜の深さも正確に探知することができ、ソノブイは音響だけでなく金属探知の機能も付いている。また敵潜と判断すると、ソノブイやソナーは見失わないように音源を追跡する。

「70mだ。出来れば鹵攪したい」

「敵、爆雷を投下しました」

「何？駆逐艦はいないはずじゃなかったのか。とりあえず1000mまで潜れ」

艦長ディセットは困惑した。

カーン

爆雷が艦殻に当たる。

「爆発に備えろ！」

艦長が叫ぶ。

ズガーン、ズガーン、ズガーン、ズガーン

立て続けに爆雷が爆発する。

潜水艦は海面に投げ出された。艦殻が破壊され、潜水ができなくなった。

「上がれ、上がれ！対空戦闘用意！」

乗員はライフジャケットを着て艦橋に駆け上がる。

しかし次の瞬間、潜水艦は横転した。乗員は海に投げ出され、潜水艦が爆発を起こす。

爆発でバッテリーが損傷し、そこから火花がでて弾薬庫に引火したのだ。爆発に投げだされた乗員は、ほとんどが爆発に巻き込まれ死亡した。

デイセットも中に含まれており、生存者は5人だった。

「後はほかに任せて戻るか」

「この海域には、まだ1隻残っていますか」

「関係ない、今の爆発音を聞いて慌てて尻尾巻いて逃げてるだろ」

パイロットは納得したのか、進路を戻し取りあえず呉に戻ることに

した。

他にも今日はガトー級4隻・バラオ級2隻が撃沈された。合計で50人以上の米兵が捕虜となった。ほとんどがただの水兵で10代というところだった。度重なる敗北で、大量にベテランを失い戦争末期の旧日本軍に似た状況となりつつあった。

一方横須賀の造船所では、信濃(空母)が就役し、最高速力33・4ktと現在最大の空母となった。同時に大和・武蔵も速力の向上を目指し20万馬力となり、32・8ktと機動部隊に随伴できる速力を出せるようになった。長門も大幅な改装を受け、艦載機数65機+予備機10機・速力33・5ktとこちらも強力な空母である。更に、バルジも張られており耐久力もある。無論飛行甲板は重装甲となっている。

長門は既に進水式を済ませ、試験航行中だった。

「速い！これが長門なのか」

水兵たちは歓声を上げる。ほとんどが戦艦のころから長門の乗組員で、3カ月の訓練を済ませている。

もとの長門より8kt(約15km/h)も速い。

これにより第一航空戦隊からは、翔鶴・瑞鶴が抜け「信濃」「大鳳」2隻に。第二航空戦隊に「長門」「翔鶴」「瑞鶴」の3隻になった。護衛艦は第一航空戦隊には、第一戦隊「大和」「武蔵」が。第二航空戦隊には、第二戦隊「金剛」「榛名」となった。この2艦も改装され、速力31・1ktとなった。

今回、帝鳳型3艦と飛龍型2艦は再びパールハーバーへの攻撃に向かうこととなっている。

画して機動部隊は再編され、1945年1月17日ミッドウェイ攻撃が決まった。

第20章 ガトー級の厄日・長門 信濃進水（後書き）

ご意見感想お待ちしております

第21章 Can't to enjoy X·mas

帝鳳型3艦はマリアナに移り、クリスマスを迎えていた。

マリアナにも機動艦隊専用の基地が作られ、50機のジェット機が配備されている。

これは、美雷だけだと搭乗員に負担が大きいのので、未来から運ばれた雷燕である。速力が美雷に勝る代わりに、運動性能を放棄している。

元々、ミサイルを使うことが多い時代に運動性能はあまり追及されない。第4世代戦闘機には運動性能の向上によって、ミサイルの回避を行っていたのだが。

雷燕は高いステルス能力を誇り、更に攻撃力においてはF-22ラプターの2倍を超える。

ただし、離陸距離は補助エンジンの熱核ロケットを用いた時の離陸距離も800mもある。

この離陸距離は、現中国軍の殲撃8型（J-8）の離陸距離よりも長い。

マリアナ機動艦隊基地

「寒い。なんで南洋基地だからといって冷房利かせるんだ。一応冬だぞ」

ここ基地内の温度は12度しかない。もちろん部屋ごとに冷暖房は別々にあるのだが、基本的にコントロールセンターで制御されている。

こここの部屋は5人一組で1部屋になっている。今井のいる部屋は今

井の他二名しかいない。これは階級ごとに部屋分けされており、一応将官クラスでも少将以上の人しか入れない。

そのため、部屋の人間は今井の他技術開発局長、葛城大将・黒川中将の2人である。

葛城大将は既出のため読者の皆さんもご存じであろう。

黒川中将は機動艦隊整備部隊長いわゆるダメコンチームの隊長である。

今井と同級生であり、整備をするうちに艦魂が見えるようになった。現在は鳳雷に座乗している。アメリカ軍と同じくこの部隊は優秀なダメージコントロール能力を誇る。整備といっても、損傷個所の処置だけでなく実際に艦の建造、戦闘機の製造にもかかわっている。

「ハッピーニューイヤー!!!」

帝鳳が叫びながらクラッカーを鳴らす。

「いや、違いますって。今日はクリスマスですよ」

始まって早々帝鳳のボケが炸裂する。

「まあ、ケーキ入刀おー」

今度は黒川のボケが炸裂。

「それは結婚式だろ。まあいいや」

今井は突っ込みつつ先にケーキに手を伸ばす。

先にも言ったが今井は甘いものに目がない。このケーキも今井と福田が作ったものだ。

ほどなくして、今井はケーキの半分（3534cm?）を食い尽くし、部屋を立ち去った。

屋上に上がり、涼しくなった南洋の風が頬を撫でる。

「君は皆と一緒に参加しないのかい」

楯岡が今井に声をかける。

「長官……」

「君はもう中将なんだ、長官は止してくれ」

軽い口調で楯岡が話す。

「口にクリームが付いているぞ君らしくないな」

今井はあわてて口を拭い、再び空を仰ぎ見る。その目は星空を見つめたまま動かない。

「そついえば君は艦魂が見えるそつだねこの前、泉が君の剣道の腕を絶賛していたよ」

「それほどでもありません。いくら泉さんが強いと言っても、同じように体を鍛えていれば男の方が基礎体力が高くなるのは分かり切ったことです」

そうか・と楯岡は納得したように頷いた。
噂をすればなんとやら、鳳雷が現れた。

「泉、どうしたんだ。お前もこんなところに来て」

「ただ涼みに来ただけです。あなたは何ですか？酔っぱらった姿を部下に見せるなんてはしたない」

鳳雷は冷たく言い放った。

「厳しいなあ。一応俺の方が上官だぞ」

「今のあなたはただの酔っ払いです。ところで今井は何してるの」
空を見上げる今井を見て鳳雷が尋ねる。

「恋煩いさ」

「違います。下手な冗談は止してください」

楯岡はデスクワークに戻った。

「何黄昏てるの？」

「いえ。今日は義姉の誕生日なんです。多分もう死んでると思います」

鳳雷も2100年の酷い戦争を見た。実際、機動艦隊とは別に作られた護衛艦艇の艦魂で、仲の良かった者を失った。

たった一国相手にこれ程までの損害は信じられなかった。ロシアでさえ、艦艇の逼迫が危惧されるほどの被害を受けた。

「くだらない……」

今井は呟く。

今井がじつと見つめていたのはオリオン座である。義姉は天文学者になりたいと、両親が死んでからも幼少のころからの夢を追い続けていた。

当時まだ徴兵令は出ていなかったが、殆どの成人は従軍しそして死んでいった。大国といってもたかが知れていると思うかもしれないが、半世紀以上にかけて軍備拡張を行った米軍はもはや一国の軍等というレベルを超え、歯向かう者は皆殺しというところだった。

「私は、くだらないとは思いません。今井の姉さんだって信念を持って戦っていたんじゃないのですか。それを蔑ろにすることはないと思います」

鳳雷は初めて強い口調で話した。

「死んだら元も子もない。人間は道具じゃないんだ、国が国を守る

ために人の命を忽ゆるがせにして良いもんじゃない。それに……」

今井は静かに言った。

「信念よりも命の方が大切だ、命あってこそその信念じゃないのかよ」

今井は泣きそうだった、悔しさ・悲しみそして憎しみ……。

「それは……」

突然声を荒げる今井を見て鳳雷は困惑した。

「いいよ、何も言わなくて。分かってるんだ、自分でも。悪い泉さん、変なことにつき合わせて。忘れてくれ」

そう言って今井は施設内へと入って行った。

第21章 C a n ' t t o e n j o y X · m a s (後書き)

頑張って長く書いたつもりです。
シリアス要素が難しいです。

評価感想お待ちしております

第22章 新鋭戦艦アイオワ級（前書き）

ハルゼーが戦艦を指揮するみたいです

第22章 新鋭戦艦アイオワ級

基地内レーダー室

「航空機250機が接近しています。方角東北東12度距離200マイル」

「敵か？」

「はい。識別信号、方角ともに米軍機です」

楯岡は戦闘態勢に入る必要はないと考えた。まず滑走路脇にはミサイルが配備されており、更に基地周辺には50mm高射ガトリング砲が50基もある。

「放っておけ。奴らには何も出来んよ」

楯岡の言った通り距離50マイルを切ったときには敵戦闘機は全滅していた。パイロットもほとんどが海の藻屑となり、生き残った者も海で脱水症状となり死んでいった。

12月22日 ホワイトハウス

「キング、どうなっているのだジャップに負けるとは。これ以上の敗北は許されんぞ。再び艦隊を失えば貴様を更迭する」

ローズヴェルトはこの頃、なぜか意識がはっきりしている。史実ではこのころから殆ど大統領務を遂行できなかつたのだ。

しかし、度重なる敗北の報を聞きジャップに復讐し、この目で敗北の瞬間を見届けんと復讐の鬼と化していた。キングもそれに恐怖を覚えていた。

「しかし、こちらには手立てがありません。新型艦戦どころかそれを乗せる空母も失っております」

キングは恐怖に震えながら言った。

「それなら構わん。新しい戦艦の建造の見込みが立った。必ずや忌々しいヤマトを沈めることができる。キング、次にジャップが現れるのはいつだ？」

「それが……ジャップの連中は暗号を変えたようですべて全く解読できません」

キングは大統領の期待にそぐわない報告をしなければならなかったため、この頃は全く体調が良くない。

キングが言った暗号とは de s 暗号。アメリカが開発したエニグマに続き、難攻不落と謳われた強固な暗号である。

「なんとということだ。ジャップ如きの暗号も解読できんとは。もういい、直ちに手持ちの兵力すべてを持ってしてマリアナを攻略しろ」

「分かりました」

キングはそう言うしかなかった。

「杉田上飛曹、ちょっと来てくれるかな？」

つい先日開隊された（史実では1945年2月1日開隊）343海軍航空隊（二代目・剣部隊）は現在、烈風の操縦訓練を行っている。烈風の武装は20mm機関砲4門、すべて携行弾数300発である。更に射撃管制盤に敵影が入らない場合、射撃が制限される節弾装置と呼ばれる装置が付けられた。

「はい」

源田少将（1944年12月3日昇進）は杉田を横須賀海軍基地司令室に呼び出した。

「君には第651航空隊に移ってもらおう。どうしても新型空母2艦のパイロットが足りないんだ。それと同時に君は少尉への昇進が決まった」

「本当ですか？」

「ああ、健闘を祈る。後もう君も知っていると思うが、海軍甲事件のことなんだが、あれは米軍に暗号解読されていたからだそうだ」

源田は杉田が気兼ねなくいけるようにそれを伝えた。

烈風には艦上機型と純戦闘機型の2機種ある。無論杉田が操縦訓練

に使っていたのは純戦闘機型である。
まだ、ジェット戦闘機は開発途中である。

話は変わるが、ローズヴェルトが言っていた新型戦艦はアイオワクラスの強化版である基準排水量52200t、主砲52口径16インチ三連装砲3基などのアイオワクラス（名前のみ同）である。

特筆すべきは攻撃力ではなく、防御力である。

基本的な防御は舷側装甲 400mm ・水平装甲厚 200mm である。大和より劣ると思われる方もいると思うが、それは間違いである。大学の研究により、最も防御力を発揮するように曲面装甲が用いられている。つまり垂直に命中しない限り46cm砲でも貫通しないのだ。

しかも、パナマックスサイズを完全に無視した形となり全幅は35mであり、最高速も29.8ktとなった。

これでは空母に随伴できないから問題外かもしれないが、どのみち艦載機では帝鳳を撃破することはできない。しかし、空母に随伴といっても、常に30kt超で走り続けるわけではない。はつきり言つて、最高速度25ktもあれば、十分随伴できる。速度を出すためには装甲を犠牲にしなければならない。そのため甚大な被害を受けるのはユトランド（ジユットランド）沖海戦とレイテ沖海戦の武蔵を見れば一目瞭然だ。米軍が30発以上もの魚雷を命中させたと主張しているが（一般的には10〜15本）、事実ならばそれほど高い防御力を誇っていたということだ。話を戻そう、空母に随伴する際、基本的には敵艦隊または目的地までの距離がある程度縮まったときに速度を上げる、また、敵機が襲来した時も回避運動で速度も上げる。

大和型戦艦やこちらのアイオワクラスも抗堪性が高いため、そう一発の魚雷で沈むことはない。

はつきり言つて、史実のアイオワクラスの対応防御とあの速力は奇跡といつてもいいだろう。

先に防御について述べたが簡単に言えば亀甲船を模した造りで、艦のほとんどが装甲となっており、浮かぶ戦車という名がふさわしい。

「ウイル、君に次の作戦の司令官をしてもらいたいのだが頼めるかね。レイが前回の戦闘で負傷して、現在リハビリ中だね」

ニミッツは太平洋艦隊司令長官としてハルゼーを南西太平洋方面軍司令長官として任命した。

「しかし、私には艦フネがありません。それに、今のジャップと戦うことは死に行くようなもんです」

ハルゼーは猪突猛進型の提督だが、決して馬鹿ではない。

有名なハルゼーの言葉に「KILL JAPS KILL JAPS KILL MORE JAPS」があるが、これは戦争において、人を殺すことは間違っていない。

他にも、ウエーク島へ航空機を運ぶ際、キンメルより戦艦も連れて行くかと聞かれたが、鈍足の戦艦は邪魔になると言つた。これも戦闘において逃げるときに足の遅いものに合わせて、虎の子の空母を失わないようにするためである。もともと、戦闘時に退避行動をとると信賞必罰に厳しいアメリカ軍では軍法会議にかけられることもあるのだが。

「艦フネのことだが心配はない。アイオワクラスのケンタッキーとモンレーが間もなく就役する。こいつらはアイオワとは一味違つぞ、最新鋭艦だから安心したまえ」

ニミッツは不敵な笑みを浮かべ、ハルゼーを見た。それを聞き、再びジャップにひと泡ふかせられるとハルゼーは興奮した。

「空母は付かないのですか」

ハルゼーは戦艦よりも航空機の方が強いと思っている。大艦巨砲主義の時代は既に終わったのだ。

「空母は必要ない。ジャップの戦艦には航空機は役に立たんからな」
そう言うとハルゼーも納得して、執務室を出て行った。

その顔は、次こそジャップを地獄に叩き落としてやるという闘志の顔に満ちていた。

それからハルゼーはパイロットをしごいていたのを止め、射撃訓練を始めた。ベテランがほとんどいない今、パイロットを訓練しても鴨にされるだけである。第一空母がいなければ、いくら訓練しても仕方がない。

また、翌年1月中旬に新鋭機、F7FとF8Fが就役する予定だ。F7Fは夜間戦闘機として、F8Fは軽戦ではなく、重戦闘機として2500馬力級の戦闘機となっている。

第22章 新鋭戦艦アイオワ級（後書き）

携帯の充電器が消えた。2個あるからいいけど面倒だ。
まあパソコンから投稿してるからあんまり関係ないけど

第23章 勝ったもん勝ち

次の作戦までの間、機動艦隊の艦載機は紅白戦を行うこととなった。勿論機動戦艦は3隻存在するので紅白と言うより巴戦なのであるが・

地上格納庫に収納されていた美雷は次々と滑走路から飛び立っていく。それぞれの隊長機を中心に実戦編隊を組む。

基本的に2機ずつでエレメントを組み更にそのエレメントを二つL字型に並んだ隊形である。

「模擬戦とはいえ手を抜くな、戦場で自分の機を狙ってくるものは敵だ。味方でないものは敵。そう判断して構わない。それじゃ各機編隊を崩さず戦闘開始!!」

R/EF-4と呼ばれる前主力戦闘機を偵察・電子作戦機に改造し早期警戒機AWACSの能力もあるこの機から、「戦闘開始」の命令が下り、計180機に及ぶ戦闘機が戦闘を始めた。

まず手始めに今井は近くの神龍航空隊機に目標を定め、それにMFCS (Missile ミサイル Fire ファイア Control コントロール System システム)で照準を合わせる。

既にディスプレイには「BOG Y1」<と表示されている。

「フォックス FOX2!!」

マークを合わせ宣言。

敵機の搭乗員は

「ブレイク Break Break!!」

アクティブレーダーホーミング
と叫びARHミサイルから逃れようとするが、着弾までの時間の表示は00:23.0.23秒であると言っているのを見たところでその機は撃墜された。

今井はほつと息をつく暇もなく、次にボギー1を切り替える。

既に彼我の機の距離はかなり縮まっており、まさにドッグファイトとなっている。

再び今井はキーボードを叩き

> RDY GUN RDY AAM-4 (短距離空対空ミサイル) <
レファイ ガン レファイ
と打ち込む。これは、ガトリングと空対空ミサイルの使用可能を表す。

中枢コンピュータは短距離射程ミサイルのミニマムレンジを計算し、670mと伝えてくるが、今井はそれを消去^{キル}。すぐにFCSのマーカーを敵機に合わせる。

同時にミサイルのレーダーシーカーとMFCSを合わせる。

すると突然コックピット内にアラームが鳴り響く。ロックオンされた。バックミラーを確認、

「Right Break」
ライト ブレイク

落ち着いた声で確認するよつに今井は言う。すぐさま美雷は操縦桿^{サイドスティック}の圧力に反応し急旋回。後から追ってくる敵機を前に機首上げ、機体全体で空気抵抗を浴び急減速。

> RDY GUN <

> FIRE <
ファイア

追われる側から追う側へと変わり、ガトリングで敵機を仕留める。表示では射撃開始から約0.3秒後に敵機に命中を知らせ、撃墜判定を下した。

上空に残る機も数えられる程度になったとき、猛然と1機的美雷に突っ込んでいく機が今井の目に入った。

「山城だ」今井は直感でそう気付いた。

支援に行こうとしたが、マルチ・ファンクション・ディスプレイの位置情報を確認すると画面が位置情報ではなく別の表示があった。

>IFF ENEMY<

IFF（敵味方識別装置）は敵性と判断し、ボギー1が切り替わる。バックミラーを見ると隊長機と思われる派手なカラーリングを施した美雷が近付く。

「千早さんか・・・」

千早准将は神龍航空機部隊隊長である。十分なスキル技量とキャラ経験を持つ。

今井的美雷はすぐに左に急旋回。しかし既にミサイルのアクティブ・シーカーは完全に美雷を捕えておりディスプレイには軌跡が表示される。打ちっぱなしが可能なこのミサイルはラムジェットエンジンの空気圧のムラによって不規則に軌跡が変化する。

それでも敵機を追い詰めていく・・・

時間がゆっくり流れる感覚。頬に一筋の汗が流れる。

ミサイルが迫る。美雷は後部のレーダーによって距離と相対速度を中枢コンピュータに記録。そしてコンピュータは時間を計算。カウントが始まる。

1.00

0・50
0・25
0・12

0・08を切った瞬間、

>MODE RAM-AIR<

美雷はラムジェットブースタに点火。機体が揺らぎ一気に加速。同時にVT信管が作動し、コンピュータが被撃墜の判定を行う。

残り2基のミサイルは目標ターゲットをロスト。爆発したミサイルも今井の機を落とすことは出来なかった。

今井は直ちに反撃に転じる。

>RDY ミサイル AAM(空対空ミサイル)<

>LOCK ロック ON オン<

FCSのマーカ―が千早機を捉える前に、1基のミサイルを発射。敵機が急旋回すると同時にその前面をふさぐ形で回り込む。

「ロスト・コンタクト」

>RDY ミサイル GUN ガン<

すぐに兵装をガトリングに切り替え、発射ボタンに親指を置く。

「Break Break」
ブレイク ブレイク

千早准将は再び急旋回。

しかし、一足早く今井が千早機の未来位置に回り込む。敵機直上。絶好の位置である。

親指に力を入れ、ボタンを押す。美雷はまるで今井が初めからそうすることを知っていたかのようにボタンが沈み、ディスプレイに弾道が表示される。今井は、自分が勝ったにもかかわらず背中にひやりとした感覚を覚えた。美雷は独立した戦闘機械であるそう言っているかのようだ。と思ったからか。

いや、ただ自分が緊張感を失い、戦闘勘が薄れたからだ。

山城は自機を大きくループさせる。

ハイ・ヨー・ヨー

敵機に対して自機の手が速い場合に用いられる空戦機動で、機を大きく上昇させ旋回面の内側に留まり、降下・加速しながら後方を占位する。上昇するのは自機の手を殺し、追い越し（オーバーシユート）を防ぐためである。

敵機は福田の美雷である。巡航速度でミサイル攻撃を行っていたため、速度は山城機より遅かったためだ。しかし、福田は山城に気付いていた。更に速度を落とし、山城はオーバーシユート。福田は落ち着いてキーボードを叩く。

> R D Y A L L A A M <

山城が強敵であることを知っている福田は手加減をしない。安全策を取って相手にとって少しでも有利になるような愚策はとらない。

> F I R E <

最大射程でミサイルを発射。

互いのマルチ・ファンクション・ディスプレイに軌跡が表示される。

福田はそれから注意をそらさない。戦士が首を切るまで敵の死を確信しないのと同じように・・・

しかし、それが仇となってしまった。

> LOCK ON <

今井が福田機を捕えた。

空対空ミサイルを発射。更にアフターバーナー・ゾーンへとスロットルを押しこむ。

加速。加速。

一気に距離を縮め、再び兵装をガトリングに切り替える。

山城機は撃墜判定を受けたが、同時に福田機も撃墜された。

空でもどこでも、戦場に敵は1人とは限らない。敵が強ければ強いほど、一人に気をとられ被撃墜率が高まる。

「T-1より各機。帰投する」

今井は通信用端末にそう吹き込んだ。

散り散りになった各飛行隊はV字隊形を組んで、それぞれの滑走路に着陸していった。

残念なことに帝鳳の飛行隊は残りたったの12機。

第一小隊・・・今井含む4機の編隊・・・も2機しかない。

「また、腕をあげたな。今井」

コックピットから降りると千早准将が声をかけてきた。

「いや、あんたの腕が落ちただけだ」

今井はそう言っ流す。

「いや、俺じゃなく福田と戦った時の動きがまるで違う。FFR・Mk6から蒼雷に変わったからか？」

「エンジンは前の方がいい。多分・・・」

そう答えて、そのまま山城のもとに向かう。今井は、蒼雷の加速力や低空域での燃焼効率の良さ、そして高機動性能は目を見張るものがあるが、大出力で超音速スーパークルーズ巡航性能に優れるFFR・Mk6の方が使いやすいパイロットの方が多いからだ。ジェット機での格闘戦ドッグファイトは時代遅れだ。と思う。

互いに声もかけずに並んで基地内に入っていく。2人とも帝鳳航空隊のパイロットの腕がまだまだであることを痛感しているのだ。たった15分で損耗率は20%。話にならない。

第24章 金剛探索隊

「やっぱ、この部屋が一番落ち着くなあ」

今井は帝鳳の部屋でくつろいでいた。

窓から見える景色は碧い中部太平洋の水平線。

なぜ、軍艦でありながら兵の部屋に窓があるのか不思議に思う読者の方もいらっしやるだろう。なぜなら、帝鳳が進水する前から透明金属が開発されていた。

この透明金属は、金属でありながら金属光沢がなく、アルミニウムよりも高い強度を誇る。更にこれはあくまでも金属なので、艦の主な材料であるチタニウム超合金と溶接によって取り付けることができる。

つまり窓枠がないのだ。無論開閉することはできない。

「今井いるう？」

帝鳳が入ってきた。

今帝鳳は今井の部屋で居候？しているのだ。理由は簡単。艦魂が見える人の部屋の中で、最も片付いており、なおかつお菓子が多い。

「いますけど、何か用ですか？」

「あつ、うん。チョコとクッキーちょうだい」

いつも、このようにしてお菓子をもらいに来る。このときは、楯岡のデスクワークを手伝う時に来る。本人いわく、糖分をとらないと頭が回らないというのだ。

今井は食べすぎだと思っているが、それが自分にも当てはまるため口に出せない。
勝手に取ることできるのだが、一応今井の私物なので、本人の承諾を得てからもらっている。

「アイオワクラス戦艦の熟練航海を始める。現在、海軍にベテランは少ない。しかし、その彼らにも君たちのような時があったのだ。実戦は初めてでも、君たちなら出来ると思っている。それでは各員総員配置につけえ！」

いくら、練習航海とは言え彼らのやる気は、戦争末期の特攻隊員よりも凄まじかった。

練習航海は当初の予定より3時間延ばし、夜まで及んだ。
兵たちのやる気があるうちに行う方が、身に付きやすいと考えたからだ。

しかし、夜に帰って来ることは、時間厳守の軍隊では言語道断のため、後にハルゼーはニミッツから尋問という形で説教を受けた。

「悠紀、玲、遊びに行こって、あれ、玲は？」

「仕事に行きましたけど」

窓際でティータイムをしながら、神龍の艦魂・希のほうを見た。

「そっなんだ。じゃあ悠紀、一緒に遊びに行こ」

「はい、まあいいですけど・・・」

神龍がこの時代に行きたいところがあるのかと、思いながら神龍と手をつないだ。

別段恋人というわけではない。こうしないと転移が使えないからだ。また、艦魂が人間と恋におちると、泡となって消えてしまう。(嘘)取りあえず、体の一部に触れていなければならない。2人は光とともに、部屋から消えた。

「ここに来てみたかったの」

神龍がそうやってきたのは、どこかの巡洋艦の甲板。いや違う、戦艦・・・高速戦艦こと巡洋戦艦『金剛』である。

金剛は現存する艦艇の中で最古参の艦であり、イギリス製ドレッドノートシヨックから、薩摩が竣工前から旧式艦となり下がったときに、イギリスに作ってもらった艦だ。

同型艦として比叡・榛名・霧島があるが改装の際ドリルの刃が通らなかつた。

「金剛ですか」

「そつ。同じ戦艦として大先輩だから。でも、勝手に来ちゃって良
いのかな。特に悠紀」

神龍が最も大切なことを呟いた。

今井は普通の水兵と同じような年だが、服は将官服を着ている。
どう見ても怪しい。

「希さん、アポ無しで来たんですか！？俺相当やべえ」

「大丈夫、大丈夫。いざというときは転移しちやええ」

まあそうだなと思い、金剛の艦内を歩き回った。

第25章 紅茶同盟

因みに金剛型巡洋戦艦は2隻とも、改装されていない。

老齡艦『扶桑』『山城』『金剛』『榛名』はこれ以上速度を上げると、艦体がガタピシする始末。最大戦速で突撃すると、水圧で艦が自壊してしまう。しかし艦体を補強する暇もない。

その為、金剛型と扶桑・山城は、同名のイージス艦として就役する予定だ。

勿論一から造り直すとなると、1隻が就役するのに2年はかかる。その為基本構造はそのままにして、電子機器と装甲・外郭を新しく取り付ける。

言い忘れていたが、『伊勢』『日向』は既に改装が始まっている。

改装は

- 1・・・艦体の全長を220mに延ばし35000tへ
- 2・・・後部飛行甲板を撤去主砲塔1基を設置
- 3・・・主砲を全て43cm連装砲へ

最後に金剛型イージス艦は最高速度31kt以上、伊勢型戦艦は30kt以上を目標とする。

そう言えば、八八艦隊計画の戦艦として計画されていた、『天城』『葛城』は空母として再び計画されたが、全く着手していない。何

しる既に改装が終わった艦も含め、10艦も改装しているのだ。現在、伊勢型戦艦2隻は一度陸揚げされ、内地で艦体を取り換えている。主砲塔も完成しているため、なんとか年末には終了しそうだ。

「ここはどこら辺になるんですか？」

「え〜と、艦首付近の乗組員の寝室の近く」

戦艦は基本的に寝るときはハンモックである。ベッドがあるのは大和型のみだ。

「それにしても、結構広いな。一応帝鳳の半分以下なのに…」

「でも中に入ると結構ボロが来てる」

「それは仕方ないですよ。艦齡は30年超えてるんですから。あれ？あの人誰だ」

旧艦艇に女性はいないはずだが、士官服を着ている女性がいる。丁度前方約12m先のT字路である。

「艦魂みたいだね。悠紀、声掛けてみよっか」

「まあ、良いですけど」

そう言っていると、向こうも気付いたようだ。

「むっ、貴様ら何者だ。こちらをジロジロ見よって」

金剛の艦魂と思われる英国美人は俯き加減のまま此方を向きながら言った。

「何者って言われると・・・俺は佐官だけど。貴女は金剛の艦魂であってますか」

「ああ、そうだが貴様はその年で佐官とはな」

「え、とは言っても貴女もご存知だと思いますが、機動艦隊の間です」

「私はその機動艦隊の艦魂です」

金剛は「そうか」と言って、それ以上興味がないのかと思っただが、

「貴様らが・・・聯合艦隊の艦達を救ってくれたのか。感謝する」

金剛が言ったのは、サイパンとフィリピンの戦いのことだ。自分はそこで沈むはずだった。

しかし彼らのおかげで沈むことなく、こうやって改装を待っている。

「あの…金剛さん、サイン下さい」

突然神龍が軍刀を腰から引き抜いて、言った。神龍にとって、金剛は特別な存在なのだ。

最古参でありながら米軍の評価で、太平洋戦争で最も活躍した戦艦と言われている。

「構わんが、何故私なのだ？大和や武蔵の方が、立派ではないか」

どうやら金剛は、自分の能力に気付いていないようだ。何故なら大和型も同じく高速戦艦として生まれ変わったのだ。しかし所詮はただの旧式戦艦。金剛が生まれ変わるイージス艦とは、格が違う。

「もちろんですっ。しかし、大和より金剛さんはもっと立派です」

金剛は筆をとり、軍刀の鞘に名をかいた。

「ところで貴様はなんという名だ？」

根本的なことを言っていないかった。

言い忘れていたが、金剛はかなり厳格な艦魂だ。風紀が乱れることを嫌う。流石に鉄拳制裁等はしないが、中にはその様な艦魂もいる。金剛が風紀の乱れを気にするのは、精神が弛んでいては、自らを滅ぼすと考えるからだ。実際そうなれば、その艦だけでなく、周りに迷惑を掛ける。

それがために風紀の乱れを嫌悪する。

しかし、普段は結構穏和な性格だ。

「あつ、私は神龍と言います」

「そんなに畏まるな。楽にしてくれて良い。神龍が良い名だ」

金剛のその一言に、神龍は顔を赤らめさせた。

「こんなところで立ち話もなんだ。部屋に行こう」

そう言つて案内されたのは、会議室だった。

金剛は紅茶を淹れて、2人に薦めた。今井は紅茶が好きなので、今度饒別に持つてこようと思った。

金剛は今井の紅茶を淹れる手つきを見て、

「貴様もよく飲むのか？」

と聞いてきた。

今井は紅茶には結構こだわる。ダーズリンよりも、セイロンの方が好きだ。(作者はこの位しか有名なの知りません)

「ああ、そこそこは飲むが、後日持つてこようか？」

「それは嬉しい。この頃あまり飲めないのではな」

金剛は口元を僅かに微笑ませた。

今井が紅茶好きと知り、金剛は今井のことを気に入った様子だった。今井たちに初めての帝国海軍艦艇の艦魂の知り合いが出来た。

3人はその後、金剛による金剛の観光をした。2人は1時間程したのち、帝鳳に帰つて来た。

第25章 紅茶同盟（後書き）

日常を書くのは難しくかなりの時間を要してしまいました。
ご意見・ご感想お待ちしております

第26章 第3艦隊出撃ス

12月27日、アリユーション列島沖。

ハルゼー率いる第3艦隊は、4隻の空母を擁して日本に向かっていく。

やることは唯一つ、『帝都空襲』

米軍機動部隊はもう少してマリアナを獲り、B-29による大規模な空襲を敢行する予定だったが、目前にして挫折した。

この頃負け続きで国民の厭戦気分を醸成させないように、再びドゥリツトルの真似をしようと言うのだ。

作者が考えるに、帝都空襲が日本の敗北を決めた。

実際、日本の敗戦はミッドウェイでの敗北が原因だが、ミッドウェイ作戦はドゥリツトル中佐（当時）の帝都空襲があったからである。そんなことせずとも、真珠湾攻撃で日本の敗北は決まっていた。既に暗号は解読され、空母を叩き損ね、拳銃の果てに燃料タンクへの爆撃すらも行っていない。

海軍は近代戦争の戦いかたに気付いていたと言われるが、実際は全く分かっていない。分かっているも、解っていないかった。

兵站は敵中に求むという思想の陸軍は論外だが…

「陸軍機のほうは中々上手くいっているようだな」

ハルゼーは3000m未満で離陸していくB-25を見て満足そうだ

った。B-25は普通、600m近い離陸距離を必要とする。今回は初期と違って、かなりのベテラン搭乗員がいる。また前回より作戦参加機が多く、まともな戦果が拳がるだろう。

そんなことも露知らず、マリアナでは、毎日どんちゃん騒ぎしている。原因は、特にない。

新年が近づき、自ずと皆のテンションが上がっているからだ。

特に煩いのは、帝鳳の砲術部隊だ。砲術長が無類の酒好きで、青年兵にまで焼酎を薦めたらしい。

若気の至りで、女性兵にナンパしたりと、騒ぎが他の部隊にまで及んでいた。

何かと、イブ・クリスマスと続いたことだ。

クリスマスも機動艦隊総出で祝ったため、事態の收拾がつかなくな

った。ついにはリバーを越える者が50人を越え、医療班は以上に忙しくなった。

それでも、騒ぎは納まることはなかった。

しかし、ついに2時間前、勝手に酒蔵に入ろうとする砲術部隊と、その阻止を任された航空隊の死闘の末、烹炊長によって、酒蔵のロックがかかり、酒蔵の乱は幕を閉じた。

その後、我を取り戻した青年兵らは、雑用を押し付けられ、反省がみられたので無罪放免となった。

砲術長は1週間以上の謹慎となった。

バシツカツ

何やら奇怪な音が帝鳳の道場内に響いている。

理由は航空隊の兵員が木刀で、戦っているのだ。剣道でいいと思う読者もいると思われるが、実戦では役に立たない。その為今井はわざわざ、危険な木刀で戦わせているのである。

「次い！」

ガッ

「はい！次い！」

今井は次々と木刀を落とさせ、勝っていく。

剣道でも無敗の今井に、枠内（リム）という拘束が外れれば、最早無敵である。

小一時間程したのち、全ての兵員を倒した今井は、艦を降り、小沢機動部隊の航空隊を訪ねた。

今井は、源田と同じように教官として、搭乗員の育成をしなければならぬ。

これは、ラバウルの消耗戦で綺羅星の如く揃っていたエースを失い、マリアナの為に育成した搭乗員も発着艦が出来る程度と練度が低いからである。

しかしその間も米軍の魔の手はジリジリと近づきつつあった。

「はい！次々乗って！」

零戦は次々と南太平洋の蒼空へと昇って行く。まだ七五型の配備す

ら整っていないため、五四型である。

本当ならば、この時期から特攻隊が飛び立っていた。

しかし、機動艦隊の存在が再び綺羅星の如くラバウルに揃っていたエースが、復活させようとしていた。

ウーーーーー

マリアナに空襲警報が響き渡る。これは、グアムから飛び立った紫電改と流星艦爆のフェイカーで、極めて米軍機に近い配色をしている。

勿論マリアナに集結している、機動部隊の航空隊は弾を積んでいないが、紫電改も空砲である。

今井は極限にまで実戦に近い状態で搭乗員を逃げ回らせようというのだ。航空用ガソリンが不足しはじめていた日本軍では、信じられないことである。

しかし、その今井の頼みを航空本部長の源田大佐は快く受け入れてくれた。

ともかく、マリアナでは史実の『マリアナの七面鳥撃ち』のように、簡単に落とされそうな零戦が飛び回っていた。

結局、米軍機（偽）は一機も落とせずに編隊を組んで帰っていった。まあ、実弾では無いので当然ではあるが。

3回程米軍機が来襲し、滑走路の周りのジャングルに爆弾を落としたりと、一応軽微な被害を与えて、グアムに戻った。

これにより、搭乗員が米軍の実力を誤認しては元もこもないので、米軍機の来襲はこの日だけとなった。

翌日は朝から燃料が尽きる迄紅白戦を行い、レベル毎に分ける予定だ。

因みに燃料は金剛・榛名が鼠輸送に近い方法で、燃料満載のドラム缶を積んで、ドックから降ろす方法である。

現在、搭乗員は空軍基地内の食堂で夕食を食べている。

「おい、お前らよく聞け！明日は紅白戦を行う！まだ操縦に慣れていない者はさすがに居ないと思うが、明日は1日中戦う！本日は早めに就寝する事を許可する」

今井は食事中の搭乗員に向かって吼えた。

それを聞いた搭乗員の目は、闘志に満ちていた。

第26章 第3艦隊出撃ス（後書き）

既にお気付きの方もいらっしゃると思いますが、つじつま合わせの為、本文を初期投稿時よりも大幅に変更しています。パソコンで読まれる場合、改訂記録を確認されることをお勧めします。
評価・感想お待ちしております。

第27章 飛翔零戦七五型

ジリリリリッ

今井は電話のベルで目を覚ました。

今井、黒川の両名は電話に飛び付いた。

黒川の方が先に受話器をとった。

「はいつ、此方機動艦隊マリア・・・」

「私だ」

黒川が言い終わる前に、電話を掛けたその人物の声をきいた。

「とっ、東条首相!?!」

「そうだ、君は楯岡ではないな。ああ自己紹介はいい。用件だけ述べる」

東条の声は普段の甲高い声ではなく、低く沈痛な声だ。

「今朝、東京が空襲を受けた。爆撃機は24機、現在中国に向かっている。フィリピンで叩き損ねた空母だろう」

そう、フィリピンで大破した空母を、養生程度の修理で前線に送り出した。

東条の言う用件とは、第3航空戦隊を派遣し、中国に向かうであろうB-25を迎撃してほしいと言うことだ。

勿論『信濃』『長門』が就役したため、艦隊編成は大幅に変わった。

信濃が就役した際、第1航空戦隊は信濃・長門に新鋭空母『大鳳』以下『翔鶴』『瑞鶴』が第2航空戦隊、第3航空戦隊は『隼鷹』など小型空母4隻を主とする艦隊である。

東条首相の要望に近い命令を受け、聯合艦隊は第3航空戦隊を東シナ海に派遣した。

今回出撃した零戦搭乗員の中には、昨日今井の訓練を受けた搭乗員もいた。

出撃した隼鷹以下多数艦艇を金剛型2隻が護衛について、マリアナに急行した。今回の任務は爆撃機の迎撃のため、高速が求められる。タンカー等引き連れる余裕はない。艦隊は最も燃費の良い18ktで予定位置に直進している。駆逐艦は直ぐに燃料切れを起こすが、片道は大丈夫だ。

帰りは中国戦線の陸軍から、燃料を補給する。

B-25機内

ブオオオオオオ

「ざまあ見やがれ、ジャップめ」

ドウリツトル中將は今回はいないが、再び帝都東京を爆撃できた。兵員達はもとより、アメリカ中に希望を与えた。しかし、それは一時の喜びだった。

前方に濃緑色と灰白色の零戦七五型が60機、キラリと光るとそれは燕の様に飛び回り、機銃員が配置に着く前に次々と撃墜されていた。

ズガガガガガガガガガ

零戦は360°あらゆる角度からB-25に突っ込んでいき、必殺

の20mm機関砲を連射した。烈風に搭載されている節弾装置は搭載されていないが（微弱なレーザーを使用し高価なため）かなり正確な射撃を行う。

「よっしゃあ。鬼畜米英を倒してやったぜ」

零戦搭乗員は、機内でガッツポーズをしたり、先日まで空母から発着艦がやっとというような、雛鳥ではなかった。

言い忘れていたが爆撃隊が与えた損害は

家屋

全壊・・・13戸

半壊・・・75戸

全焼・・・503戸

半焼・・・214戸

人的被害

死者・・・462名

負傷者・・・1108名

今回の爆撃はB-29の為のカーチス・ルメイの隠し札、100ポンド焼夷弾を使用したからである。

さらにこの焼夷弾は、史実で使われたものとは違い、効率よくナパームとホワイトガソリンをばら蒔くようになっている。そのため、被害が大きくなった。

数分後、60機の零戦は22機のB-25を撃墜、1機エンジン炎上のため海上不時着、1機を取り逃した。死者22名、負傷者12名、生存者34名。

一方零戦は2機損傷、1機早期離脱、その他12名が負傷した。

総勢50隻の邀撃隊はそのまま東シナ海を北上した。

だんだんと、広大な中国大陸が見張り員の強靱な視力をもって、見えてきた。すると見張り員の一人が大陸のあちこちに黒煙が上がっているのを発見した。中国軍の反攻に会い、戦闘中なのだ。

気づいた見張り員の報告から、第3航空戦隊司令部は攻撃隊を出すことに決めた。とはいっても艦攻、艦爆は一隻当たり10機程度。

零戦七五型の半数にも二十五番(250kg爆弾)を搭載し、100機近い大攻撃隊は次々と発艦していった。

「日本機だ！」

突如現れた海軍機の編隊を見て、誰かが叫んだ。

すると次の一瞬で、その編隊は散開し次々とJU-87スツーカーのような、いやそれ以上の急降下爆撃を行った。あつという間に日本軍の優勢が決定し中国軍は退却を始めた。日本機は適当な飛行場を見つけ、陸軍航空隊の航空基地に着陸していった。

第27章 飛翔零戦七五型（後書き）

更新停止するとか言っ
てながら、期末が一段落したんで一回投稿し
ます

第28章 陸軍航空師団

第3航空戦隊の支援を受け、中国国民党軍を追い払った陸軍はかなり忙しくなった。仲の悪い海軍に助けをもらおう等恥である。

そのため陸軍参謀総長、梅津美治郎は陸軍の発言力を確保するために航空師団の建設を表明した。これは、最新鋭機ジェット戦闘機「火龍」を1個師団200機+予備機15機、更に新しく設計された「ライティ雷薙」を一師団200機+予備機20機配備するとつもない計画である。しかもこれを5個師団1100機も製造するというのである。

雷薙は海軍の夜間戦闘機「月光」や開発中の「天雷」をモデルとした双発戦闘機である。陸軍は二式複座戦闘機「屠龍」で失敗したのにもかかわらず双発機を開発した経緯はこうである。

- 1 現最新鋭機四式戦「疾風」は重戦闘機で一撃離脱戦法を主としており、軽戦の活躍の場が少ないため。
- 2 軽戦の航続距離の短さが目立つため。主に新型機
- 3 重武装におけるエンジンの出力不足を補うため。

この三点から、雷薙の正式採用が決まった。陸軍の雷薙への要求は下の通りである。また無茶な要求が回って来たと、雷薙の開発を任せられた三菱・中島共同技術陣は中島が機体の開発、発動機は誉42型の試作は完成しているため更なる向上を行った。

・誉四二型：2200馬力2基

・最大速度：692km/h（高度8000m～9000m）

- ・上昇力：高度8000mまで4分以内、上昇限度12400m
- ・武装：20mm機関砲4門、12.7mm機関銃2門
- ・その他：過給機、酸素ボンベ

軍用機の愛称には、きちんとした意味が込められているが、雷薙の名前の由来は三種の神器の草薙の剣のように武器の象徴として、神の持つ武器雷のように高い攻撃力を持つようにという意味だ。他にも天叢雲劍あまのむすぶこしから『叢雲』等があったが、最終的に雷薙に決まった。

同じ頃第3航空戦隊航空隊と艦艇は、現地の関東軍から手厚い歓迎を受けていた。その基地は、航空機どころか戦車もまともに配備されておらず（海軍が多量の資源をかっさらっていたせいもあるが）、中国相手にまともに戦えなかったのである。

「海軍さんは凄い戦闘機を持つてるな。こっちにも譲ってくれないか？」

「俺も海軍に入ればよかったよ」

等と、陸軍の若い兵は、同じく海軍の若い兵たちと談笑していた。

そうこう、陸海軍の一時的な親睦を深めているうちに、燃料補給が終わり出港時間となった。

ブオーー

旗艦の汽笛と共にフネは動き始めた。

次々と空母・護衛艦艇が出港していくのを、皆帽を振って見送った。しかし、第3航空戦隊はこの後年明けにはソロモン・硫黄島を超える激戦に巻き込まれるのである。

マリアナでは帝都空襲の報を聞き、皆黙り込んでいた。

日本を護るために来たにも関わらず、それでも被害をだした。ここでも日本の警戒のずさんさが出たと言いたいところだが、それは違う。この作戦も前半は運^{ツキ}はアメリカに味方した。

第3艦隊が攻撃隊を発艦させるまで、アリューシャン列島から南下している間、天候は悪く漁船で警戒網を張っていたが、霧が濃く波高は高く漁師は大艦隊と言えど、視認が出来なかった。更に米軍はレーダーでこれらの船を避けていた。

第3航空戦隊出撃から2日後第3航空戦隊は無傷でマリアナに帰って来た。航空機の搭乗員はこちらでも労われた。

その搭乗員達の全員生還を一番喜んでいたのは、彼らを育成した、今井だった。

その今井は、自身が零戦に乗って零戦の能力を測っていた。練習用に零戦は21型がほとんどの部隊が配備しているが、実戦用にはおもに65型と75型が配備されている。

ホワイトハウスでは、第3艦隊の攻撃成功の知らせとともに、攻撃隊行方不明の報が入った。撃墜ではなく行方不明というのは、無線による報告はなく、また攻撃成功の連絡が入った後の無線報告は予

定になかったからである。

「どうということなんだ！攻撃は成功したが連絡がないとは！」

癪癪持ちのハルゼーは、通信兵の報告を受けて怒鳴り散らした。ハルゼーが怒るのも無理はない、偵察機を出すにも既に反転しており、発艦した位置よりかなり離れている。恐らく考えられるのは日本機による迎撃か……。しかし、本土に存在しないものが海上に存在するとは考え難い。ハルゼーの頭によぎったのは軍上層部の悩みの種になっている、機動戦艦。俗称 *Freake Battle Ship*。奇妙な戦艦である。

「くそつ、ジャップめ」

ハルゼーは旗艦エンタープライズの艦橋で、顔をしかめながら作戦台の海図を拳でたたいた。

「乗りづれえ」

零戦21型の機内で今井はボヤク。今井にとって200年近く前の最高傑作機はただのガラクタに近かった。いくら運動能力が優れていると、自動空戦フラップを備えていない零戦は、最高速度での操縦桿が相当重たいのだ。

そんなことを言いながらも、旧式機の烙印を押された者とは思いがたい旋回・運動性能で今井は操縦していた。第3航空戦隊の搭乗員らは初めての实战に疲れた体を休めながら、今井の乗る零戦を眺めていた。

第28章 陸軍航空師団（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

読んでいただいた方、本当にお願ひします。拙い文章ですから訂正できる場所の指摘もお待ちしてます

あと、自分の作品内では東条英機と表記されていますが、資料によつては東條英機と表記されているものもあります。どちらが正確なのか、ご存知の方は、教えてくださると幸いです。

第29章 イタリア海軍復活

1機の零戦が空を所狭しと駆け回っている。零戦75型。彼ら機動艦隊が来なければ作られなかった最高傑作機である。しかし来年7月下旬までに全機退役が決まっている。次期主力艦上戦闘機は『烈風』が決まっている。また来年2月には次期主力局地戦闘機には試作局地戦闘機『震電』が就役する予定だ。

降りてきた零戦から、飛行服を着ていない今井が風防を開けた。今井は駆け寄って来た零戦搭乗員にちらりと目をやると、また計器をいじりながら彼らに話しかけた。

「よく戻ってきたな。一人も死んでないな」

「はい。一人負傷しましたが・・・」

「死んでないならいい」

今井は口元をほころばせながら、搭乗員らを連れて食堂に入ってしまった。

現在6時前だが、北半球に位置しながらまだ日は高い。

今日も普段通りカレーではなく普通の夕食であった。普通の夕食とはいっても機動艦隊が現れてから、食事に階級差はなくなりバイキング形式となっている。金曜日にはカレーを食べるのだがこの日は木曜日である。

ズガアアアアアン

突如、機動戦艦の前に花火が咲いた。いやそれは花火ではなく、ミサイルの火薬だった。

飛来したミサイルは5機。明らかに未来艦艇を狙っており、速度はマツハ1.45、速度から考えると攻撃は2050年以降に製造されたミサイルによるものである。種類も飛来の仕方から見て、SS4HSS52Aのいずれかの水中発射型ミサイルだろう。

その為、発射したのは潜水艦であることは火を見るより明らかだった。

帝鳳の3次元捕捉フェイズド・アレイ・レーダーの捕捉範囲150kmの外部から発射されたのだから。

しかし問題はそこではない。誰がいや、何処の国が犯人かだ。

レーダーの進歩は2017年、突然止まった。

理由は1つ、ミサイルの航続距離が急速に伸び、それにレーダーが追いつかなくなった。更に、偵察衛星のカメラの高性能化に従い、敵の位置を衛星からの情報で知ることが出来たからだ。

機動戦艦に搭載されているレーダーも、ハーブーンの航続距離400kmを下回る150kmである。

ともかく、発射されたミサイルは機動戦艦の自動防衛システム、通称ウオッチドッグにより撃墜され、被害はなかった。

しかし、この時代に艦対艦ミサイルを持つ国は一体何処に在るのだろうか。

戦略原潜ヴェニト・ムッソリーニ艦内

「艦長、攻撃は失敗したようです。二次攻撃を行いますか？」

「いや、今日の攻撃はただのデモンストレーションだからな」

そう、攻撃してきたのはイタリア海軍、第二次世界大戦では日本の同盟国となっていたイタリアである。しかし、なぜイタリアが日本に攻撃しなければならなかったのだろうか。

この戦略原潜は2097年再び開設された、イタリア海軍潜水艦奇襲攻撃部隊COMSUBINの艦である。この部隊の2097年発足当時の総兵力は2個師団4万6023人・戦略原潜5隻・攻撃型原潜2隻・地上兵力約5000人・戦車連隊2個国家予算の2割を使い建造させた。潜水艦部隊とは言え地上兵力がなければ、緊急時の食料調達などが行えないからだ。

「まあいい。これで沈められたら苦勞はなかったがな」

ヴェニト・ムッソリーニ艦長ステファノ・コルヴィーノはそう言って、司令官私室に入っていた。

1944年11月2日COMSUBINがこちらにやって来た日、イタリアで地上兵力によるムッソリーニの救済が行われた。潜水艦コマンドとして最強の名を馳せた地上兵力のコマンドが小隊規模に分かれ、ムッソリーニを救出した。目隠しをされ、ムッソリーニは

本人の名を持つ艦へ連れてこられたところで、目隠しを外され、コルヴィーノと対面した。

「貴方がムツソリーニ元首相ですね。私はイタリア王国海軍潜水艦奇襲攻撃部隊COMSUBINの総司令官及び、本艦ヴェント・ムツソリーニ艦長ステファノ・コルヴィーノです」

「どういうことだ？我が軍は解体され連合国軍に降伏したはずだが、それにこの艦の名前が私の名とは納得がいかん。詳しく説明してくれんか」

ムツソリーニは眼前の事象が理解できなかった。軍は連合軍に接收され、自分は戦争裁判にかけられる。はずだった……しかし目の前には実際に軍人がいる。自分がいるのは軍艦の中だ。

「突飛すぎる話になりますが、私たちは2115年から来ました。大体170年後ですね」

「そんな話が信じられるか。仮にそれが本当の話だとして、なぜ君たちがここに来るのかね？」

ムツソリーニは半分イライラしながら、コルヴィーノに聞いた。しかし、ムツソリーニは半信半疑どころか、まったく彼らの話を信じていない。はっきり言つて、不愉快であった。

「簡単な話です、貴方がたは、将来情けない腰ぬけとして見られてしまいます。それによりイタリアは同盟国のドイツや日本からも馬鹿にされる始末です。いくら過去の話とはいえ、同族が汚名を着せられるのは我慢ならないのです」

コルヴィーノの言葉を聞いて、ムッソリーニは彼らを信じようと決めた。確かに彼らの言うことは間違っていない。このままノコノコ殺される気は毛頭ない。それに、自分にとって彼らは命の恩人であるからだ。

第29章 イタリア海軍復活（後書き）

ウォッチドッグやSS4H・SS52A・ヴェニト・ムッソリーニはすべて架空の兵器です。あしからずご了承ください。

イタリア海軍といえば、やっぱり潜水艦ですね。日本を一方的に勝たせると面白くないので、ほかにもタイムスリップさせてみようかと思ひまして。あまりにやりすぎて、第二次世界大戦が未来大戦にならないように気をつけなければ・・・

ご意見ご感想お待ちしております

第30章 陸海軍合同試験飛行

淡路島航空基地では、陸軍航空隊の第一世代ジェット戦闘機『火龍』と試作局地戦闘機『震電』が滑走路に並んでいた。この2機の戦闘機はすでに試作は完成し、これは量産型一号機である。『火龍』は陸軍のものだが、海軍と共有することで資材の無駄を減らそうとしたため、双発機として完成した。あえて双発機と入れたのは、ポーターモレスビー攻略前に海軍のロ・88エンジンを陸軍に技術提供したが、重量が重く単発機としての利用になりそうだったからだ。しかし、更に開発を重ね、ついにユンカースJumoエンジンの重量を下回ることができた。無論後退翼を採用していることは言うまでもない。

更に震電は史実での試験飛行の離陸の際、プロペラが地面に衝突したことから、後輪の脚を長くすることを考えたが、結局流星艦爆と同じ、逆ガル翼を採用した。また、震電はジェットエンジンへの換装も考えてターボプロップエンジンを新しく採用した。震電はまさに新機軸の宝庫なのである。

ブ
ロ
コ
コ
コ
コ
コ

特有のプロペラ音を発しながら、局地戦闘機震電は急角度で上昇していった。ターボプロップエンジンは、通常のレシプロエンジンに比べ高高度性能が高い。逆に低空では燃料を多量に消費する。続いて火龍も1000m近い滑走ののち、矢のような速度で上昇していった。今回は滑走距離を長くとってしまったが、ジェットエンジンの特性に慣れれば、500mほどで離陸できるだろう。

「やりましたな、ついに我々もドイツと同じ力を手に入れました」

海軍航空本部長の戸塚道太郎と、陸軍航空総監菅原道大は手を取り合った。特に親独派というわけではないが、独逸の強さに憧れをもっていた菅原にとって、ドイツ軍の強さの一つに挙げられる航空戦力において、ドイツと並ぶことがどれほどの名誉なことがあるうか

「そうですね、陸軍さんはこれからこれを220機も生産なさるとは、我々も200機というところですが」

「はい、それだけではありません。牟田口中将や富永中将の反対を押し切り、機械化部隊の増強を行います」

菅原は、機動艦隊の高い戦果を耳にしたとき、航空戦力と機甲部隊の有効さが身に染み、陸軍の愚将2人と対立し、最終的に機械化部隊の増強を勝ち取った。因みにこの機械化部隊を指揮するのは、インパール作戦で、牟田口廉也の無茶な作戦から、師団を撤退させた佐藤幸徳少将に決まった。

よくアメリカから陸の牛島（牛島満）海の田中（田中頼三）や、日本では陸の栗林（栗林忠道）海の山口（山口多聞）と呼ばれるが、佐藤少将は作者の中の名将の1人である。

「これで我々も機動艦隊に癒着せずとも米英に立ち向かうことができるやもしれん」

戸塚は隣に立つ菅原に聞こえるか聞こえないかという声で呟いた。

これを機に、陸海軍が少しずつともに歩み始めるかと思いきや、そうはならなかった。しかしこれはまだ先の話だ。

「ところで君らが保有する兵力というのはどのくらいなのかね？3軍（人員で約20万人）は持っていななければいずれ押し返されるぞ」

「いえ、2個師団ですが」

コルヴィーノはあっさりと答えた。たった4万多くとも5万の兵力で連合国軍はおろか日本・ドイツとまで戦おうというのだ。もし東部戦線でドイツがソ連を陥落させたら？西部戦線で連合国軍が敗走したら？ドイツ一国にも勝てないかもしれない。ムツソリーニは自分の軽薄な判断を後悔した。

「しかし、案ずることはありません。先にも言いましたが、我々は未来から来た。この艦は潜水艦なのですが、基準排水量は水上で36400t水中では39840tです。同じ艦をあと2隻持っておりまして、他に基準排水量12800tの潜水艦も2隻保有しております」

「何！重巡を凌ぐ大きさの潜水艦だと！馬鹿馬鹿しい君たちの頭はどうかしている」

「お言葉ですがこれは事実です。実際にこの艦内を見て見ますか？」

コルヴィーノはあくまでも冷静に対応した。もともとこのような反応であるうと予測していたのだから、当然であったが。

「信じられん。重巡の船底にいるだけだ、甲板に出せ！」

「それはできません。今あなたをここから出すと水圧で圧死しますよ。それでも構わないのであれば」

実際そんなことをすれば、原潜の内部にまで浸水し沈んでしまうのだが。

ムッソリーニは言葉にもならない声で悔しそうにしていた。

そうして戦略原潜ヴェニト「ムッソリーニは危険海域を巡航速度の32ktで離脱した。」

第30章 陸海軍合同試験飛行（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。作中に難しい単語などでできま
したら、出来る限り解答させていただきます。

第31話 COMSUBIN陸上部隊出撃前夜

「だが、君たちは今から何をしようと言うのかね？イタリアが連合国に蹂躪されている今、手持ちの兵器だけだと直ぐに枯渇するぞ」

ようやく、艦が潜水艦だと信用したムツソリーニは言った。

「勿論、まずは本国の奪回です。しかし、ここで自動誘導弾を使い、ドイツに手の内を明かす訳にはいきません。戦車3両1小队として、3隻から3箇所の上陸します」

コルヴィーノは言った。戦車の総数は18両、第5世代戦車であり主砲は135mm補助として7.7mm自動バルカン砲が付いている。基本的に親となる1両のみが2人であるとは1人乗りである。

ココで第5世代戦車と呼ばれるために必要な項目を挙げておくと、

- ・自動装弾装置標準装備
 - ・団体行動時のオートパイロット機能
 - ・135mm砲装備同時に通常弾に対する対応防御
 - ・NBC汚染地域における乗員の安全確保
- など

NBC汚染地域では、乗員が防護服なしでの防護が要求されている。

このイタリア軍MBT（主力戦車）『ダルド』はまだ配備が始まって間もないが、試験では何の問題もなく良好な性能を記録した。ま

た整地での最高速度は85kmとかなりの高速である。

「しかし、問題は本国に残っているイタリア兵です。我々の手持ちの兵力だけでは、もちろん諸外国に対抗できません。うまく彼らを救うことが出来ればよいのですが」

コルヴィーノは言葉を曇らせた。ムツソリーニもそれを聞いて黙り込んでしまった。

「まずはこの艦から上陸を始め、敵の主力を一手に引き付けることができれば、あとは簡単です。ドイツ軍にも応援を仰ぎたいところですが、彼らは我々が降伏していることは分かっていますから、我々だけで行います」

「私とその機甲部隊の司令長官ですか!？」

「もちろんだ。君にはそれを任せることができるからな。上官の無茶口(牟田口のこと)なぞに任せることはできん」

佐藤幸徳少将は(史実では中将に昇格しているが、牟田口が無理やり降格させた)正式に陸上艦隊司令長官及び陸上艦隊第一戦車連隊連隊長に任命された。

これについては一波乱あり、牟田口が自分を司令官にしてほしいと方面軍の木村兵太郎に進言したのだ。

「なぜ私が任されないのですか。私は佐藤のように軍命に背き、勝手に前戦を退くような輩やかいではないため、任命されたし」

牟田口がそう言うと、木村が逆に怒鳴り返した。

「黙れ！牟田口！貴様がそれ以上文句を言うなら貴様を更迭するぞ」

木村は牟田口の無茶な作戦のせいで佐藤が撤退し、尻拭いをさせられ、いろいろな面倒事を起こした牟田口に相当激怒していた。

しかし、なぜ機械化部隊を軽視する牟田口が、この司令官に任命されたかっただのかというと、方面軍司令官に匹敵する高い役職だったからである。

「一に勲章、二にメーマ（女性）、三に新聞ジャーナリスト」牟田口が好きなものと言われている物であり、この陸上艦隊司令長官は勲章に匹敵するものだと言われたからである。

マリアナ機動艦隊・空軍基地

「今井中佐、一度本土へ戻ってくれないか？今回のミサイルについていろいろな情報がほしい」

楯岡はミッドウェイ攻略間際に飛来した、ミサイルについて情報収集を行っていたが、うまくはかどらず、本土の諜報部とともに何か情報はないかと考えた。

「はい、分かりました。しかし本土のどの基地に降りればよいです

か？私だけだと美雷でいく方が早いんで」

「それについてはどこでもいいそうさ。なるべく多くの情報がある方がいい。それじゃあ頼んだよ」

ほんの数分で準備を済ませ美雷はマリアナをあとにした。美雷は航続距離が長くCTOL機でありSTOL機のため短い滑走路でも飛び立てる。

今井は皇居近くに作られた近衛師団専用飛行場に着陸した。天皇は車を回してくれたため、そのまま軍令部に向かった。

第31話 COMSUBIN陸上部隊出撃前夜（後書き）

「ご意見感想お待ちしております」

第32話 上陸（前書き）

遅くなつてすみませんでしたorz

第32話 上陸

12月29日未明

イタリア軍COMSUBIN陸上部隊はドルチエ級潜水奇襲揚陸艦3隻から『ダルド』を揚陸させ始めた。

「What!」

一人、海岸に立っていたイギリス兵が、高速で押し寄せてくる奇襲揚陸艦を見て叫んだ。すぐさま連合軍司令部に連絡し、初めは門前払いを食らったが、他の者からも連絡があり、イタリア本土に駐屯している連合国軍は騒然となった。

ダルドは上陸するとともに一気に市街地を蹂躪し、3ヶ所の上陸地点から次々と津波の如く占領していった。135mm砲の前に連合軍の戦車はなすすべもなく、大破・炎上していった。

夜明け前までに半分以上が占領され、最高司令官ドワイト・D・アイゼンハウワーは国外に脱出した。しかし、運悪くイタリア軍の攻撃に遭い、ここで戦死した。

最高司令官が戦死したことにより、連合国軍は雪崩を打って退却し、12月29日午前11時23分連合軍の一部を除いて戦死・捕虜となった。イギリス・アメリカ等は何の情報も届かなかったため、この事実を知ったのは2日後大晦日の日であった。

日本にはドイツを通じて逸早くこれを知って、ソヴィエトにも伝えようとしたが、現在準同盟国のドイツと戦闘態勢に入っているため、

松岡洋右らが反対し結局これを知っているのは現在日本とドイツ、そして当事者のイタリアだけだった。勿論今井はこのことをすぐに仕入れマリアナの司令部にも情報を送った。

イタリアの復活により、西部戦線に駐屯していたドイツ軍はすぐさま部隊を引き戻し、東部戦線に回した。既にMe262シユヴァルベは就役しており、ドイツ軍の優勢は目に見えていた。元々太平洋におけるアメリカの敗退により、連合軍は攻勢に出られずにいたため、こちらの戦力も対ソヴィエト戦に回していた。

「またかよ。向こうはどうなってんだ？」

今井は新しく入って来た情報を聞いてイライラしていた。はっきり言って、今すぐにでも現地に視察に行きたいくらいである。

その頃イタリアではパルチザン狩りが行われており、女子供関係なくパルチザンにかかわった者は殺されていった。

「ところで、私を助けなくても、君が権力を握ればよかったんじゃないか？」

ムツソリーニは戦略原潜ヴェニト「ムツソリーニ」の中で刻々と入ってくる情報を、コルヴィーノや副司令官のカルロ「アメデーオ」と聞きながら、ふと感じた疑問を投げかけた。

「まあ確かにそれもそうですが、私は人の上に立つのはうまくないのです」

「しかし君はこの艦隊を指揮しているではないか」

「いえ、本当はそんな器じゃありませんよ。ただ、序列でいくと私が任命されることになっただけです」

ムツソリーニはそうかと言ったものの、あまり納得がいつてないようだった。

再び場所は戻りマリアナ

「敵機来襲！敵機来襲！大型爆撃機20機！」

レーダー員がスピーカーを通じて叫んだ。今回はマリアナの基地航空隊が迎撃の命を受けた。次々と烈風に乗り込み、離陸していく。68機の烈風隊は20マイル先にいる大型爆撃機B-29の迎撃に向かい、24機はマリアナの上空直掩に回った。杉田が率いる烈風隊は次々と高度8000mで進んできた大編隊に高度11000mから逆落として襲いかかった。米軍側は高度10000m以上飛べる戦闘機は美雷だけだと思っていたが、突如現れた烈風隊に錯乱し、統率がとれなくなった。烈風は主に翼の付け根と爆弾槽に狙いをつけ必殺の15mm弾を叩き込んだ。

撃墜された味方機の破片によって損傷するB - 29もあり、30分で全機片がついた。

「そうか、やはりその程度しか情報は入ってこんか」

「予想していたならわざわざ俺がこっちに来る必要なかったじゃないですか」

電話越しに今井は愚痴る。

「まあそう言うな。どうせ君のことだ、現地視察に行きたいとでも言うんだろ」

「……はい」

「そうか、やっぱりな。だが今回はミッドウェイの攻略の方が先だ、年明けには戻ってこい。それまでそっちで情報収集たのむよ」

楯岡はそう言って電話を切った。

「一体どうなっているんだ……」

第32話 上陸（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております

第33章 怒髪、冠を突く(前書き)

これから更新は週1になりますorz

第33章 怒髪、冠を突く

今井が向かったのは軍令部と述べたが、正式な名称は帝国三軍総統
括司令本部である。

この組織は天皇直轄ではなく、政府が管理し、更に5つに分かれ、
それぞれ執行部（憲兵）、情報部、公報部、統括部、立案部となる。
実際に戦うのは、統括部の下につくので、政府が軍をコントロール
出来るようになった。

再び今井は情報部に戻ろうと思った時、ある者と遭遇した。

秋元順一少佐である。

秋元は軍令部に務めている。今井とは同期で、父は大手企業の社長
をしている、ボンボンである。

「よう、今井」

「・・・・・・・・」

秋元が声をかけてきたが、無視をして、通りすぎようとした。
しかし、秋元の肩を掴まれ立ち止まった。

「シカトかよ、つれねえなあ」

「何の用だ」

今井は興味がない。といったような表情で再び歩き出そうとしたが

「左遷先は慣れたのか？まあ、お前が飛ばされんのも仕方ねえよな。

お前の間違った考えを正してくれた先輩を殴ったんだからな」

「で、何が言いたい」

秋元の顔を見るたびに不愉快になるが、なれなれしくされ今井はうんざりしていた。

「いや、お前は前線に出て活躍を期待されると勘違いしてるようだからな」

秋元はイヤミっぽく今井に絡んでくる。

「分かってんのか？お前は期待されてるんじゃない。左遷されたんだよ。俺みたいにも有能なのは前線に送るのがもつたいないからな」

「それがどうした」

「だからお前は無能だから前線に流されたんだよ。期待されてるのはお前じゃなく俺だ」

秋元の下らないライバル意識にうんざりして、流そうとするが、逆に絡んでくる。

「それが言いたいだけか？」

「まあ、お前が死んでも悲しむ奴なんかいねえからな。お前がそんなだから親に捨てられたんだよ」

「捨てられた」？違う、捨てられたんじゃない。今井の中で、何か切れた。一瞬頭の中が真っ白になり……

ズガン

今井は無意識で銃を取り出し、そのまま秋元の左手を撃った。そして痛みで左腕を押さえ、かがみこむ秋元の額に銃口を向けた。

「てめえ……」

「なっ、何事だっ！」

銃声に気付いた警備兵たちが銃を構えた今井を取り押さえた。

「離せっ、よっ！」

普段の今井なら避けているはずだが、親を馬鹿にされ我を失った今井はほとんど何の抵抗も出来なかった。

警備兵に四肢を押さえられ、今井は身動きが取れなくなった。

「これだから、野蛮な……」

「黙れっ！（ボソツ）黙れええええ……ッ」

今井は怒りに身を任せ叫んだが、その心の叫びが秋元に届くことなく警備兵に連れていかれた。

このことは、直ぐに軍内部に知れ渡り、今井の降格や勲章の剥奪は決定的だと思われたが、東条首相がそれを止めさせた。

秋元はどちらかと言うと旧時代的な思想の持ち主で、陸軍の参謀達の受けが良かった。それが、現在の東条には目障りだったため、降

格をもみ消し勲章剥奪もなくなった。
代わりにミッドウェイ攻略後に1週間予備役に入れられることで、
この事件は落ち着いた。

軍令部では、相変わらずイタリアの情報を集めようと必死だった。
なんせ、分かったことはミサイルを発射したのはイタリアの潜水艦
と云うことだけである。

今井は現在、特高（特別高等警察）の面会室にいる。説明が先走り
今は取り押さえられた今井が、特高にしよつぴかれたところである。
今井は特高の取り調べに、全く口を開かずに行っている内に、木村兵
太郎と東条首相が今井を釈放させ、面会に来たのである。

「東条首相！と木村大将！」

「まあ落ち着け。木村とは初対面だな。しかし、君が釈放されたの
は木村のおかげだ」

東条の説明に、今井は木村に頭を下げた。

「しかし気を付けてくれよ。いくら君らが戦果をあげようとも、年
齢も若い君がこのようなことを起こすと今回のように厄介なことにな
る」

その言葉に今井は自分の立場を痛感した。戸籍が嘘であることくら
い、特高と言えど把握しているはずだ。

「すみませんでした」

「まあそう頭を下げるな。君の処分は22日から1週間の予備役投

入だ」

木村は初めて口を開いた。

「そうですか。迷惑かけてすみませんでした」

今井は謝った。仮にもこの国のトップが自分の為に動いてくれたのだ。

「まあいい。君は元の任務に戻ってくれ。それとこれが我が東機関が仕入れた情報だ」

木村は今井に最高機密の保有している情報を渡した。証拠に茶封筒に機密の印が捺されている。

第33章 怒髪、冠を突く（後書き）

初めは殴るという描写を取ろうと思いましたが、それでは警備兵が音に気付かないので発砲する描写にしております。

第34章 トラックノ英雄(前書き)

更新遅くてすいませんm(| |) m冬休みの宿題サボってて必死
でやってみました

第34章 トラックノ英雄

「また失敗か……どうにかB-29をトーキョーに送れないものかな」

ルーズベルトは最近いつもこんな調子である。失敗・失敗・失敗自分がなんと言おうが作戦が成功するはずもなく、いくら日本を恨もうと兵士の士気は下がる一方である。

ドタドタドタ

「大統領!!」

「なんだ!騒々しい!」

入って来たのはグローブス少将。原爆責任者である。

ルーズベルトは先ほどまで悩んでいたため、グローブスが入って来たことにイライラしていた。

「大統領、吉報です」

「なんだ?原爆が完成したか!」

ルーズベルトは一瞬歓喜したが、それもつかの間すぐに普段通りに戻った。それもそのはず、原爆が何十・何百はあったところで日本に運ぶ手段がない。

これでは宝の持ち腐れである。

「だが……どうやって日本に運ぶつもりかね」

二人の間にしばしの沈黙が訪れた。しかしそれは打ち砕かれた。

「潜水艦に積んで原爆に時限装置をつけてはどうでしょうか？これならばヨコスカにでも攻撃できます」

グローブスが考えた作戦はこうである。

まず、潜水艦に原爆を積み横須賀沖に向かう。そしてバッテリー室に塩素ガスを発生させ、原爆の時限装置を始動させる。発見した日本軍が原爆に気づきそれを調査するために横須賀などに係留させる。しかし、この原爆はダミーで、原爆発見から10分後に東京にB-29を到着させる。B-29は配備され間もないため片道攻撃などできない。無駄を徹底的に排除し、巨大な増槽をつける。そして中国から攻撃を仕掛けるという方法だ。

勿論途中で増槽は放棄し少しでも航続距離を延ばす。まだ原爆を守るために、同じく中国から北九州に空襲を仕掛ける。また、安全を考慮し、原爆は東京ではなく名古屋に落とす。

ルーズベルトはこの作戦の説明を聞き、すぐに決断した。まさか虎の子の原爆を二つも使うとは思わないだろう。この作戦は必ず成功すると確信した。

「素晴らしい作戦だ。この作戦が成功すれば君は特進だ！」

グローブスは特進などに興味はなかった。

アメリカが危機に直面している今、自分が作り上げた原爆を使うことができないため嬉しかった。

一方日本では、アメリカの飛び石作戦により取り残された島々から兵力を回収しようと試みた。

これには現地にいる陸軍ではなく、大量の船をもった海軍の仕事である。

使用する艦は、戦後復員兵輸送船として活躍した『葛城』（現：岩木）を含む、中型空母雲龍型3隻『雲龍』『那須』『岩木』である。

今村均大将指揮するラバウルはアメリカ軍の飛び石作戦により取り残された。

南西太平洋の牙城として要塞化されたが、既に無用の長物と化していた。しかし海軍首脳部は今村の才能を高く評価し、海軍の独断で回収することになった。

今村と再び戻すことによつて陸海軍の仲たがいを解消しようとしたのである。

ラバウルでは米軍の脅威が去り、穏やかな雰囲気になっていた。

また、上からの命令により、ラバウルはトーチカなどの解体が始まっていた。既に撤退の準備は始まっており、1月9日までの撤退完了に向け着々と準備が進んでいた。また餓島の轍を踏むまいと作られた田畑も全て元通りにした。

第35章 航空巡洋艦ト防空巡洋艦

主要艦艇の改装が進むなか、海軍は対空砲の更新が行われていた。VT信管の採用はもちろん、機銃の増設ではなく、機銃の射撃速度が向上された。

他にも対急降下爆撃機用の垂角度機銃と呼ばれる、30度〜98度の角がとれ、ほぼ垂直に弾を打ち上げるものが作られている

ちなみに不採用となった案には、硫酸などの強酸性の水溶液をばら蒔くものや、泥水のようなものを撒き、エンジンを壊すものなどがあつた。

今ならばイグノーベル賞ものである。

また、対空三式弾も改造され、今までのように機体を損傷させるのではなく、星弾のようにマグネシウム光を一瞬にして放ち、パイロットの目を失明させ、永劫使えなくするのだ。

しかし、この案は非人道的であるため、2・3秒失神させる程度の光量に抑えられた。

マグネシウム光は光量がとてつもなく強い
通常は直視することすら危険であり、更に高濃度の二酸化炭素中でも酸素を奪い光を放つ。

「対空砲の更新は順調のようだな」

都築造船大佐は呟いた。戦艦と言うものが、戦闘機などの飛び道具にやられ初め、舞台上から姿を消した。都築は機動戦艦・強襲揚陸

艦がこの時代にあらわれ、艦艇にもかかわらず航空機に対し全く引けを足らないことを知り再びこの表舞台にあらわれた。

また、金剛型戦艦・扶桑型戦艦はイージス艦に改装されることが決まっているが、まだそれほど技術を持っていない。

そのため全く手が付けられないまま各地のドックに入れられているが、呉と川崎のドックには新型巡洋艦を造るため開けられている。八八艦隊と言えど内容は大幅に変更されている。伊勢型戦艦の航空機が役に立たなかったが、離着艦が出来るならば空母機能と戦艦機能を持ち合わせることができ、またわざわざエスコート艦が必要ではなくなる。

つまり、カタパルトにより発艦のみできるのではなく通常空母と同等の空母機能をもつ戦闘艦艇を作ろうと言っているのだ。

しかし、資源の問題から新造する余裕はない。そのため既に航空機の発艦ができる最上型重巡洋艦が改装され新しい艦種、防空巡洋艦なるものが開発された。

しかし、十分な強度の飛行甲板を造ろうとなると重量が問題になってくる。軽くしようとするとう強度が不足する。それでは役に立たない。一回攻撃を浴びるだけで甲板が使えなくなるようでは、実戦で足を引っ張る。そこで指令部からの要望は800kg爆弾の水平爆撃に耐えうる装甲を持っていることが必要となった。

この無謀とも言える要望に答えるべく、考案されたのは衝撃吸収甲板である。

読者の皆さんも、ゲルシャーペンをご存知だろう。あのグリップのゲルに似た者を硬化させ、鋼鉄板とあわせる。しかし、溶接はできないため、リノリウムと同じように接着剤を用いて接着する。計算によると、厚さ12mmの衝撃吸収素材と鋼鉄板のサンドイッチ構

造で48cmの厚さまで重ねることので50番(500kg爆弾)の水平爆撃にまで耐えることができるそうだ。

しかし、更に高い防御力をもとめ、ハミカム構造を取り入れること
によって同じ厚さで20%近い強度を稼ぐことができた。

この場合はプリーゼ式バルジのように、鋼板でできたハミカム構造の多孔に衝撃吸収素材を流し込み、緩衝力として利用するのだ。

1944年11月26日

「そんなふざけたフネを造るのは資源の無駄だ！」

「しかし機動戦艦の航空機は十分に役に立っています。これならば護衛艦なしでも、空母の護衛ができます」

「それならば何故、伊勢と日向は飛行甲板を外すのかね？そこまで有効ならばわざわざ外す必要はないのでは」

航空巡洋艦は当初、建造への反対が絶えなかった。しかし、結局一隻のみ試験的に建造し、それによって増産、改装型を検討することになった。

また、今回改装される最上とは別に、鈴谷・熊野は対空砲を格段に強化させた防空巡洋艦(艦種としては重巡洋艦)へと改装されることになった。

一方、欧州戦線では、ドイツ機甲部隊がレニン・グラード及びスタ
ーリン・グラードを奪回し、モスクワに迫り縦深陣地を構築し城砦チタデル作戦を展開したソ連軍を破ろうとしていた。

ドイツ機甲部隊の大半はキングタイガーであり数に物を言わせT-34やスターリン重戦車を撃破し、更にJu-87スツーカーによる猛爆とMe-262シュヴァルベのロケット弾による戦車破壊でソ連軍は後に下がるしかなかった。

イタリア軍もダルドを用いて次々と近隣諸国に駐屯する連合国軍を駆逐していった。

また国内もドイツのシュペーアの力をかり、復興が始まっていた。今まで、南北で工業力の差が存在したが、北側で陸戦装備を南側で艦艇の修理、建造を行い、1ヶ月で復興の兆しが見えてきた。

海軍力が皆無に等しいドイツは陸戦装備に残されたT-34やスターリン重戦車を起用し、資材をUボートの建造に回した。

また、凱旋帰国した機甲部隊はワルキューレの機甲（騎行）と言われ、讃えられた。

シュババババ

Me262によるロケット弾攻撃にソ連高射砲部隊は即沈黙し、全くと言ってよいほど無力であった。

チタデル城砦作戦総司令官として、スターリンに命じられモスクワに来たジューコフは余りの悲惨さ、兵士の士気の低さに驚愕した。そんな中、スツーカーが現れ再び猛爆が始まった。高射砲部隊は壊滅しているため、ソ連軍はなされるがままであった。

「なんとということだ。我が軍はここまで無力なのか…」

「仕方ありません。アメリカはヤポンスキーにやられたまま、こち

らに兵力を回せないのぞ」

「しかし…」

ジューコフにしばしの沈黙が訪れた。

「そつだ、カチューシャを使え！」

カチューシャとはソ連軍の多連装ロケット砲のことである。

最高司令官がはつきりとした命令を出したため、一気にソ連軍の士気はあがつた。

今まで指揮系統が乱れ、誰が司令官かすらわからなかつた。これでは士気の低下は免れるわけがなかつた。

士気の低下とは恐ろしいものであり、いくら強力な装備を持つていても竹槍に負ける場合もあるのだ。

典型的な例として、ベトナム戦争が挙げられる。ベトナム戦争では米軍・南ベトナム軍（政府軍）が圧倒的な兵力を保持していたが、時が経つにつれ Kill ratio > 殺傷率 < は下がる一方となつた。

第35章 航空巡洋艦ト防空巡洋艦（後書き）

本当にすいません

この頃試験続きで中々執筆できませんでした。

学年末考査が始まるので次話投稿は1ヶ月後になりそうです

第36章 東部戦線・独逸軍の猛攻（前書き）

テスト終わりました
2つの意味で

第36章 東部戦線・独逸軍の猛攻

バババババババババ

100門を超えるカチューシャからロケット弾が発射されていく。しかし、結局は通常の対空火器と命中率は変わらない。

それでも、完全に油断しきっていたドイツ軍には不意打ちとなり4機のMe262シユヴァルベと24機のJu87スツーカーが撃墜された。

「ウラーー!!」

今まで悪魔のように飛び回っていたジェット機が撃墜され、ソヴィエト軍將兵の士気は一気に上がった。

「チツ…」

戦車撃破王ハンス・ウルリッヒ・ルーデルは、ロケット弾を乱射するカチューシャを見ると、その内8台程が密集しているところを見て、Ju-87スツーカーをヒラリと旋回させて悪魔のサイレンを鳴らしながら急降下した。

その瞬間、ルーデル機は猛烈な対空砲火の弾幕に被われたが互いに高速のため、瞬発信管のロケット弾は翼当たり爆発した時にはスツーカーは既にその威力半径外にいた。

そしてルーデルはそのカチューシャの大群へと突っ込んで行き、爆弾装から800kg爆弾を投下した。

次弾装填し、次の発射に照準をあわせていたカチューシャがロケット弾に誘爆し、そこにあったカチューシャの大群は全滅した。

「…なるほどな」

Me262シュヴァルベのパイロット、電光ことハインツ・ベール
ブリュッセル
はスツーカー大佐の攻撃を見るや否や、カチューシャを30mm機関
砲の照準に入れた。

ズガガガガガッ

シュヴァルベ
燕とは思えない猛烈な砲火でカチューシャを炎上させ、ソヴィエト
軍は全部隊の内15%の損害を出した。
カチューシャ

一般に、軍と言うものは30%で戦闘能力を失ったとされる。

このまま行くと後2回…いや1回の予備爆撃でソヴィエト軍は敗北
するだろう。

「この損害は私の予想に合っていないではないか…」

ジューコフは一度、ノモンハン事件で1個師団近い損害を出しながら、
日本軍に勝利した経験がある。

しかし、今回はその比ではない。まだ前哨戦でありながら、1個師
団+3個大隊が失われている。

そこに、縦深陣地の後方から、ラボーチキンやイリユーシン5・7
が現れた。

ソ連空軍は決してドイツ軍に引けをとらない、レシプロ機としては
最強と言っても過言ではないのだ。

そして、ソ連機の登場によって、戦局は反転した。更にドイツ空軍
も帰投せざるを得なくなった。Me262の燃料問題とスツーカーの
弾薬である。

エンジンを強化したスツーカーは17爆弾2個を搭載していたが、カ

チューシャ撃滅や墜落によって、当初の爆撃場所に攻撃できなかった。

しかし、ソ連機の追撃は僅か5分で挫折する。新生イタリア軍ジェット戦闘攻撃機「ネロ・アラウツチェツロ」が現れたのだ。

イタリアは復活と同時に未だ精強ドイツ軍と同盟を結んだのだ。そして、ドイツのソヴェイト侵攻の支援を行うこととなったのである。ネロ・アラウツチェツロは軸流式ターボファンエンジンを2基、最高速度914km、作戦行動半径1242kmと、Me262とは段違いである。

ソ連機は次々とネロ・アラウツチェツロの攻撃を受けて、火球となり墜ちていった。

無論この機を操縦しているのは1944年のイタリア軍人である。

ネロ・アラウツチェツロは戦闘攻撃機だけあって、1回の兵器搭載量が凄い。シーハリアーが4tに対してこの時代に造られたことも考え最大で2.3tを誇る。

イタリアは日本と違いそれほど急ぐ必要はなく、レシプロ機を開発せずに直接ジェット機の開発に取り掛かることが出来た。しかし今年中に手を打たなければならぬ。そのため機体数がまだ50機程度しか配備されていない。

資源はどこから来たのかというと、ヴェニト・ムツソリーニの同型艦ヴィットリオ・ヴェネト・フランチェスコ・カラッチョロ及び攻撃型原子力潜水艦デルフィーノ級3隻デルフィーノ・ローンディネ・スクアーロに積載されていたものだけでは足りないため、ドイツから資源を回してもらった。

1月7日

東経148度南緯3度

ラバウルの北西部に3隻の中型空母は来ていた。ラバウルの戦力を一時引き揚げるためである。

幾度かコンソリデーテッドPB Yカタリナ飛行艇の偵察に接触したものの、近くに米軍の大部隊はなく、艦隊を見るや否や尻尾をまいて逃げて行った。

「今村大将！日本艦隊と思われる艦隊を発見しました」

今村のいる司令部に報告員が入ってきた。

「そうか…予定より早いな。まあいい、撤退の準備は出来ているな？」

「はい、航空部隊は既に收容されると報告が入っています」

ラバウルに本拠を置いていたラバウル航空隊は、毎日3度の偵察機を飛ばしていた。

艦隊を発見すると、直ぐに收容を始め1時間程前に全機空母に收容された。

陸戦装備も收容準備は出来ている。

「後1時間40分程でこちらに来れるそうです」

「そうか、報告は以上だな」

報告員は敬礼をして、退室した。

予定通り雲龍・那須・岩木の三隻はラバウルに到着し、次々と戦車・自走砲・重砲などを回収していった。護衛艦として随伴してきた利根型重巡洋艦2隻も空けてきた弾薬庫に多量の弾薬を積み込んだ。ラバウルの航空機の大半は零式艦上戦闘機21型のため折りたためる範囲が狭いため格納庫は限界であった。

仕方なく故障機は甲板に出し、一部は重巡に積載した。また、マリアナを獲られなかったためラバウルには綺羅星の如くエースパイロットがそろっていた。

「おう、今村。久しぶりやのう」

「小沢か。随分と出世したもんやなあ」

ラバウルにいた今村とこの艦隊を指揮している小沢は家が近かったために仲が良かった。

今村は小沢の歓迎を受け、艦橋に上った。

「それにしてもずいぶん敵さん弱いが・・・何かあったんか？」

機動艦隊がここに来たことは最重要機密のため前線には知らされていなかった。そのため今村も大将でありながらこれを知らなかった。

「それはここでは言えん。軍令部の連中に聞いてみればいい。まあその前に知るようになるかな」

小沢も独断でこの情報を流すわけにはいかなかった。アメリカですらこの情報はほとんど知られていない。知っているのは太平洋戦線の中将以上の階級を持つ者だけである。

当初の目的を達成した小沢艦隊は進路をマリアナへと向けた。

第37章 ホワイトハウスの苦悩

5機のジェット戦闘機「火龍」がV字隊形を組み、淡路島航空基地の上空を飛び回っている。

火龍の生産もようやく軌道に乗り、基地には大量の航空機が並んでいた。

高高度戦闘攻撃機「雷雉」も既に前線へと配備が始まっている。無論、最新鋭局地戦闘機でターボプロップエンジン（海軍名：曹一二型）を採用した震電も千葉の南房総海軍航空基地と北九州基地に配備されている。

しかし、最近は全く飛来する敵機はない。

米軍も、侵攻どころか太平洋艦隊の再興に必死なのである。もちろん大西洋艦隊を太平洋に回せば済む話だが、米軍は二面戦争、つまり日本と独伊軍を相手にしているためそうもいかない。

それでも米軍はどうか攻勢に出ようと、大規模艦隊計画を立てた。それはマンハッタン計画に並ぶ国家の威信に関わるプロジェクトであり失敗すれば、国家どころか国の存亡に影響する。

そんなことも露知れず、マリアナには機動艦隊・連合艦隊の日本艦隊が集結していた。これはM I作戦（ミッドウェイ・アリュウシヤン方面同時攻略作戦）をこえ、実に254隻にも及ぶ。

何故これがM I作戦を越えるのかというと（M I作戦は350隻）排水量が違う。艦艇数のわりに、機動戦艦約15万t・大和型戦艦約7・2万t。流石に壮観である。

マリアナ基地上空では新型艦戦烈風が飛び交っていた。ミッドウェイ

イ攻略作戦は烈風の初陣である。
その烈風にはアグレッサー機として、美雷搭乗員があてられた。

「相手は歴戦の零戦乗りだ…気を抜くなよ山城」

> はい<

飛び上がるとすぐに模擬空戦が展開された。

先頭で攻撃を仕掛けてきたのは、マリアナ沖海戦でVT信管の脅威に晒されるはずだった零戦乗りである。

今井はヒラリと急旋回し、その機の射線軸から消え、後ろについた流石に相手もフライト時間が長いいため、すぐにブレイクし上昇するが、そこを山城機に捕らえられ撃墜判定となった。

そんな今井に果敢にも攻めてくる烈風がいた。
杉田少尉である。

今井はすぐさまそれに気づきブレイクしたが、杉田も同時に同じ機動をとった。

> 流石にエースは一味違いますか？<

山城が無線で話し掛けてきた。

「お前、後ろ捕られてるぞ…」

追われている身にあるにもかかわらず、このように静かで見られるのは流石エースパイロットと言うべきか、今井だからと言うべきか。しかし陸おかにいる時よりも口数は多い。なぜなら、常に僚機と会話をとったりしていなければ、いつ僚機が撃墜された、または救援を頼まなければならぬときに救援依頼が出来るか分からなくなるからだ。

> えっ、嘘っ！？ヤベ<

山城はすぐにブレイクしたが、しつこく追い回されている。

ジェット機ならば、僚機ウィングマンと連携を執るが、レシプロ機トックファイターの格闘戦となるとそうもいかない。

1 on 1の真剣勝負である。

現在高度6200m、そろそろ酸素マスクが欲しくなってきたところだが、今井は逆に急降下し、どんどん加速する。それでも杉田はそれに着いてくる。

今井は海面すれすれで機首を引き上げ、水平飛行に移る。その状態で最高速まで加速し、杉田機の射線軸から逃れるように左右上下に機体を動かす。

それに着いてくる杉田機をミラーで確認すると、操縦桿を引いて機体を上向きにする。

「えっ！？」

最高速の杉田機はそのまま今井機をオーバーシュートし、今井は再び機体を水平に戻す。Su-27など、高機動性能に優れた機しできないコブラである。

「くそっ」

杉田はすぐにブレイクしようとしたが、時すでに遅し、今井機の射線軸から逃れることなく撃墜判定となった。

その後今井は矢継ぎ早に烈風を撃墜し、空に残っている大半がアグレッサ機となった。

> センパイ何機やりました？<

山城が陽気な声ではなし掛けてきた。

「8機だ…」

今井は独り言のように呟き、基地へと降り立った。

通常、パイロットのフライト時間は600時間必要とされているが、彼らはその課程を修了した程度が大半、本物のエースや撃墜王となると1割に満たない。

確かに岩本・坂井など撃墜王もそろっており、美雷のパイロットも撃墜判定をうけているが、彼ら自身もまだ未熟であるからだ。

これではいくら優秀な機体を作っても前線から消耗していくばかりである。

しかし、アメリカも優秀なパイロットは少ないはずだと考え直した。

ところで、ハルゼーが指揮することになっていた装甲戦艦（Armored Battle Ship）アイオワ級はどうなったかというと、大規模艦隊計画（通称：Rainbow Noah Project）の10万t級航空母艦の就役と共に、初出撃に臨むことになっている。

何故、一度日本軍に空母は不要と考えられていたにも関わらず空母を戦線に参加させるのかというと、新型艦戦F8Fが量産体制に入り、更にFJ-1フュリーというジェット機が完成したからである。

このフュリーは、ノースアメリカン P-51 Mustang の機体を流用したジェット戦闘機で史実とは能力が低下したが、レシプロ機相手にはかなり優位に戦える機となった。
ちなみにこの少数のジェット機部隊を率いるのはアメリカ海軍撃墜王：デイヴィット・マツキャンベルである。

ホワイトハウス・グラウンドフロアー
マッブルーム

小児マヒの後遺症により、車いすに座ったローズヴェルトはマッブルームで戦況報告を受けていた。とはいっても、対日戦闘は12月27日に実施された帝都爆撃以降大きな戦闘はないため20分程度で終了した。

「諸君、ジャップの連中の暗号は解読できたのかね？ 来年には再びマリアナを攻略するんだ。強力な武器を持っていても敵情を知らねば勝てる戦い（バトル）も勝てない」

「はあ・・・それが暗号は解読できないままであります」

合衆国艦隊司令長官を勤めるアーネスト・キングが答えた。

「更に問題は戦力のことだけでなく、^{メンタル}精神の方も問題でして、兵員の士気は下がる一方です。はっきり申しますと、オレンジ（日本）とはここらへんで講和するのが最も賢明かと」

キングは続けた。はっきり言って、中国国内でもアメリカが支援している蒋介石側つまり国民党側の勢力が弱まり、毛沢東ら共産党が勢力を伸ばしている。

「馬鹿もの！！我々はジャップの連中相手に既にたくさんの人々を失った、ここで講和などすれば彼らに申し訳が立たん！」

ローズヴェルトははつきりと言い切った。確かに真珠湾奇襲だけで2000人を超える被害を出した。講和などすれば戦死者の遺族からどのようなことになるだろうか。

「しかし大統領、我々はドイツと戦う口実を作るためにオレンジと戦争を始めました。一旦日本と講和し、建造中のレインボウ・ノア全艦を以ってドイツ・イタリアを叩くべきです」

こんなことをマッカーサーが聞けば激怒したであろう。マッカーサーにとつて対日戦争を行う意義はフィリピンの奪還にあり、「I shall return」と大見栄を切って取り返せないなど、プライドが許さないのである。

「まあとにかくだ、ドイツがここまで持ちこたえているということ、我々のB-29の能力が試せるというものだ。しかしジャップの連中にアジアの覇権を握らせるわけにはいかん。それでよいかな？キング大将」

キングはやはり納得がいかなかったが、渋々承諾して、戦況報告は終了した。

第37章 ホワイトハウスの苦悩（後書き）

評価・感想・誤字脱字指摘お待ちしております

第38章 今村帰還。米艦隊再建（前書き）

中継ぎの説明文のようなもんです

第38章 今村帰還。米艦隊再建

1945年1月8日一〇五〇（ヒトマル・ゴマル）

小沢率いる中型空母群はマリアナへと無事帰還し、今村も機動艦隊群を目の当たりにする。

「なんなんだこの船は！？日本はこんなものを持っていたのか」

今村は雲龍の艦橋から強襲揚陸艦兼超大型航空母艦『飛龍』『蒼龍』を見上げた。すると基地の建物から一台の車が出てくるのが見えた。

「今村、降りるぞ」

小沢が声をかけると今村は冷静な表情に戻ったが、驚きを隠し切れていないようだった。

「あ、ああ」

雲龍から降りると見たことのない将官が待っていた。今村は知らなかったが機動艦隊の司令長官である楯岡であった。

「はじめまして今村大将。私は機動艦隊司令長官の楯岡と言います」

今村は機動艦隊や司令長官、また楯岡と名乗る30代後半にしか見えないような大将……。階級章を見てであるが……。を目の前にして些か混乱しているようだった。

「まあ楯岡さん、今村は今までの経緯を知らないので容易に理解で

きないでしょう。このことを知っている連中でも神風が吹いたなどと吹聴する輩もおりますので」

「そうですね、詳しい経緯はこれからお話ししましょう。今村大将、こちらに御乗りください」

楯岡はそう言ってジープに乗るよう促した。

今村は基地内に入ると驚きの連続であった。基地は地上2階建て地下6階まであり、高速エレベーター・空調装置が完備されており、エレベーターにおいては今村の知っている箱型で非常に低速なモノではなく、足場のみで静音なのである。

駆動方式は電磁式^{リニア}であり、俄かに信じ難かった。

「小沢……これはどういうことだ？日本にこんな技術があるとは思えん。アメリカにもこんなものはないはずだ」

「まあそう急ぐな、しっかり説明するから」

鬼瓦とあだなされたとは思えないような顔で小沢は今村に言った。

そう言われて今村らが入った場所は戦闘指揮所にあたるタクティカルルームと呼ばれる場所である

そこには巨大なスクリーンと他に7つのモニター、そしてコンピュータ等の電子機器である。今村にはそれが何か分からなかったが、投影機の類いであろうと考えた。むろんそれは間違っていたのだが、

「ここは今までの戦闘指揮所にあたる基地の中枢や。下の連中には最終決戦に備えて本土で極秘に開発しとったことになったが、実際はそんな代物じゃなくて俺らにもよく分かん」

「見てたらそのようだな。少なくとも日本いや電子機器の先進国のイギリスもこんな技術は持っていないだろうな・・・」

小沢と今村が話している後ろから、楯岡が口を開いた。

「割って入って申し訳ありません。先ほど申しましたが、私は機動艦隊と呼ばれる大型空母群の司令長官をしております。今村大將が見られたあの巨大空母は機動艦隊のフネでして、あその他に3隻の機動戦艦、分かりやすく言いますと航空戦艦を保有しております」

楯岡はそう言うと、私物のワインレッドのノートパソコンを開き、今村に画面を向けた。

「これは我々のテクノロジーの一部でして、ノートパソコンというものです。突然このようなモノを見せても理解しがたいでしょうから・・・まあ、話を簡潔にまとめますと我々は現在から約170年後の未来からやってまいりました」

今村はポカンとしたが、同時に妙に冷静でいられた。冷静でいられた理由は楯岡に見せられたノートPCの画面には、視神経を通して様々な情報が送り込まれる特殊な暗示サブミナルが施されており、それによって今村はこの現実をすんなり脳で受け入れることが出来たからである。

「そうか・・・それでは米軍の最近の弱体化は貴方がたによって、

ということですね」

「はい、そうなります。ところで1週間後にミッドウェイ攻略作戦が行われるのはご存知ですね？われわれはそのためにここへ戦力を集中させております。少しご覧になりますか？」

「無論だ。わざわざ拒否する理由もありませんし」

再び外に出た3人の将官たちは、基地に並んだ海軍基地航空隊の航空機群の間を通っていた。

そこに並んでいるのはJU87スツーカーを日本製のエンジン・機体でさまざまな改良を行った艦攻と艦爆であった。

スツーカー譲りの逆ガル翼と液冷エンジンの引き締まった機体は今までの日本軍機とは大きく外見は違っていた。

無論、既に『流星』は就役しているが、スツーカーの爆弾搭載量には遠く及ばない。何せ改造を施し爆弾搭載量も落ちたが、代わりに航続距離がグンと伸びた。実際のスツーカーは1800kgであるが、こちらは1000kgつまり1t。急降下爆撃を行えば、重巡程度でも一撃で沈む。今までの艦爆とは比べ物にならず、搭載重量1tを越える艦載機はこの機が初となる（B-25は艦載機ではないため、この場合は除外している）。また、引込み脚を採用していることはもちろん、ロールスロイス社製マリンエンジンをドイツが鹵獲したスピットファイアから取り出し、分解・研究し復元した鴉からす発動機ついでを搭載し、最高速度520kmと少々流星に劣るものの、機体の頑強さ、航続距離2997km（過荷）なども含めれば、十分な能力である。言うまでもなく、名称も変更され零式艦上攻撃機となった。この零式は皇紀2600年のように後期の下2ケタから来るものではなく、艦上攻撃機として試作型、分かりやすく言うのであればエヴァンゲリオン試作零号機同じ命名基準である。

鴉発動機はロールスロイスのオリジナルとは違い、熱田発動機（彗星艦爆や三式戦飛燕に搭載されている液冷エンジン）と烈風に搭載されている鷹発動機（トウホウエンジン）で培った技術と新たなV字型エンジンの構造を取り入れ、大幅な形状変化はなくより強力なエンジンとなった。

次に烈風が並び、その奥には局地戦闘機震電と邀撃機「旭光」が並んでいた。旭光は大日本帝國初のジェット戦闘機で、次期艦上戦闘機のために、改造された機体が現在試作中である。

また、旭光は元々陸軍が火龍と命名し、製造していたものであるが海軍では火龍ではない名前にしようということで改名された。中身は同じで塗装と名前だけが変わっている。

「こちらの機は橘花（きっか）ですか？」

今村が尋ねた。確かに元の機体がMe262シュヴァルベのため見た目に於いては見分けづらい。

「いや、これは橘花じゃなくて旭光と言ってドイツより優秀な機体だ。陸軍では火龍と呼んでるがな」

小沢が答えた。

ハワイ某病院

「レイ調子はどうだ」

療養中の第五艦隊司令長官レイモンド・A・スプルーアンスの下に、

艦隊を失い陸に上がることとなった第三艦隊司令長官ウィリアム・ハルゼーが訪れていた。

彼らは親友であり、このように一方が入院するともう一方が見まいに来ると、仲が良かった。

「ウィルか、おかげさまで随分と良くなったよ。お前の方はくろうしているようだな」

「まあな、マックも最近はかなり落ち込んでな、次の作戦には支障が出そうだ」

ハルゼーは苦い顔をしていた。

とはいえ、本土では信じられないほどの艦艇の建設がすすめられ、既に

レインボウ・ノア計画レインボウ・ノア級航空母艦1・2番艦、ブラック・ノアとレッド・ノアの艤装がほとんど終了し、英国海軍のキング・ジョージV世級戦艦アンソン、ハウ。

ヴァンガード級戦艦ヴァンガード、セント・ビンセント。

更にイラストラリアス級航空母艦第一・第二グループ、フォーミダブル、インドミタブル。

同級第三グループ、インプラカブル、インディファガブル

をアメリカ海軍との連合艦隊として、次期作戦に臨むつもりである。更にはエセックス級航空母艦ベントン、ボノム・リシャルル。

タイコンデロガ級航空母艦シャングリ・ラ、レイク・シャンプレーン、レイテ、タラワ

を進水、就役させた。

ヴァンガード級は史実では建造されなかったものの、アメリカの要望により建造することとなった。

先の戦闘で日本軍に撃破されたABSも2隻モンタナ、ニュー・ハンプシャーが就役した。

この艦隊全艦を以つて日本軍を撃破し、再攻勢に出るつもりである。また、艦上戦闘機はイギリスの開発したグロスターミーティアで、軽空母にはF8Fベアキャットを搭載する予定である。その他艦載機も、米軍のものを使用し、イギリス海軍は既に熟練航海を進めている。

第39章 マッカーサー司令部思案ス

「それでキング大将、いつの出撃となるのかね？」

「指揮官にはハルゼーを抜擢し、明後日には英国海軍がパールに戻ってくる予定なので、全艦への給油が終了次第出撃サイパン沖で敵艦隊と会敵、戦闘となる予定です。レインボウ・ノアも予定通り働いてくれるのならば、そのままサイパンに艦砲射撃及び空襲を行う予定です」

キングはマップルームの地図を指しながら言った。

主要艦艇18隻、総艦艇数497隻、搭載機数1280機＋軽空母搭載機630機と史上空前の航空機の数となった。

「それでは今度こそジャップの連中を叩き潰すことが出来るのだな」

ローズヴェルトはキングを睨みながら尋ねた。

「はい、しかし本職が危惧しているのはフリークが出てくるかどうかなのです。あいつ等が出てくると、我が艦隊は叩かれ太平洋は日本の海になることでしょう」

現在、マッカーサー率いるアメリカ陸軍、海兵隊合同軍はオーストラリア4個正規師団と7個徴募師団と共にアリススプリングスに拠点を置き、更にシドニー経由でB-29を50機を送り込んだ。

更にP-38ライトニング、P-47サンダーボルト、P-51マスタングを大量に送り込んだ。

マツカーサーはオーストラリア政府に自国の兵器を生産させようと、^{アメリカ}当時の首相カーティンに依頼し、ケアンズ、ブリスベーン等の工場で生産させたが、ノーザンテリトリーを盗られただけのオーストラリア人はここまで日本軍がくるまいと考えており、危機感が全くと言っていいほどなかった。

キンバリー台地奪還のためにカーティン首相はわざわざ本国イギリスから師団規模での救援を求めた。チャーチルは、こんな苦しい中そんなことはできないと一蹴したが、モントゴメリーが3個師団を率いてオーストラリアに向かうと言ったので渋々承認した。

「全くオージーの連中ってヤツは危機感ってものがないな」

マツカーサーは罵った。いくらカーティンに頼んでも、のりくらりと受け流しようやく重い腰をあげたと思っても、国民が中々動かない。

そのため、予定より生産ラインの整備が遅れ自走砲の生産が始まったばかりである。

一方アメリカ本土では、急ピッチで原爆の製造・新型艦艇の建造が行われていた。

空母もエセックス級からレインボウ・ノアに変更され、戦艦もアイオワ級ABS（別名モンタナ級戦艦）、艦載機はF8Fベアキャット及びグロスターミーティア、軽空母もサイパン級。

また、キンバリー台地会戦で現れた特型重戦車に対応すべく、M4シヤーマンからM5ピューマ。

ピューマはT-34/85を参考にし、小さな車体に強力なエンジ

ン、更には主砲俯角の拡大が行われた。

モンタナ級はアイオワ級から更に電子機器や主砲等を更新し、50口径16インチ砲も砲塔の形状を変更し曲面装甲を用いて、レーダーも英国から貸与してもらった最新のものに換装し主砲とのデータリンクシステムを完成させた。

レーダー照準においても、バックアップシステムを搭載し精度の向上を図った。

「全く、マッカーサーもオーストラリアを防衛できていないのに攻勢に出ようと攻め急ぐなんて無駄に艦隊を消耗するだけだ。大統領は何を考えてるんだ」

出撃を1週間後に控えているハルゼーは、スプルーアンスの見舞いに来るのが日課になっていた。

スプルーアンスの体調も随分良くなり、作戦が終了すれば再び艦隊を指揮することになるだろう。

「まあそう言うな、合衆国としてもこれ以上無駄な戦いはしたくない」

スプルーアンスはそう言ってハルゼーをなだめようとしたが、逆にハルゼーの顔は怒りでクシャクシャになった。

「ふん、大体ジャップと戦うことになったのはこっちから仕掛けたからだろう？今のジャップは本土に上陸してもおかしくねえな」

「そうだな、だが俺たちは誇り高い合衆国海軍の指揮官だ。敵を前にして逃げ出すわけにはいかないだろう」

スプルーアンスのこの言葉がハルゼーの闘志をくすぐった。

「当然だ、次こそはジャップの連中にひと泡もふた泡も吹かしてやる」

「期待してるよ、そろそろ時間だ」

スプルーアンスが時計を見るとそう言った。面会時間が過ぎている。病院側も気を遣って2人をそっとしておいてやったのだ。

「おつとそうだな。また明日も来るよ」

「ありがとう。だが訓練もしっかりやつとけよ」

ハルゼーは病院をあとにし、パールハーバーへ向かった。既にモンタナ級戦艦はこちらに到着している。

まだ2隻しかないモンタナも6番艦までの建造計画が立っており、レインボウ・ノアもブルーノアとイエローノアの2隻が就役し3月までには大海洋艦隊が完全復活する予定だ。

ここで上手く戦えば、欧州戦線でもノルマンディに再び上陸作戦を実施し、第2線戦を開きソ連の大艦隊計画とともに日本を叩くことが出来る。

「ところで参謀長、B・29は送られてきたが護衛機の方はどうなっている?」

B・29による地上部隊殲滅を考えていたマツカーサーは、前回の戦いで繰り出してきた零戦七五型のことを危惧していた。

「はい、陸軍機の大半はライトニングで他はサンダーボルトが80

機、ムスタングは30機には満ちません」

マツカーサーは一瞬考えた、海軍機はF6Fヘルキャット・F4U
コルセアがそろっているが陸軍機は種類が多くばらついている。出
来ればP-51を多数そろえたいが、欧州でMe262シユヴァル
ベに対抗するため数が少ない。

「なんとか本土から100機、いや80機ほどこちらに送れないも
のかね。ジャップに対抗するにはもつと欲しいところだが」

「恐らくそれは難しいかと……。本土では陸海軍機含めて7種類の
戦闘機を生産しています。もちろんすべてに需要があるため、生産
の打ち切りが出来ません。他にも海軍の雷撃機やこちらのB-29
などの生産も有りますので」

「そうか……。ならB-29の夜間爆撃は可能か？多少精度は落ち
るが高速爆撃なら低高度でも迎撃に遭わず、ある程度の効果はある
だろう」

「その点についてはルメイ中将を呼んでみなければ分かりません」

参謀長はマツカーサーの提案を聞き多少驚いたようだった。しかし、
戦略爆撃の父とも言われるカーチス・ルメイならばこの夜間爆撃を
成功させることが出来るだろうと思ひ、司令部にルメイを呼んだ。

翌日の午後、ルメイはマツカーサー司令部に到着し本作戦を聞いた。

「どうかね、やってくれるか？」

「はい、勿論夜間爆撃なら最も安全ですが今回の場合目的が建築物の破壊ではなく戦闘車両の削減であるならば、焼夷弾ではなく通常の爆弾を使用しなければなりません。それならばこちらの予想する被害を与えることは困難だと」

「君がそう言うならば仕方がない。B - 29をなるべく有効利用できる案を考えてくれ」

マッカーサーがそう言うと、ルメイは退席し再び思案を始めた。

第39章 マッカーサー司令部思案ス（後書き）

普天間の基地移設問題もかなり泥沼化してますね。

地元住民は県外移設を主張していますが自分が良ければ他の人はどうなってもいいのでしょうかね。そんなことも考えられないなんて思慮が欠けているとしか言いようがないです。

中国が次々と軍拡を進めている中、日本は防衛費の削減。国会は日本をつぶしたいんでしょうか？

鳩山総理の姿勢もしつかりしてほしいですね。アメリカに従属するんならちゃんと地元住民を説得しろよ。逆に日本の土地だから地元住民の意見を尊重したいならアメリカの意見を突っぱねるぐらいの気持ちでやってくれないと困りますね

第40話 ヴィルヘルム？世

1月15日未明

機動艦隊は第一航空戦隊、第二航空戦隊を率いてミッドウェイへ向けてトラックを出港した。

第三航空戦隊以下小型空母はパナマ運河封鎖に向けて同じくトラック島を出港した。

今回の作戦から数名の美雷搭乗員が抜けた。大本営としても機動艦隊は完全な状態でミッドウェイ攻略に向かつてほしいのだが、通常戦闘機のパイロット育成を優先したいという楯岡に押され、小沢もそちらの方が重要だと、各部隊3番4番の強さを誇るパイロットが内地で搭乗員の育成を行うこととなった。

それで選ばれたのが帝鳳航空部隊：かみやれい神谷零中尉・神龍航空部隊：ま真鍋和人少尉・鳳雷航空部隊：ふくいかずたか福井一貴少尉である。この3人はいずれも辣腕で撃墜機数は今井らにも劣らない。

ドイツ海軍地下Uボート工場

ここではオペレーションリゼレーヴェに備え大日本帝國海軍マル5計画雲龍型航空母艦の設計図から再びグラーフ・ツェッペリン級航空母艦の建造が行われている。

また艦載機の方もBf-109Tを改装し増槽の装備も可能にしたBf109T-2を予定している。

この計画は海軍内部でヴィルヘルム？計画とよばれている。

ヴィルヘルム？世は19世紀に宰相ビスマルクと対立し海軍の増強を行ったドイツ皇帝である。そのために第一次世界大戦に走り、敗北し、更にはヴェルサイユ条約により軍備縮小が行われたのは殆どの方も周知の事実であろう。

「壮観な光景だとは思わないかね？カイトル元帥」

視察に訪れたアドルフ・ヒトラーは脇に立つ参謀のカイトルに尋ねる。カイトルはもう一人の参謀・作戦参謀のヨードルとともにラステンブルクにある総統司令部（狼の巣）からブレイメルハーフェンにあるこの地下造船所にやって来たのだ。

「おっしゃる通りです総統閣下。キール軍港にあるUボート工場とは規模が違います。我々は今まで水上艦艇を造ってはことごとく辛酸を舐める羽目となってきました。しかし、水上艦艇に於いて優秀なニホンの技術供与によりそのようなことは二度とないでしょう」

「その通りだ。我々は？号戦車を主力とする陸の王となるとともに海でも世界最強となるのだ」

ヒトラーは上機嫌で言った。

航空兵力もイタリア軍のネロ・アラ・ウツチエツロとMe 262シユヴァルベなど、ジェット戦闘機により連合国軍を圧倒している。コルヴィーノの助言により、ヒトラーはフォッケウルフ社への援助を行い、これにより航空機産業における競争が激化した。

ちなみに？号戦車は国民車製造会社フォルクスワーゲン社が設計に名乗りを上げた。

？号戦車ティーゲルの複雑な機構を改善し、量産速度の向上のため

なるべく簡単な機構となり、砲も従来のアハトアハトと呼ばれた8mm砲から95mm砲へと変わった。車体重量を抑えるため、45度の傾斜装甲を採用して重量はティールの23%増し程度にとどまった。

「これで余は世界を統べる王となるのだ。そしてゲルマン民族……アリア人種こそが最も優れた民族であることを知らしめるのだ。そのためには……何としてもウクライナを手中に収めるのだ」

脇に立っているラカイテル（茶坊主）……カイテル元帥はヒトラーと同じく上機嫌であった。

しかし、ドイツ海軍総司令官カール・デーニッツには不安があった。それは制海権の確保である。いくら空母艦載機による海上制空権を確保したところで、肝心の制海権がなければ本末転倒である。

フィヨルドに身を潜めていたティルピッツもスウェーデンに潜んでいたイギリス人サボタージュにより艦底に爆薬を仕掛けられ、大破沈没してしまった。

つまり事実上ドイツは戦艦を持っていないのである。

地下Uボート工場を拡張し、何とか大型艦の建造に踏み出すことが出来たが、せいぜい基準排水量3万t以下の艦艇しか作れない。更に空母のエスコート艦となると、脆弱な飛行甲板を持つ空母の代わりに敵の攻撃を吸収する強力な装甲を持った戦艦が必要なのである。巡洋艦などで護衛をしようものなら装甲が薄く、格好の標的になるだけである。そのためビスマルクに並ぶ高い抗堪性を持った戦艦が就役するまで空母は出せないということである。

コルヴィーノとしても対アメリカ戦において重要な役割を持つドイツ空母をむやみに失いたくはなかった。これから始まるオペレーシ

ヨン＝ゼーレーヴェに於いて海上兵力の一翼を担うドイツ海軍の空母は空母を持たないイタリア海軍にとっては最重要保全艦となるのだ。

前哨戦の本土爆撃を行う際、優秀なレーダーを持つイギリス相手に爆撃地域からほど遠いドーバー海峡で迎撃に遭えば航続距離の短さが特徴のヨーロップ軍機にとっては大きく不利となる。

これではバトル・オブ・ブリテンの轍を踏むことになる。

そのためには一刻も早い戦艦の就役と新型ディーゼルエンジン搭載、高速Uボートによる海上封鎖（攻撃隊が出払っている間に戦艦の攻撃を受けるのを避けるため）とAIP化Uボートによる沿岸哨戒が必要になる。

Uボートについては既に各30隻が就役した。

ところでイタリアはどうなっているのかと言うとムッソリーニがふたたび政権を握ったがあまり支持率は高くなかった。

しかし、相変わらず爽やかな演説は聴衆にとって聞きづらいものではなく、パルチザンの抹殺により徐々に支持率は伸びてきた。

しかし、国民の大半は依然ともう戦争はこりこりという状態であった。

「どうやら、あまり状況は良くないようですね」

コルヴィーノが仮の首相執務室に入って来た。

元々あった国会にかかわる建築物は大半が破壊され、現在は沿岸地域のレジョ・ディ・カラブリアに首都を置き、ヴィットリオ・エマヌエーレ？世の承認得て再建した国会は一院制、立憲君主制を採用した。

「その通りだ。一度は国民を裏切った身だ。しかし信用することは良いことだが信用しないことはもっと良いことだ」

「そうですね、こうなることは予想していました。信用を回復することは難しい……」

深刻そうな顔をするムッソリーニに対してコルヴィーノはそれ程ではなかった。

景気が回復すれば大半の国民なら国家を信用する。

民衆とはそういうものだ。自分が最も幸せになる方法を模索し、そしてその根源をたどりそれを信用・崇拜するものである。

「ところで閣下。ドイツのイギリス上陸作戦についてですが、イタリア軍としては空軍のみの支援としたいと思います」

「そうか、それでいい。戦闘は最小限に抑えたい」

「では、ダツソー・フィアットDF-1Bネロ・アラウッチエツ口の純戦闘機型を120機、ドイツ空軍ハーグ基地に送りたいと思います」

「分かった、それでは頼む」

そう言われるとコルヴィーノは執務室をあとにした。

実は、ヴェニト・ムッソリーニ級戦略原子力潜水艦とともに連れてきた輸送船23隻には計188機の最新鋭戦闘機SIAI製S・G-31Ventoと19機の戦略情報収集機S・V-29Abbitudine、23機の戦闘攻撃機PAI製P・B-32Apeが搭載している。

特にS・G-31とS・V-29は高度な光学迷彩を備えており不可視と言つわけではないが、凝視することで目の疲労の蓄積を促し見づらくしている。

一方で単純な格闘戦でも戦えるよう、高機動支援戦闘機F-5A美雷と並ぶ戦闘能力を有する。

これを繰り出せばイギリス上陸など簡単であるがそれが出来ないのは同盟国ドイツとの駆け引きであるからだ。

主な基地はドイツにあるため容易に未来の技術を渡すわけにはいかないからである。

第40話 ヴィルヘルム?世(後書き)

最近、説明文調に逆戻りしてきた気がします
ご意見感想お待ちしております

第41章 エンジントラブル(前書き)

めっちゃ短いです
すみません

第41章 エンジントラブル

火龍は正式に海軍への就役が決まった。当初陸軍で運用予定だったものも、空軍の戦闘機として支那方面へと回された。

ところで、史実では陸軍の反対で空軍の設立が見送られたという話がちらほら上がっているが、それについてはいくつかおかしな点が見られる

第一に空軍と言うのは一般に戦闘機でも陸上戦闘機に部類されるものを保有している。実戦での内容は陸軍航空隊に等しい。

これが反対の主な理由である

しかし、海軍に近い組織の設立に反対と言っても作られるのは海軍の局地戦闘機と陸軍の爆撃機含む全機。

設立当初は陸軍の人間が多数引き抜かれるはずである。つまり陸軍に近い組織が作られるのだ。

にもかかわらず空軍の反対が多かったために、この大日本帝國の空軍が所有する戦闘機の大半は美雷である。

海軍では五式艦上戦闘機通称『旭光』と呼ばれるようになった。

しかし、小型空母からは発艦出来ないために、震電も艦載機型が製造された。

こちらは六式艦上戦闘機『海燕』とよばれ、良好な発艦能力が認められた。

これによって、機動部隊では小型空母の海燕による上空直掩と、旭光による攻撃隊護衛という形が完成した。

兵庫県淡路市

ここには、巨大な工場があり爆撃機も飛び立てる巨大な滑走路がある。滑走路と並んで格納庫には試作噴式震電が3機。

テストパイロットは現役陸軍パイロットが1名プラス神谷中尉、となっていた。

当初神谷中尉は教導飛行隊のパイロットだったが、実際に来てみると特に問題はなく、福井少尉のみが一応教官と言う形で当初予定していた基地に残った。

神谷中尉は予定通り、一〇〇〇（ヒトマル・マルマル）に出撃シーケンスに入った。

とはいうものの、海軍試製六式艦上戦闘機『せんよう戦鷹』のテスト飛行なので燃料が給油されるだけである。

「E-1。発進する」

神谷は無線機にそう吹き込み、一気に右手のスロットルを押しこむ。美雷と違い操縦桿は中央にあり、両手でしっかりと握った。

作中で度々パイロットが口にするT-1やE-1について説明しておく、

E-?? (??には数字が入る) : 試作??番機 Experiment-??

T-?? : 機動戦艦帝鳳??番機 Teihou-??

S-?? : 機動戦艦神龍??番機 Shinyu-??

H-?? : 機動戦艦鳳雷??番機 Horai-??

ちなみに機動艦隊に属さない部隊はこのような呼称はない。

E-1 戦鷹は名前の通りF-16ファイティング・ファルコン（戦うハヤブサという意味）に近い外見をしており、単座または複座機で単発となっている。

F-16との大きな相違点はやはり機体下部に存在する固定式エア・イン・テイクで、丸型ではなく逆等脚台形で機体から張り出した形となっている。

話を戻そう。

神谷は戦鷹試作一号機を駆って、指定のマニューバを行う。

ループに始まり

エルロン・ロール：Aileron Roll

シャンドル：Chandelle

スライスバック：Slice Back

シザース

バレルロール

・・・etc

全てを難なくこなし、神谷はフウと一息ついて、今回の機動で機体にかかったGやエンジンへの燃料供給量を記録する。

「テスト終了。機体に問題なし。これより帰投する」

>了解<

早期警戒機（AWACS）からの返答が返って来た。

事前のフライトエリアに従って、飛行する。まだこの機にはオートマニューバシステムはおるか、オートパイロットシステムすら搭載されてはいない。

気を抜けない。

「っ!? 燃料供給システムに異常発生。エンジンの燃焼温度が上昇している」

「こちらC-2。E-1に異常発生、転送しろ」

「了解」

すぐさまPCと機器をつなげ、情報をAWACSに転送。

>FROM E-1<

C-1のメインディスプレイに情報が揭示される。すぐさまコンピュータが問題点を探し始める。

原因は未熟なアビオニクスの真空管の破損。どうやら激しい機動で損傷したようだった。

「こちらC-1。聞こえるか？」

「E-1。聞こえている」

「エンジン自体に損傷は見られない。恐らく真空管が破損しているようだ。エンジンを再始動させてみる」

「E-1。了解」

神谷はエンジンの再始動を試みる。単発機であるため、不測の事態に備えなくてはならない。

声を出して確認しながら確実にこなしていく……

「エンジン復旧。予定通り帰投する」

「Roger」

AWACSからの返答を受け、ホッとする。

予定の3分遅れ。

始末書を書く必要はなかったものの、報告書を提出せねばならなかった。

第41章 エンジントラブル(後書き)

意見・感想お待ちしております

第42章 神谷零中尉

「講和……ですか？」

「ああ、そうだ。もっとも一時的なものだがな」

ローズヴェルトはニヤリと口元をかすかに持ち上げた。

「日本と講和を結んで、その間にドイツを潰す。ドイツと戦っていれば戦力増強の言い訳になるしな」

キングは大統領の言葉を信じるができなかった。

ローズヴェルトの思惑を簡単に説明すると、

- 1 日本と講和
- 2 ドイツ戦を口実に艦隊の増強
- 3 ドイツを潰す
- 4 再び太平洋に

と、言うわけだ。

「分かりました、しかし次の戦いで負ければと言うことでよろしいでしょうか？」

「ああ、構わない。そちらの方がこちらとしても都合がいい」

「はあ。しかし、講和となりますとニホンとしても望んでいない幸運なのではないでしょうか」

キングはどうしても講和をとりたくなかった。相手を騙してまで勝

たなければならぬ戦争なのだろうか。何より合衆国が東洋の島国ごときに講和をするなど、合衆国の恥である。

「まあ、考えても見たまえ。我が合衆国海軍は、今やフネをイギリスから借りねばならない事態に陥っている。一応レインボウ・ノアがいるが、それでも日本に勝てる確証がないというのが今の状態だ」

とはいうものの、史実最盛期の大海洋艦隊に劣らない強力な艦隊を保有しながら英国艦隊をレンタルする必要などあるのだろうかとキングは考えている。

レインボウ・ノアも約200機に及ぶ航空機を格納庫に収めているし、モンタナ級ABSもアイオワとは比較ならないほど強力な戦艦と言えよう。

レーダーも優秀な英国製ときたらこの艦隊に勝てる国などいるのか、とまで考えてしまう。

第二世代戦闘機と位置付けられた空軍汎用機のエンジントラブル原因はやはり、真空管の破損によるエンジンへの燃料供給量の増加によるものであった。

すぐさま対応策が取られ、真空管式コンピュータからトランジスタへの移行が急がれた。

既に新しい技術者にはICおよびLSIの基本構造を理解すべく、教育途中である。

「とんだ災難だったな」

「全くだ。試作機とは言ってもこんな粗悪品に乗らされるなんて」

「まあそう言うな。ここは独立日本合衆国じゃないんだ。技術実験都市にいたお前にとっちゃ暮らし辛いだろ」

真鍋少尉と話しながら全くだと思う。技術大将であった父が技術実験都市と呼ばれる現・埼玉県北西部に存在した、多量の技術開発チームが行われた都市で他の都市より数年の技術進歩があった便利な所に生まれた。

「こんなことはなかった。聞いたところによると、小さい子供が多量に人体実験に使い捨てる駒として使われたらしい」

「まあそんな物騒な噂もあったな……」

「ああ」

そう言つて神谷は机にへたれ込み、未来であった、かすかな記憶を思い出す。

「神谷大将！被検体が足りないんです。決断してください」

「いや！そんなことはできない」

神谷大将・・・神谷零の父は努力に努力を重ね今の地位まで上り詰めた。幼い零にとっては、いけすかない父親であり、目の敵にしていた。

しかし、子供の被検体が度重なる実験の失敗で不足した際に、自らの子供を使おうとしたチームに真っ向から対立した。人道に反するとして表面上は丸く収まった。

いままで、零をほったらかしにして研究を重ねてきた。そんな父親が最後に自分の前で発した言葉。

「俺の子供だ。そんなことに断じて零を使わせたりしない」

その決断が仇となり、零の母親で神谷大将の妻が実験に使われた。母親は「貴方のためですから」と言って自ら実験台となり、無残な死を遂げた。

最期は人の形をしておらず、生ゴミとして国に処理された。死亡診断の紙がなかったため、葬送すら出来なかった。

いつの間にか真鍋少尉は席を外しており、神谷自身も眠ってしまっていた。

「なんでいまさらあんな夢……」

紫色に変色した肌。どす黒く床にこびりついて固まった血。死体の腐敗した悪臭と消毒液の匂いが混じった吐き気がする臭いの充満した部屋。

今思い出しても嫌になる。

その後、父親は零を自身の親戚がいる神戸市に送った。

それが父の記憶の最後。泣き崩れる父親を見て、自分が変われたらと思った。

他にも父親の計らいによって、飛び級制度が採用されていないなか、14歳で高校に入学しその頃に軍に入った。父のその後と、実験内容を知り軍内部の不穏な動きを知るため……

そして、そんな中今井大尉と山城中尉に会った。

とは言っても、徴集兵ではなく正規兵になるうとして候補生だったところで、ちょうど空襲に遭った候補生学校の防衛を任された帝鳳飛行戦隊の前身である第231飛行隊の5番機・6番機隊員の2人であつたのだが。

神谷はそこで戦う2人の姿を見て戦闘機パイロット乗り^{パイロット}に志願した。入った部隊は独立航空部隊第3戦隊Freedom Air Force（略称FAF）。空陸海3軍に所属せず、要員不足の部隊が出来た場合そこに補充されるエースパイロット級が揃った最強の戦闘部隊である。

ここに配備された戦闘機はF-5Aに代表される純国産戦闘機ではなく、ロシア・中国・フランス・イスラエル・日本の5カ国共同開発された第六世代戦闘機、Su-59Jフラットパックである。

F-117同様直線と平面のみで構成された奇妙な外観である機で、格闘性能より長距離攻撃に向いている大型戦闘機である。

「起きたか」

再び真鍋少尉が戻って来た。

「悪い。どのくらい寝てた？」

「30分ってとこかな。まあ、嫌な記憶だつたら。俺だつたら自殺するだろうな」

真鍋はハハッと笑いながら言う。神谷にとって冗談ではなかった。

事実、親戚の家で首を縛つたのだ。死への恐怖から自ら諦めたのだ。が。

少なくとも中学を出るまでまともな精神じゃいらなかった。
中学を出ると公立高校に年齢を詐称して（個人データが父親の手に
よって改ざんされていただけであるが）入学し、夜は4時間の軍学
校に通い始めた時に福井少尉と真鍋少尉に会ったのである。

第42章 神谷零中尉（後書き）

続きも神谷中尉の過去です

ご意見ご感想お待ちしております

第43章 未来の防空戦

「ここが・・・候補生学校・・・」

神谷はポツリとつぶやき、5階建てのビルに入っていく。新設校と言っただけあって清潔感がある。

「えっと、3階か」

事前に配布されていた書類を確認して入ろうとした途端、ドンっと誰かと衝突した。

「わ、悪イ」

神谷はぶつかって来た少年を見た。

「何か目付きやべえよコイツ。早く行こうぜカズ」

後ろにいた少年がヒソヒソと耳打ちする。言うまでもなくこの2人こそ現在の真鍋和人少尉と福井一貴少尉である。

何故福井がこのようなことを言ったのかと言うと、神谷の眼が二人を睨んでいたからだ。

「・・・あ、ああ」

真鍋は神谷を一瞥し、階段を上って行った。

その先には、候補生の入校テストの結果と共に座席表が貼られていた。

神谷はすぐにそれを見つけてることが出来た。

計10教科、1000点満点中943点。2 / 354位。

6クラス編成。座席は50音順となっており、前から3列目。ちょうどいい席だ。

「あつ、さつきの……」

真鍋がこちらに気づき、声をかけてきた。

「誰だ」

「俺は真鍋和人。よろしく」

「そうか……」

「そうか……じゃないだろ。お前の名前は何だよ」

「神谷……神谷零」

ゴクツ真鍋は唾を呑んだ。入校テストの平均点は合格者平均ですら654点。合格ラインが630点。全体の平均はたったの580点といったところだ。

全受験者約2400人のうち合格者も354人と言う狭き門の中で2番目。

目の前にそれほどの人間がいるのだ。

まだ高校生と同じ年齢でありながら、一浪してまでも入ろうとする者もいる。大抵そのような者は滑るのだが。

「まさか……テスト2位の……」

早とちりではないかと咽から声を絞り出して問う。

「ああ、そうだけど」

「(マジかよ。どんだけ頭良いんだよ)」

「で・・・何か用？」

「あつ・・・いや、何でもない。さっきはゴメン」

「別に気にしてない」

神谷の愛想のない態度にいらつく様子もなく真鍋は去っていった。真鍋の成績は1000点満点中762点。83/354位。そこそこ上位と言ったところか。

数日後。ボゴツと音を立て真鍋の顔面に拳がめり込む。喧嘩が起ったのであった。原因は真鍋がカバンが当たったにもかかわらず、謝らなかつたからだそうだ。相手はいかにもと言う感じの不良。どうやら真鍋に勝ち目はなさそうだ。

神谷はそれを見て、野次馬の間を通過して2人の間に入り仲裁でもするのかと思つたがそれをスルーし、教室に向かった。

「おい、テメエー!!」

不良のデブが神谷の肩をつかんだ。しかし埃を払うように手を払って、そのまま教室に入ろうとした。それにキレたデブが神谷に殴りかかった。

後ろからの攻撃であるにもかかわらず、神谷は難なくかわし、そのまま脚を高く上げ、不良の側頭部に一撃をくらわせる。不良は一発でのされた。

「ま、待ってくれよ神谷」

声をかけられ神谷は振り返る。

「助けてくれてありがとう」

「別にお前を助けたわけじゃない。俺が個人的に売られた喧嘩だ」

その一件以来、真鍋は神谷と一緒にいるようになった。

福井と一緒にいるようになったのも、真鍋と仲が良かったからである。

そのおかげで、神谷も少しずつ口数が増え今はコミュニケーションに問題はない。

そして、空軍に入ることを決意する日が来る。

候補生学校2年目の秋。B-4の大編隊が来襲したのだ。数は実に400機を数え、米軍最大の無差別爆撃となった。

中距離弾道ミサイルの全面保有禁止から一気に進化した爆撃機。速度は音速を超えるのが当然。護衛する戦闘機も多数となると。日本の約3分の1の戦闘機が迎撃に舞い上がった。

「第231飛行隊。全機Hot scramble!!」

管制官の指示に従い次々と迎撃に舞い上がっていく。

「イーグル隊、ドラゴン隊、ディアナ隊、グリフォン隊。全機各隊隊長の指示に従え」

元神戸空港、神戸空軍基地に所属する231飛行隊のグリフォン隊に所属する今井らは神戸空港直上の待機であった。

B-4の大編隊は次々と防衛線を突破。皮を脱ぐように護衛機を各迎撃部隊の攻撃に振り分け、爆撃ポイントに向かう。同時にマスターアームスイッチをON。攻撃準備は整った。

「Target insite。Engage」

「ヴァイパーEngage」

「シャドウEngage」

「フェアリーEngage」

「フェイトEngage」

次々に交戦を宣言する。

ちなみにヴァイパーは今井のTACネーム。シャドウは山城。

「悠長にドッグファイトなんかするなよ。最優先攻撃目標は爆撃機だ。戦闘機に絡まれたらHAMで片付けろ」

「「Roger!!!」」

HAMとは高速空対空ミサイルHigh speed Air t
o a i r M i s s i l eの略である。

「FOX1!!」

>RDY AAM-2<

ディスプレイに表示され、翼端パイロンから2基の中距離空対空ミ
サイルが発射される。

「イーグル隊、ディアナ隊が戦闘機は引き受ける。グリフォン、ド
ラゴン各隊は爆撃機を頼む」

イーグル隊リーダーからの要請だ。

「Rogge」

「FOX2!!」

>RDY AAM-4<

再び今井はミサイルの発射準備をする。

「シャドウ!!」

「了解!!」

最小限の単語で意思疎通を行い、1機のB-4に狙いを定める。

当然B - 4の対空火器、艦艇用のバルカンファンクスが吠える。

「Right Break!!」

右に急旋回。うまく目標のB - 4にMFCSのマーカを合わせる。同時に近距離空対空ミサイルのシーカーも目標に合わせる。

> FIRE <

今度は翼下に吊るしたミサイルが発射される。

「シャドウ、後ろだ」

「分かってる。援護頼む」

「FOX2」

> RDY HAM <

今度は胴体下ウェポンベイからHAMが発射されていく。ウェポンベイは吐き出すように3基のHAMを落とし。機体下50cmくらいからミサイルはエンジンに点火。一気に加速し最高速度のマッハ6・9で敵機に向かう。

候補生学校のシエルターにおかれたモニターでその様子を観察していた候補生たちは釘づけになった。

神谷もその2機の息の合った戦闘に魅かれた。

第43章 未来の防空戦（後書き）

次回から後書きで艦魂たちを登場させようと思います。

とは言っても、艦魂会の先生がたのような盛大なモノではありません。
ん。

ご意見ご感想お願いします。

第44章 ASROCと美雷

1月16日

聯合艦隊は太平洋の要衝、ミッドウェイに向けて主力艦隊をほぼすべて投入した。

ミッドウェイを獲ることで米軍の太平洋での活動を制限することができる。

「はあ、もう少し内地でゆっくりしておけばよかった……」

「とはいってもあなた、殆ど寝てたじゃない」

玲が今井のお菓子を食べながら言う。

「あのなあ、誰のせいで疲れてると思ってるんだ？」

「さあ？年じゃないの？大体あなたイライラしすぎなのよ。更年期障害？」

「お前のせいだろ。何かと邪魔しやがって……」

「だって涼介かまってくんないだもん」

「涼介？誰？彼氏？」

「艦魂に彼氏なんかいるわけないでしょ。楯岡涼介。機動艦隊司令長官よ」

「へえ。あの人涼介って名前だったのか」

今井はへ〜言いながら冷蔵庫の中から水を取り出す。

そして、パソコンを起動させる。普段持ち歩いているノート型PCだと容量が少ないため、サイパンの技術開発部から拝借してきたデスクトップ型である。

USBメモリを差し込みデータを閲覧する。

これは沖田技術中将がまとめたもので機載型の電磁砲レールガンの情報である。2113年当時、小口径砲（5インチ砲まで）の大半がレールガンである。

特にガトリング砲に代表される速射性能の優れた砲は薬莖が多く必要なため、その無駄を減らすためにレールガンを採用している。機動戦艦に搭載されている20mmガトリング砲も同じである。

「何それ？」

いつもの如く玲が首を伸ばして画面を覗く。

「50mmレールガンです。艦載機用の・・・」

「へえ〜。大丈夫なの？」

玲が聞いているのはレールガンの発する電磁波のことである。レールガンは発射時にプラズマを出すため、電子機器に悪影響を与える。

「大丈夫です。美雷のコンピュータには電子防壁が施されていますから」

「全く分かんない」

「つまり、レールガンが発射するときに出る電磁波がECMと考え
ると、ECMで打ち消すことができるってことです。普通の電子
戦ならそこで相手はECMで対抗してきますが、それはないん
でコンピュータ自体にそれほど負荷も掛かりませんし」

「ふん。で、あなたがその開発を担当しているってこと」

「いえ、ただ沖田が忙しいから俺に押しつけて来たっただけです。
けど、電力消費が大きいんでその分の電力を賄うのに苦労してるん
です。ところで今何時ですか？」

外はもう暗い。アリューシャンに向かって北上しているため、冬は
ほぼ一日中真っ暗である。

「まだ2000（フタマルマルマル）だけど」

玲が時計を見て伝える。艦内の時計は全て日本標準時に合わせてい
る。たとえば外が夜であっても、正午になれば昼食を摂るし、0時ご
ろには大抵の者が寝る。

このように時差を無視しているのは、わざわざ時刻を合わせること
で体調が悪くなることを防ぐためである。ほとんどの時間を艦内で
過ごしていると、時間感覚が薄れるので、それを防ぐこともできる。
海上自衛隊が毎週金曜にカレーを食べるのと同じだ。

それを聞くと今井はPCの電源を切り、部屋を出て行った。

「失礼します」

「あつ、センパイ。何ですかね、呼び出しって」

「しらねえ。けど、美雷が8機もアイドル状態だ」

「ってことは……」

「ああ、特務……音速雷撃」

音速雷撃はその名の通り、超音速機による雷撃である。海面すれすれを一気に突破し、アスロックミサイルを発射する。大型のミサイルであるアスロックは美雷でさえ、2基しか積めない。さらに米英連合艦隊を叩くために、レーダーを完全に沈黙させるべく電子戦兵装もする。全艦艇及びハワイ島に設置されたレーダーも沈黙させる。そのためにはより優秀なコンピュータを搭載したA-3極星に電子戦兵装をする。

「今井、山城。こっちだ」

「千早准将。この呼び出しって特務ですよ。米軍相手にあれはやり過ぎなんじゃ」

2人をつんだ千早准将に山城が話を切り出す。

「もう、作戦内容に気がついてたのか……確かに音速雷撃は米軍相手にやるにはオーバーかもしれない。が、しかしだ、こちらはまだレシプロ機がいる以上敵の数を減らすことに意義はある」

「ああ、その通りだ。山城、戦争にやり過ぎなんてない。勝てばいいんだ。たとえば核を使ってもな」と今井。「だが、8機も作戦に使用するってのはレインボウ・ノアとかいう化け物空母は厄介なんだ

な」

「もちろんだ。艦載機の数だけで言えば信濃より多い。それに、大きさも初の原子力空母エンタープライズよりも大きい」

「流石アメリカっスね。なんでもデカイ」

「だが、デカイと強いはベツモンだ。所詮は古い設計の空母だ。アメリカのことだし開放式だろ」

「いや、それはどうも違うようだ。レインボウ・ノアはエンクロード・バウ。装甲空母だ」

「まったく厄介なこつた」

「でも、准将。ガソリタンクは大鳳と変わんないっスよね？」

大鳳と変わらない。それは史実を知る日本人にとって、相手のウィークポイントである。気化したガソリンと、昇降機の故障。それだけで装甲空母は自ら爆沈する。

「だが美雷にASROCが2基しか積めないことに変わりはない。それに目標のフネに当てることは簡単だが、当たり所までは正確に誘導できない。LOALだとこれだけ誤差も大きくなる。撃ちっ放しだとなおさらだからな」

「どこまで近づけるかってことっスか」

「いや、最終誘導はA-3がやってくれる。それより、パールハーバーにいない分ロスにいる奴らが逃げるかどうかだな」

「逃げられたら、次はこつちが守勢に回るってことだ。まあ、それより大和田で奇妙な暗号を傍受したらしい」

「それがどうかしたのか？わざわざそれを千早さんに伝えられたってコトは」

「ああ、米軍はいや、アメリカは日本との停戦を望んでいる。講和でなく、停戦だ」

「ドイツとの戦いに専念したいってコトっすね」

「そういうことだ」

「それはこつちに有利に働くのにな」

「恐らく、俺たちもそれに参加することになるぞ」

「それはないだろう。表向きは同盟関係にあるし……。そうか！あの潜水艦」

「気付いたか。これはイギリス・ソ連・アメリカの対処できる相手じゃない。代わりに俺達を利用して、その後また弱り切ったところに攻撃を仕掛けてくるつもりだろう。しかし、俺達がそれに乗らな
いってことは考えなかったのか、それとも隠し札シヨーカーがあるのか」

第44章 ASROCと美雷（後書き）

どうもアマネです

自分の書くものに幅を持たせたいと始めました

勿論どーでもいいので読まないでもいいですよ

正確にはおもないので読まなくてもいいですよ

では初めのゲストは今井中佐と帝鳳の艦魂、玲さん、沖田中将
です

アマネ「はあ、もう一年たつのに40話しか行ってないんですね」

今井「途中面倒で削除しようとしただろ」

沖田「馬鹿ね、私の出番少ないし」

玲「私なんて10話近く空気だったし」

アマネ「その点はお詫びします。何せ忙しかったもんで」

今井「嘘つけいおん毎日見てたくせに。次はとある科学の超電
磁砲、禁書目録、WORKING!、iDOLM@STER X
ENGLASSIAって何個見てんだよ。これじゃあアニヲタっ
て呼ばれても仕方ないだろ」

アマネ「黙れ厨二の分際で調子のんな」

沖田「アマネだってまだ中3でしょ。私たち18なんだけど」

玲「私はまだ14歳。艦齡は5歳よ」

アマネ「ガキは黙ってる。てか厨二と中3比べんな。アニヲタじゃねーし」

今井「だったらなんだよ」

アマネ「強いて言うならアニメマニアだな。ヲタとマニアの境界線は2次元に恋愛感情を抱くか否かだ!!」

今井「確かにお前は初音ミクは俺の嫁。とかはいわねえけど」

沖田「たいして変わんないでしょ」

玲「オタク……」

アマネ「玲さんオタクじゃないですよ。俺は。ツンデレには興味ないし、クーデレ、ヤンデレも同じだ」

今井「何かお前ボコデレとか言うのに興味持ってたよな。Mか？」

アマネ「それはない。だってこの前笑顔で殴んな!!って言われたし」

沖田「それは病気ね」

玲「最っ低」

アマネ「ヒドっ。もう最初から書き直して神谷君を主人公にしてやる!」

今井 「主人公まだはつきり決まってないしな。と言うか、もともと神谷が主人公じゃなかったのか？」

アマネ 「えっ？なんで？」

玲 「神谷中尉だけ2話にわたって説明したじゃん」

アマネ 「確かにそうかもしんないけど主人公は今井だよ」

沖田 「なんでこんなナルシストキャラにしたのか分かんないけどね」

アマネ 「ナルシと言うより厨二だけどなww」

沖田 「大差ないわよ。結局本質は変わらないんだし」

玲 「私を空気にするな！！というより本編の内容も交えるんじゃないかったの？」

アマネ 「ああつ、忘れてた。さすが玲さん。一応ヒロインだから役に立つ」

玲 「一応って何よ」

アマネ 「いやあヒロインだから才色兼備は必須だと思ったけど、玲さんの魅力は俺の文章力では表現できなくて」

今井 「（あ、適当に丸めこんだ）」

玲 「まあ、そういうことなら仕方ないから許すけど」

アマネ「ガキは扱いやすい」

玲 「他の先生たち見習いなさいよ」

沖田・今井「（作者が壊れた・・・ツンデレを要素に加えやがった）」

アマネ「（ミスった。まあいつか）」

アマネ「ところで本編の内容ですが、欧州戦線はあまり詳しくないので2カ月に一回ほどしか更新できません」

今井 「てか、読者の意見を取り入れたな」

アマネ「そうです。確かに基礎工業力の低さは薄々感じてたからね」

沖田 「ホント、やりにく言っちゃありやしないわよ。パソコンが使えないなんて」

アマネ「そりゃ仕方ないですよ。ようやく真空管からトランジスタに移ったんですから」

玲 「で、これっていつまで話すの？」

アマネ「結構話しちゃいましたから、ASROCの話を最後に入れますか」

今井 「ASROCを戦闘機につむってどうかしてるな」

沖田 「100年後だからね。何したって問題ないわよ。それにしては現実的すぎる分もあるけどね」

アマネ 「草薙先生のようにアイギスなどを使うと後後面倒だし。それに他にも問題があるからね。描写に困るんだよ。未知の兵器なんて使うとき」

今井 「それもそうかもな。核パルスエンジンのままだったらブースターなんて無理だしな」

アマネ 「でも、核融合炉は美雷に発電機としてついてますよ。コンピュータの電力供給のためにね」

玲 「結局話が反れたわね。次回からは私と希たちが主役になるから」

アマネ 「玲さん、ホントすいませんね結局空気になっちゃって」

玲 「後でどうなるか分かってるわよね（不敵な笑みでアマネを睨む）」

アマネ 「エビ反りの刑は勘弁してください」

玲 「他の先生みたいに46cm砲の斉射とかはないんだ」

アマネ 「玲さんをそんな野蛮なキャラにしたくないんで」

玲 「あつそ」

こんな感じでグダグダやっていきます

玲さんも子供なんで丸めこむの簡単ですから
それじゃあご意見感想お待ちしております

玲 「へっ」

第45章 音速雷撃（前書き）

音速雷撃はザ・コックピット音速雷撃隊の桜花をヒントにしています。ASROCは正確にはAnti Submarine Rocketの略つまり対潜ロケットですが、ロケット兵器であるならば飛行機に乗せてみようと思いました。

第45章 音速雷撃

「グリフィン隊・ドラゴン隊。発艦許可を請う」

「こちら、CIC。発艦を許可する」

「T-1了解。今井了解」

機動戦艦の甲板を、ヘッドギアを付けた搭乗員が駆け回る。

今井の乗る美雷に駆け寄り、2基のASROCとAAM-4のセイフティ・ピンを外す。

「Good Luck」

キャノピーを開いた状態の今井に、セイフティ・ピンを外した搭乗員が口角をあげて言った。

「ありがとう」

今井はそう言ってキャノピーを下ろし、カタパルトに美雷を載せる。

>TAKE OFF<

ディスプレイに表示されるのを見るや否や、スロットルをアフターバーナーゾーンへと一気に押し込み、カタパルトもキイイイインと甲高い金属音を出してプラズマと共に美雷を空へと弾き出した。

「こちらT-1。これより作戦コードCODE450116103
0を開始する」

>CODE::4501161030<

今井はキーボードを使い中枢コンピュータに作戦の確認を行う。
4501161030とは1945年の下2桁の45。日付の1月
16日。日本標準時刻10時30分を示している。
作戦の確認は、美雷など、作戦機1機1機に搭載された中枢コンピ
ュータとダイレクトリンクしているCICのメインコンピュータが
あらかじめ登録された作戦をファイルから呼び出し、各機の中枢コ
ンピュータに転送する。

>I have controle<

美雷がオートパイロットの機動の催促をする。今井は口頭で

「You have controle」

というと、美雷に搭載された言語認識システムが作動し、すぐさま
オートパイロットに切り替わる。

一度、すべてのシステムに異常がないかも確認し、僚機との通信に
問題がないかも調べる。

全ての電気系統に異常がないことを確認すると、座席をリクライニ
ングさせ体を休める。一応出撃前に仮眠をとつてあるので眠くはな
らなかつた。

「A-3の電子妨害装置シヤリンクが作動する。ECCM起動」

「ECCM。起動する」

「ASROC射程圏内まであと20km」

A-3の電子妨害が作動し、一瞬だけ画面が真っ白になる。すぐに

対・電子妨害により、通常通りレーダーが働くようになった。

美雷の強力なレーダーは200km先のオアフ島ダイアモンドヘッドを捕えていた。極短波によるGPS誘導により全機、オートパイロットで進路を変更する。

「ASROC射程内に入ったが、万全を期すため更に接近する」

「了解」

全ての美雷はそのままASROCを発射せずにパールハーバーへと接近する。もちろん米軍はレーダーが働かないために美雷の存在を把握できていない。

しかし、勘のいい海軍士官が偵察機を出そうと進言したために、計20機の雷撃機（TBF/TBM アヴェンジャー）が偵察任務に駆り出された。

遠方にレーダーに映る1機の航空機を発見した美雷はASROCを放つことにして、マスターアームスイッチをオン。マルチファンクションディスプレイに

>RDY ASM<

と表示される。

>FIRE<

とキューが出るや否や、翼下パイロンからそれぞれ2基の大型ミサイルがエンジンに点火するのが目に入った。

計16基のミサイルは白い尾を引いて低空での飛行を開始する。

今井らはディスプレイに表示されるミサイルの軌跡と目標とを確認し、補正情報を送る。

LOALであるため艦船相手にASROCを外すことなどあり得ない。さらにASROCの弾頭となる魚雷自体が音響ホーミングであるために自動で敵艦船を追跡する。

美雷のパイロットは着水を確認すると機体を大きくバンクさせる。右翼にいた1機の美雷がエンゲージと宣言する。

アヴェンジャーのパイロットは美雷を視認したと思えば、その美雷のガトリング砲弾にズタズタにされて墜落した。

「任務完了。目標、戦艦2、大型空母2、正規空母3に命中。これより帰投する」

隊長機の今井が帝鳳CICに無線を入れる。

同時に帝鳳CICの巨大なスクリーンにある六角形のうち、8つが任務完了の文字で埋まる。美雷の帰投コースが点線で表示され、美雷の現在位置を示す青い三角形がそれに従って画面上を移動する。

今井は再びオートパイロットを作動させ、しばしの休息をとる。

12時40分過ぎ、美雷が帝鳳を視認し、一度通り越し着艦態勢に入る。もちろん自動で着艦も行えるがあえてマニュアルモードでアプローチに入る。

綺麗に後輪から飛行甲板に機体を降ろす。次々に後ろからアプローチ、ランディング、その後指示に従ってエレベータの上に固定。格納庫へと機体を送る。

「山城、次のローテには入ってなかったよな」

「はい、センパイ。飛龍攻撃隊が第一次攻撃隊、蒼龍攻撃隊が第二

次攻撃隊。上空直掩が神龍第2航空部隊、鳳雷航空部隊。だったと思えますよ」

「そうか。悪いな」

更衣室でシャワーだけ浴びて、通常の軍服に着替える。とは言っても上着は着ずにカッターシャツである。

「今井お帰り」

「・・・なんだその格好」

今井が聞いたのは、エプロンを着てメレンゲらしい泡の付いた泡立て器を持った玲が立っていたからだ。

「え、これはアンタみたいにお菓子作れたらと思って・・・けど・・・」

「スポンジがうまく膨らまなかったと」

今井はテーブルの上に乗ったしぼんだスポンジケーキを見て言った。

「で、もっかい作りなおしていると」

「うん・・・」

「ああ、これ見てやってたのか。これの分量おかしいから出来るわけないですよ。横に書いてるでしょ。そっちの分量じゃないと出来ませんよ。俺もこの通りにやって失敗しましたから。あと上白糖より三温糖のほろが口どくなくて美味しいですよ」

と云って、玲の持っている泡立て器を手にとってメレンゲを混ぜ始める。

第45章 音速雷撃（後書き）

どうも、原爆記念日すぎてしまいました
非核3原則の法律化なんてしたら抑止力も糞もないよ

今井「全くだ。F-XもF-15の改良とF-2の増産で手を打つ
たらしいな」

「がっかりだね。F-3の開発にもっと力入れろや

今井「それにしてもお前たちの日本は情けないな」

独立日本合衆国は優秀な指導者がいたからね。

今井「で、なんで俺に家庭的なキャラを求める。ギャルゲでもやってんのか」

やるわけないじゃないすか。2次元にも3次元にもそんなもの求めてませんし

それにしても、ただアニメ好きってだけでけいおん厨と言われるのは気に食わんな。純粋にアニメを楽しんでいるだけなのだが

今井「その年になってまだアニメなんか見るからだろ」

失礼なナル とか見るよりましだ。

今井「それで、いつになったら日米決戦が始まるんだ？」

そうですね、2話ほど先でしょうが

今井「サラッとネタバレしそうになっただな」

大丈夫です。元々読者に先が読みやすい小説ですから。フェイント入れるほど頭良くないし

今井「ところでASROCを搭載した航空機なんてあるのか？」

ありませんね航空機対潜水艦なんてありませんから。しかも普通のASROCと違って重量は軽く1000kgを越えてますから。

今井「だから2基しか積めないわけだな」

はい。

話は変わりますが、ウォークマンを買ってもらいました。何これかなり便利!!!!

音楽聴きながらだと勉強も執筆もはかどります

最後に甲子園開幕しましたね
取りあえず、地元、報徳学園は一回戦を勝ち抜きました
嬉しいです

ご意見ご感想お願いします

第46章 第一次攻撃隊

今井はところどころ玲にも手伝ってもらいながら、ケーキを作っていた。

スポンジもうまく膨らみ、今は玲が一人でデコレーションをしている。

「今井。出来たのどうすればいい？」

「食わないのか」

「うん。終わってからみんなで食べようと思ってたから」

「じゃあ、取りあえず冷蔵庫に入れといて良いですよ。あと、俺も少しの間寝るんで」

「分かった」

ミッドウェイではすでに上陸作戦を敢行し、蒼龍・飛龍は艦載機と上陸部隊、そして戦艦部隊の援護射撃の三位一体となった攻撃を行っていた。

米軍司令部はとうに破壊され、各部隊の小隊長の判断に任せている。

「敵はもうほとんどいない。戦車を前に出して一気に進め！！」

上陸した帝国海軍陸戦隊はドイツ軍の電撃戦顔負けの快進撃を続けていた。

機械化が進んだ陸戦隊は、上陸から数時間でほぼミッドウェイを占領し、ゲリラ戦に移行した米軍の残敵掃討を行っていた。

1月17日

米英連合艦隊は戦艦2隻以下数隻に攻撃を受けた。

しかし、日本の機動部隊が接近している以上、ゆっくり修理する暇はない。アイオワ級A B Sは1隻が完全に戦闘行動がとれないという結果が出たが、残りの部隊で何とかするしかない。

レインボウ・ノア級2隻も健在だ。

空母も損傷を受けたのは飛行甲板だけなので、エセックス級2隻、タイコンデロガ級4隻を出撃させた。

夜明けとともに日本機動部隊は、信濃・長門から第1次攻撃隊を発艦させ、上空直掩に旭光（火龍）、小型空母からは烈風を発艦させた。

第一次攻撃隊に課せられた任務は主に敵機動部隊の中でも対空砲火の密な戦艦を狙うことだ。

多数の攻撃機が魚雷を腹に抱え編隊を組んで出撃していった。

米英連合艦隊はハワイ・パールハーバーから離れて、サンフランシスコにいた英国空母戦闘群と合流していた。

両艦隊共大部隊であり、航空機の数も両者の合計で3000機を数える。太平洋での戦いに雌雄を決しようとする互いの部隊は欺瞞航路をとらずに一直線に向かい合う形となった。

米軍は航続距離の短いグロスターミーティアのために大型の増槽を大量生産し、作戦行動半径は実に500kmと航続距離において2

00kmも伸びた。

「そろそろか・・・」

小沢は手に持った懐中時計で時間を確認する。

「進路を南西にとって第一次攻撃隊発進！」

爆弾・魚雷を抱えたJu87シュトゥーカ改が次々と発艦していく。その後ろから、艦載機型に改造した火龍が飛び立っていく。

米英連合艦隊、旗艦レッドノア

「諸君！出番だ！今まではジェット機の奴らにされてきたが、今回は我々にもミーティアがいる。レーダーの誘導に従えば、奴らなんざ畏にかかった七面鳥だ！^{ターキ}！思う存分暴れたまえ！！」

「イエツサア！！」

護衛戦闘機隊の120機の火龍と20機の美雷はシュトゥーカ改の前方に編隊を組んで敵艦隊に接近していたが、敵艦隊を機上レーダーでとらえたと同時に、敵編隊を発見。一気に美雷は増速した。ドライ状態で遷音速でミーティアを捕える。各パイロットは、マスタームスイッチをON。マルチファンクションディスプレイから兵装ステーションを呼び出し、武器を選択。

>RDY GUN<

> FIRE <

ハードポイントよりつりさげられた、2基の25mmガトリング機載型の20mmガトリングが吼える。

グロスターミーティアの数は実に240。さすがに美雷だけでは相手をし切れない。そこに旭光が追いつき、戦闘に入る。特に電子機器を搭載していない旭光は、搭乗員の腕にかかっている。

通常の15mm機関砲を4門つんだ旭光は照準器に敵機が入ると操縦桿のスイッチを押す。

曳航弾が敵機に吸い込まれるようにして命中する。

15mm弾は、普通なら速射性能は12.7mm弾におとり、20mm弾のように榴弾には出来ない。しかし、弾頭自体を延長し、火薬を押し込めて榴弾にしたため、破壊力は十分だ。

質に勝る日本軍は敵機を蹴散らし、爆撃機隊の護衛に戻る。

「見えたぞ！あのデカブツを沈めてやるんだ」

隊長機からの声と共に、魚雷を抱えたJū87が降下を始める。初めに目を付けたのはヴァンガード級戦艦2番艦セント・ビンセントだ。輪形陣を組み空母の右側にいたこの艦は、攻撃隊から一番近い大物であった。

「よゝい撃つー！！」

両側から挟むように5本の雷跡が海面に映る。回避行動をとるセント・ビンセントであったが、流石に5本の魚雷を全て避けることは出来ない。艦首にあたった魚雷は一度突き刺さってから爆発し、セント・ビンセントは減速。そのまま艦首から海水を呑みこみ始めた。

同じく爆撃機隊は、空母のフライトデッキに爆弾を落とす。開放式甲板を採用しているタイコンデロガ級航空母艦、レイク・シャンプレンも100番(1000kg爆弾)には耐えられず、フライトデッキは波を打つ。これでは離着艦は出来ない。腹に6番(60kg爆弾)を抱えた火龍(海軍正式名称：旭光)は辺りの戦艦、重巡洋艦の対空火器に狙いを定め、爆撃する。

イギリス海軍の船は、ポンポン砲を打つが、高速で上空を擦過さっかする航空機にはなかなか当たらない。

同時刻、米英連合艦隊上空

まだ空母に残っていたグロスターミーティアが迎撃に出る。

「T-1。Engage」

>RDY GUN<

対空ミサイルを使わずに、ガトリングのみで戦おうと、呼び出した兵装ステーションからGUNを選択する。

>FIRE<

多数の目標を同時に識別、距離、角度、対象との相対速度などを瞬時に計算し、ガトリングが吼える。ほんの一瞬。

それだけで敵機は火を吹くか、粉々の破片となる。

第一世代ジェット戦闘機とも呼べない。黎明期のジェット機と第七世代のジェット戦闘機。一方的な殺戮でしかない。2010年現在のイージス艦と同等の防御システム。空飛ぶイージス艦と言ってもよいのかもしれない。

「T-1。帰投する。各機、僚機^{ウイングマン}を確認し、2機編隊^{エレメント}を組め」

>DE T-1 ETA1027・AR.<

中枢コンピュータは母艦との距離と方角、風速、風力などを計測し、帰投予定時刻を告げる。今井はオートパイロットを起動させ、美雷は機体を大きくバンクさせ、母艦の方に機首を向ける。

帝鳳のCICのメインスクリーンには、偵察ポッドを取り付けたF-5Aからの情報をもとに、喪失機の数と敵の損害を表示し、同時に作戦完了の文字が20個、六角形に区切られた枠の中に表示されていた。

B・W（大破）：3
M・W（中破）：6
L・W（小破）：17
SINK（沈没）：1
SEP（離脱）：5

第46章 第一次攻撃隊（後書き）

ついに始まりました！ハワイ沖海戦！

第一次攻撃隊の攻撃は見事成功。

シウトウーカも一撃離脱戦法を執れば、コルセアにも勝る優秀な爆撃機に生まれ変わりました

アマネ「旭光は就役して間もないですが、あの程度の戦闘機相手なら十分なようだ」

今井「黎明期のジェット機ではなく、完全に第1世代の戦闘機だな」

アマネ「まあ、普通にやればMiG15やF-86などは敵ではない！」

玲「でも一番はやっぱり、私の美雷ね。日本の開発した純国産戦闘機として信頼性も性能も十分よ」

アマネ「22世紀の第一線で活躍した戦闘機で、小型軽量のマルチロール機は美雷だけですからね。フラットパックは日本軍も採用してたけど、あれは完全に格闘戦向きではありませんからね」

玲「第一次攻撃隊は終わったけど、第二次攻撃隊の出撃まで時間があるわね。ミッドウェイの攻略に行った部隊も参戦するの？」

アマネ「そこはネタバレしないために秘密です。ところで、もうそろそろ来ますかね？」

玲「誰が？」

????「はじめまして、後書き初参戦の神龍の艦魂、希です」

アマネ「（初っ端からテンションMAXだな）」

玲「希も今回から後書きに参加するのね」

希「だって、名バイプレイヤーだもん！」

玲「そこはヒロインって言わないのね」

希「ヒロインって基本的に好き嫌い分かれるじゃない？だから、誰からも好かれる方がいいの」

アマネ「まあまあそこらへんにして。たった一回の攻撃で大打撃を受けたハルゼーはどうするんでしょうかね。日本軍の機動部隊は空母が信濃を含め4隻しかいませんが、向こうはレインボウ・ノアを除いても10隻以上いますからね」

玲「航空機はこちらの方が劣勢ってわけね」

希「艦隊決戦に持ち込めば、毎分あたりの砲弾の投射量はこちらが上回るし、C I W Sシウスで相手の砲弾を落とすことも出来る」

アマネ「それまでにどれだけ相手に打撃を与えるかが、こちらの損害にかかわってきますね」

第47章 一矢報工又攻撃隊（前書き）

学校はじまりました
文化祭が近いです

第47章 一矢報工又攻撃隊

「被害状況はどうなっている」

ハルゼーが艦橋で怒鳴る。すぐそばにいた士官がそばに駆け寄り

「正規空母、護衛空母が1隻大破したため、駆逐艦を連れて離脱させました。及びヴァンガードは甲板に攻撃が集中し中破。その他巡洋艦が数隻中破。アイオワを含め戦艦に雷撃が集中し、22ノットに減速しました」

「そうか、空母1隻なら問題ない。護衛機は残っているか？」

「はい、しかしミーティアの損耗が多くほとんどがベアキャットです」

「なら、ベアキャット全機を護衛に付けてすぐさま攻撃隊を編成しろ！飛行甲板がやられた奴らは取りあえず板でも被せて出撃させる。次にジャップが来たら飛行機は出せんぞ」

「サア、イエツサア！！」

士官は敬礼をするや否や、艦橋を飛び出し艦隊無線を通じて出撃を命じた。

艦攻、艦爆隊はすぐさま爆装、雷装され甲板にあげられた。軽空母からは多数のベアキャットが発艦したが、イギリス空母は装甲甲板が仇となり2隻が使用不能になっていた。

原因はスキップ・ボミング。

喫水線の真上を時速400km以上の速度で突っ込んだ500kg

爆弾は、そのまま格納庫で爆発。鋼鉄でできた飛行甲板を波打たせた。

ダメコンチームは何とか飛ばせるようにしようとハンマーで叩いて波を直そうとするが、90mmもある鋼鉄板はびくともしない。取りあえず使える部分を使いだせる機を全機動員した。

画して、米英連合艦隊の攻撃隊が編成された

ダグラス・エアクラフト社

・SBDドントレス艦上攻撃機 224機

グラマン社、ゼネラル・モーターズ社

・TBF/TBMアヴェンジャー艦上爆撃機 309機

グロスター・エアクラフト社、リパブリック社

・ミーティアF・3（史実とは異なる） 87機

グラマン社

・F8Fベアキャット 166機

もともと、正規空母のみで1200機を数える航空機があったものの、400機近いミーティアが撃墜された。しかし、軽空母のうちでもカタパルトを改装したものは十数機のミーティアが艦載されており、レッドノア、ブラックノアもまだ残しているゆえ、直掩機に200機は回せる。

「準備は出来たか？」

「はい長官。出せる攻撃機は全て兵装転換を終了しました」

「よし。第一次攻撃隊発進！ありったけの航空機でフリークを沈め

る！！」

ハルゼーが叫ぶや否や、カタパルトに載せられた雷撃機が飛び立った。

次々と休むことなく発艦していくが、レッドノアの近くを航行していた、軽空母ベローウッドが炎を吹いた。

「何が起こった！」

すると、士官が報告書を片手に艦橋に飛び込んできた。

「敵潜です。ベローウッドに2発の魚雷が命中！」

「なんてことだ。対潜警戒を厳にしろ！これ以上の損害は俺が許さ
ん」

するとまた、別の士官が飛び込んできた。

「見張り員より報告！右舷20マイルに敵機編隊！輪形陣の内側で
す！」

「何だと。何としても撃ち落とせ。上のやつらにも伝える！レーダ
ー員は何をやってたんだ」

ガアアアン

突如、レッドノアが衝撃で揺さぶられた。低空で接近していた爆撃機隊により反跳爆撃をくらったのだ。他にも数隻の艦が炎上しているのが見える。直掩機のミーティアはそれを見るや否や急降下。機銃を乱射し、日本機は爆散した。

「敵機直上！」

「何だと！？何故そんな数の航空機を持って居やがるんだ。何としても撃ち落とせ！」

艦橋の外に目をやると、異様な光景が目に見え込んだ。直掩に出したはずのミーティアが1機もないのだ。

原因は、搭乗員の練度不足。引き起こしが間に合わず、急降下爆撃機を追った機は全て海面に突っ込んだのだ。シュトゥーカ改に落とされた機もあるほどだ。史実でも、シュトゥーカに落とされた戦闘機は存在したが、それはルーデル大佐の乗る機体だ。

帝鳳CIC

「敵機、七百・・・七機。707機です」

「厄介だな。取りあえず美雷を30機」

チチチチチ

電磁カタパルトが放電を始める。

フックDN。^{ダウン}セット。下ろしたフックをカタパルトに引っ掛け、甲高い金属音を立てて美雷は飛び立った。

「編隊を崩すな。敵機がいかにも多いとはいえ、大半が爆撃機か雷撃機だ。ミーティアを優先してたたけば、後のやつらがやってくれる」

「Roger」

美雷は一気に加速し、翼下パイロンから吊り下げられたガトリング砲の射撃を試みる。

改修に改修を重ねたそれに不備が見つかることはほとんどないが、念には念を入れ、試験的に発砲するのはいわば暗黙の了解。

今井がわざわざ兵装を確認するまでもなく、美雷は中枢コンピュータの思考によりマスターアームスイッチをON。

>RDY GUN<

何時でも使用可能。機体に異常はない

敵機視認>HEAD ON<

「Engage」

敵機の上空を高速で擦過するかと思うとVertical Down（垂直降下）。一気に弾を叩きこむ。

高速で打ち出される弾丸は、まるで一本の剣のようにミーティアに突き刺さる。

ミーティアも散開するが、そこに旭光が到着。交戦を始める。

こうなると向こうの劣勢はより明確に表れた。

一方、その頃帝鳳含む機動艦隊は40ktにまで増幅。米英の攻撃部隊に接近していた。

楯岡の目的は、敵の攻撃を機動戦艦に集中させ、一気に敵戦力をそぐことである。既に主砲塔では射撃準備が整い、敵編隊が近付くのを待つだけであった。

>LOCK ON<

>FIRE<

美雷はオートマニューバで敵を落としていく。しかし、美雷は射撃速度が速いため、どうしても射撃時間が短くなる。携行弾数は約10000発。連続で撃ち続けて2分近くだが、それでも707機の航空機となると全てを落とすことは出来ない。

また、旭光・烈風も撃墜されており、燃料などの問題から帰投し始めた。

残る機は167機。部隊長は撤退も考えたが、ここで撤退したところでどうにかなる問題ではない。そうこうしていると、機動戦艦3隻が彼らの目に映った。

「^{タリホー}敵艦隊視認！」

臨時に部隊長となったF8Fパイロットが叫ぶ。しかしここでついに、機動戦艦の主砲が吠えた。

「主砲塔、撃ちい方始めエ！」

「主砲撃ちい方始めエ」

主砲塔の砲術士が復唱する。

46cm砲は毎分60発という驚異的な速度で発砲した。無論SAB（艦対空弾）は零式弾や三式弾同様、数千発に上る弾子を内蔵しており、さらには当然ではあるが電波近接信管、つまるところのVT信管が装備されていることはいうまでもない。

米英軍機のパイロットは何か紅いものが飛んでくるのが目に入ったが、その瞬間、眩い閃光と共に機体が爆散した。もちろん紅いものというのは真紅に塗られたSAB（Ship to Air Bullet）であった。

これにより約50機程度。これらの機も、88mm連装両用砲の弾幕に捕えられ、全機撃墜された。

ここで少し機動戦艦の対空迎撃の順序を説明しておこう。

1. レーダーによる敵機捕捉。IFF (敵味方識別信号) の確認
2. 迎撃機を上げる
3. 長距離迎撃手段・SAM (艦隊防空個艦防空両方)
エリアドメイン
ボイントドメイン
4. 長距離迎撃手段・SAB (個艦防空時のみ)
5. 中距離迎撃手段・中口径砲 (50mm) ~ 150mm
6. 近接火器迎撃システムCIS (近接)
シウス

第47章 一矢報工又攻撃隊（後書き）

更新してないうちにドイツ軍のポーランド侵攻が始まった日や終戦記念日が過ぎちゃいました。

今井「相変わらずだな。夏期課題も終わってねえだろ」

アマネ「モチロン。夏休みなんか遊ぶためにあるのさ。中1ん時物の理の先生が言ってたからな」

今井「課題ぐらいちゃんとやれよ」

アマネ「（思いつきりスルー）今回は米軍の攻撃隊でしたが、あっという間に壊滅しちゃいました」

今井「（駄目だなこれは・・・）当然だ。日本軍に死角はない」

アマネ「あれもこれも玲さんのおかげですね」

玲「まあね。私にとっては大したことないわ」

希「そりゃそうよ。あんなの敵のうちにも入らないだもん」

今井「羽虫同然だ」

アマネ「それがうまく表現できないのが、俺の苦勞なんだよな」

今井「仕方ない俺の華麗な機動を言葉で表現できねえよ」

アマネ「それはちと違うな」

玲「そうよ、作者の文章力が低すぎるの」

グサア

希「そんなこと言ったら作者が死んじゃうよ」

アマネ「気にしないでください。元々、文章力を高めるために書き始めたものですから」

希「そうなの？そんなこと置いておいて、また戻s（強制終了）」

アマネ「今回「言うまでもなく」という言葉を使ったけど英語の N e e d l e s s t o s a y と イ n t o n e ー シ ョ ン 似 て る な」

今井「そんな話はどうでもいい。それに全く似てない」

アマネ「じゃあ話を変えて。ついに俺達の教室にも冷房が付いたぜ
(^ ^) v」

玲「ちよつと私を無視しないでよ！」

アマネ「じゃあ次回予告をお願いします」

玲「いつもそんなことしてないじゃない」

アマネ「そんじゃ、未定ってことで」

希「バツカじゃないの」

アマネ「(えっ?スケツトンスのパクリじゃん。まあ俺が書いたんだけど)」

第48章 激突！機動戦艦vsレインボウ・ノア

「なんてこった！！全機落とされただと」

「報告です。敵部隊は散開、機動部隊と戦艦部隊の2つに分かれ、内戦艦部隊はヤマト含む部隊と重巡を中心とした部隊が我々の南西、西方向。機動部隊は北西方向です」

日本軍の作戦はコレが主な物となる。

初めに敵航空部隊を殲滅し、高価な爆弾や魚雷を温存するために艦隊決戦に持ち込むため、初めは対空砲火を密にするためになるべく1つにまとめる。

敵の航空戦力が減少した時点でレイテ沖海戦と同じ作戦に出る。つまり戦艦による挟撃だ。

この戦艦部隊を率いるのは、史実でミッドウェイ海戦で参謀を務めた草鹿龍之介中将。重巡部隊を率いるのは西村祥治中将である。

余談だが作者はこの2人も名将だと思っている。

しかし、ハルゼー相手にこの作戦が通用するのであるうか。

何せ、レイテ沖海戦では空っぽの小沢機動部隊を追跡、通信に含まれた文章「全世界はこれを知らんと欲す」に激怒し、一気に数百海里を南下。驚異的なスピードでレイテに突入した。

「ふん、ふざけた連中だけ。戦艦なんざキンケードの護衛艦隊にくれてやる。赤いニシンの護衛を外すとはな」

「それでは我々も北北西に変針しますか？」

「当然だ」

画して、日本軍の思惑は外れ第一航戦が危険にさらされるようになったように見えた。しかし、実際はそうではない。第一航戦と行動を共にするのは機動戦艦である。

そう、聯合艦隊司令部が総力を挙げて編み出した綿密な作戦。それは機動戦艦、第一戦隊等の戦艦部隊、重巡・軽巡等の高速とある程度の砲力を持った巡洋艦隊の3部隊による挟み打ちである。

更には機動戦艦はハルゼーの第三艦隊の退路を断つために一気に加速させ後ろに回り込む。

ただし、逆に言えば途中で空襲にさらされれば信濃以下、正規空母が危険にさらされることは言うまでもない。それでも空母を先に避退させようとすると、途中で潜水艦の雷撃を受ける可能性がある。成功か失敗かはやらなければ分からないという一つの賭けである。また、機動戦艦は北側から回り込むと言うことは、南東方向から逃げられる可能性もある。

トーマス・キンケードの擁する戦艦は実に12隻。内新鋭戦艦が6隻という強力な砲力を持っていることは忘れてはならない。もし西村艦隊が最初に会敵したのであれば、全滅は免れない。

兎に角、ミッドウェイ沖海戦はこれより本格的に始動する。

まず楯岡率いる機動艦隊は、40ktの快速で米英連合艦隊の北東方向に回り込んだ。そして、草鹿艦隊は同艦隊の真正面からの殴り込み、西村艦隊は同艦隊南方向に向かった。

一方で、この動きを察知した米軍はキンケードの護衛艦隊の進路を南西にとり、西村艦隊と対峙する形をとった。ハルゼー自身はそのままほぼ逆方向の北東方向に向かい機動艦隊と激突する。

サマーヴィル大将率いる英国大西洋艦隊はヴァンガード級戦艦1番艦ヴァンガードを旗艦とし、キンケイドと行動を共にした。ブルース・フレーザー率いる空母戦闘群は同じくキンケイドの戦艦部隊の護衛を任された。

「やはり向かってくるか・・・ハルゼー。俺達が太平洋の主役だ。勝ちを譲るわけにはいかない！行くぞハルゼー！！美雷隊爆装完了後第2次攻撃隊を編成、目標はレインボウノアだ」

「了解」

格納庫では乗員が走り回り、パワーアームをつけた腕で爆弾を抱えて美雷に駆け寄る。

エレベータもフル稼働で飛行甲板にウエポンベイが閉まりかけの美雷が並ぶ。搭乗員は耐Gスーツに身を包み翼端に装備された空対空ミサイルのセイフティピンを自らの手で外した。

紫の縦の線が書かれている戦闘用軍装を纏ったものは黒いホースを引っ張り燃料補給をする。揮発性の高いメタンを燃料にしているため、細心の注意を払い、かつ素早く補給を行わなければならない彼らもまた、日本の戦士の1人である。

「こちらT-1。発艦シーケンス終了、発艦する」

「こちらCIC了解。コンバット・インフォメーション・センターT-1よりT-12の発艦を許可する。第1、第2カタパルトの準備は完了している」

「Roger」

>CODE:4501171532<

>MISSION:to Ship bomb(任務:対艦爆撃)<

>DE T-1 DTA1545・AR(T-1より目標到着予定
時刻15時45分・以上) <

次々とキューが表示され、マルチファンクションディスプレイは文字で埋め尽くされる。

同じ文字がキャノピーの有機EL画面にもうつされる。今井はそれに目を走らせ、オートパイロットを起動させる。

>I HAVE CONTROL<

美雷が答える。マスターアームスイッチ、ON^{オン}。

更にT-13からT-24の発艦も許可され2機1小队として編隊を組む。

美雷は編隊のわずかなずれを修正し、エンジンの出力を調整。全ての機体の速度を統一させ、まるで1機の機体になったように機動をとる。

「どうやら待ち伏せされてたみたいだな」

レーダーに光点が映される。

ディスプレイ下部には数が表示される。

53
と。

「そうですね。どうします？第5小队と第11小队は交戦宣言を
しました」

「ENGINE^{エンジン}」

「え？交戦するんですか？」

「山城。前にも言ったが情けはいらない」

「ラジヤー
Roger」

> Engage <

> R D Y G U N <

FCSで照準を合わせ、それを感知したコンピュータが自動でスイッチを押す。

短いモーター駆動音と薬莖が飛び出る音、火薬が爆発する音が耳に響き、無残にも鉄塊と化した戦闘機が海面に激突した。

全機撃墜したところでオートマニューバモードからオートパイロットモードに変更し、一直線にハルゼーの艦隊に向かう。

第48章 激突！機動戦艦V S レインボウ・ノア（後書き）

いやあ

文化祭終わりましたあとか書こうと思ってたら、中間テストが近付いてきちゃいました

今井「今回は短かったしな」

アマネ「そこは勘弁。流石にこの流れでそのまま決戦に持ち込むわけにもいかんし」

今井「というより、決戦と言えるのかどうかだな」

アマネ「同感。フルボツコとかで終わりそー」

今井「まあいいか。弱いんだから仕方がない」

アマネ「そーゆーことになるな。」

今井「やけにテンション低いな」

アマネ「そりゃそうだらけいおん！！が終っちゃったし」

今井「アニメが終わったくらいで大げさだ」

アマネ「うるさい！！アニメはゲームと違って見ながら勉強も出来るんだ」

今井「でも、お前はバカだろ」

アマネ「今の学校では。だ！」

まあ文化祭楽しかったです

来年も楽しめるよう勉強に励みます

ご意見ご感想お待ちしております

第49章 2vs2・(前書き)

今回は短めです

艦隊決戦までの前置きを長くしても仕方ないんで

第49章 2vs2 .

「第1から第8小隊全滅！第9から第10・第21小隊も全滅！！」
レッド・ノアの艦橋では次々と報告が入る。

これにはハルゼーも肩を落とした。
戦力の減少のこともあるが、何より自分よりはるかに若い搭乗員たちが死んでいっているのだ。降伏すれば誰も死なずに済む。しかし、合衆国艦隊の一翼を担う司令官としてそんなことは出来ない。何より、死んでいったものに示しが付かないのだ。

「畜生！まだ射程圏内に入らんのか」

ハルゼーは航空機と砲弾による一斉攻撃を狙っていたが、航空機は全滅の危機に瀕している上、戦艦部隊と戦力を二分した。^{にぶ}

「T-1より各機。ASB (Air to Ship Bomb) のセイフティ・ピンを外せ」

今井が全機に伝達する。

通常、セイフティ・ピンは発艦前に外すのだが、それはミサイルに限る。兵器槽^{ウェポンベイ}に装備された爆弾は炸薬の量が多いため、万一敵の迎撃で命中した場合、誘爆の危険がある。それが翼下ならば1/3が損傷しても飛行が可能だが機体ならばそうはいかない。そのためウエポンベイにはセイフティピンを抜くためのフックが付いている。

美雷はV字隊形を維持したままハルゼーの艦隊に急接近、既に爆弾

のセイフティピンは外されており攻撃準備は万端である。

艦隊が目に入るや否や散開し、目標の空母に狙いを定める。レインボウ・ノアは対独戦用に温存しておく必要があるため、攻撃目標に入っていない。

多数の正規空母・装甲空母は全艦、かま罐が焼けんばかりの高速で退避行動に移る。VT信管装備の高角砲弾が美雷に襲いかかるが、照準が間に合わずに追い打ちとなった。

一方で爆撃も低空からの水平爆撃なので、精密誘導が必要となる。

もし最高速度で誘導しようとしたのであれば、ターミナルクロンティ最大落下速度で落下する爆弾と美雷自体の相対速度が信号の伝達までの時間を長くするため命中率が落ちる。

そのため速度はM1.2に統一させられており、当然のことながら対空砲火の餌食になる確率が上がる。

「全機攻撃態勢に入れ。邪魔な砲があれば壊せ」

「Roger!!」

見事なV字隊形で攻撃してくる美雷に、米艦隊は一齐に砲門を開く。VT信管の作動速度を極限まで向上させ、砲火の数も増やした。

しかし、それでも美雷を捕えることはできない。上空を擦過しながら、正確に爆弾を命中させていく。

レインボウ・ノアのうち、ハルゼーの乗るレッドノアに3機的美雷が接近する。

「Fire!撃て撃て!!ひるむな!!」

ハルゼーが吼え、それに呼応するように高角砲が次々と火を吹く。それも虚しく、上空からDIVE（急降下）してきた美雷のガトリング砲により破壊され、爆弾が落とされる。

「急速回頭！」

ハルゼーもなんとしても被害を最小限にとどめようと指示を出す。圧倒的な力の前にただ立ち尽くすしかなかった。

ほんの十数分。たったそれだけの時間で合衆国海軍自慢の艦艇が見るも無残な姿をさらし、数々の戦闘艦が地獄の底からの叫び声のような声を上げ、その音がこだましている。わずかに生き残ったF8Fベアキャットが戻るべき母艦を失い、海の藻屑となるのを待つばかりであった。

一方で、草鹿率いる戦艦群とサマーヴィル・キンケード・フレージャーの三人が率いる米英連合艦隊は艦隊決戦が始まるうとしていた。互いに30ktの快速とはいえ、遠距離での航空戦により距離が離れていた両艦隊の会敵は22時を回った頃であった。

草鹿は距離4万で砲撃を始める予定であった。

敵戦艦、モンタナ級・アイオワ級・ヴァンガード級はそれぞれ16インチの主砲であるが、全て50口径と長口径のため最大射程は3

万8500mというところである。対する大和型戦艦2隻の最大射程は4万2000m。わずかに長いが、手数が少ない。また、モンタナ級・アイオワ級の装甲は先の艦隊決戦で証明されている。

「ここは、電探^{レーダー}による精密射撃と、西村による漸減作戦。乾坤一擲、敵に近づき居合の如く攻撃するしかあるまい」

草鹿は呟いた。西村も草鹿から電信を受ける前から自分達のなすべきことを理解していた。

「我々の望んだ艦隊決戦！負けるわけにはいくまい。米英諸共叩き潰してくれる！！」

草鹿艦隊は一度5万mを維持したまま米英の戦艦群と西村艦隊の距離を縮めるべく、南下を始めた。一方で重巡・軽巡は快速を生かし一気に距離を詰めた。

「巡洋艦か・・・砲撃して沈めるか」

「キンケード・Sir^{サー}。それはなりません」

脇にいた艦長が発言する。

「やはり、戦艦か・・・」

「はい。ここで巡洋艦を攻撃すれば」

「ああ。奴らの攻撃の的だ。だが放っておくわけにもいくまい」

キンケードが考えていたことは、巡洋艦に砲撃することで魚雷攻撃は受けなくなるものの、その間に敵戦艦の砲撃を受けるとそちらにも対処しなければならぬ。そうならば再び照準を合わせるためにこちらの攻撃がやむ。そうならば相手の思いつぼ。一方的に両方の艦隊から攻撃を受ける。

「空母はいない。ましてやあの程度の技能スキルの搭乗員パイロットに夜間飛行などもつてのほかだ。着艦が失敗すればみすみす戦力を失うだけだ」

「しかし、それも念頭に置かなければ」

「いや、構わない。巡洋艦隊はサマーヴィルに任せよう。我々だけでも数は勝っているんだ、無理に共闘する必要はない。そう伝えてくれ」

「分かりました」

第49章 2 vs 2 ・ (後書き)

数学のテスト終わったあ

今井「だからどうした」

羽根を伸ばせる

今井「羽根なんかないだろ」

それを言うな。 比喩表現に決まってるだろ

今井「それより俺らの出番が短い」

十分出てるだろ。 どっちにしても次の主役は旧軍艦艇だ

玲「私たちは？」

まあ艦隊決戦終わり次第、袋叩きにでも・・・

玲「相手はレインボウ・ノアね」

そうなるな。 てか空母と戦艦ばかり活躍してる気が・・・

今井「確かに潜水艦はガトー級やバラオ級が沈んだただけだな」

玲「航空巡洋艦が出るなら航空潜水艦でも作れば？」

使い勝手悪いだろ。

今井「ところでなんで戦艦率してるのが草鹿なんだ？奴は航空参謀の経歴が長いだろ」

いや。草鹿の一刀正傳無刀流という剣術流派は、基本的に一撃で敵を仕留めるんだ。淡泊な攻撃は今回の作戦にピッタリだろうからな
玲「逆にミッドウェイ沖海戦ではそれが裏目に出たわけね」

まあ、あれはGF司令部の作戦要綱が曖昧だったからだろう。完璧主義者ともいえる草鹿龍之介の性格はあれに適さない。

今井「綿密に練られた作戦を遂行し、かつ短期決戦ならばうってつけだな」

まあ、そうだ。

今回はここらへんで

でわでわっ！！

第50章 戦艦ミズーリ(前書き)

更新が遅くなつてすみません

第50章 戦艦ミズーリ

「モントレーより電信。巡洋艦は任せた。だそうです」

「やはりジャップの戦艦と戦うか……。噂によれば18inのガンを持つてるそうじゃないか。彼らで大丈夫なのか？それにしても足の速い奴ら相手とは、面倒なことだ」

サマーヴィルがぼやく。

「こちらも軽快艦艇を前に出せ。ヴァンガード、セント・ビンセント、アンソン、ハウによる砲撃はその後だ」

時刻は既に22時30分。一応北半球であるがため、陽が落ちるのも早く、また曇っているため正に暗夜である。

日本海軍得意の夜戦となり、魚雷の馳走距離や再装填装置、他にも練度、駆逐艦自体の速度、酸素魚雷故の航跡の見えにくさも日本軍に大きくプラスすることは言うまでもない。

「漸減作戦……。月月火水木金金！練度は我々の方が上だ、格の差というものを見せ付けてやれ！全軍突撃！！」

西村司令長官の声と共に、夕雲型特2駆逐艦1番艦吹雪（3代目）を旗艦に、38ktという快速でサマーヴィル艦隊に突っ込む。そして、その全速で突貫していく友軍の駆逐艦は、雲間に覗く薄い月光に白い吹き流しが映えて見える。

見張り員の顔がたがいに見える距離まで近づくと、各艦の艦長は

「撃つ！」

と短い号令を出した。

61cmの酸素魚雷は45ktの高速で英国駆逐艦に向かう。

「一斉回頭！」

吹雪の艦長は全艦に命令を発した。と同時に、全ての日本軍の駆逐艦は相手に正面を向く形で、舳先を向けた。これは命令されなくとも長年の経験・訓練で培った技術がある。

一方で魚雷を発射した後英国駆逐艦隊も回頭したが、こちらは右も左もてんでバラバラ。拳句の果てに衝突する艦まで出た。

そこに酸素魚雷が襲いかかって来た。

コレでは避けきることも出来ず、8割の艦に命中した。イギリス軍の放った魚雷も、向かってきたものの正面から相対する形で進んでいるので、殆どの魚雷が艦と艦の間を過ぎて行った。

奇跡的にも命中した魚雷は1本と、一隻だけ被雷した駆逐艦が戦線を離脱した。

すると今度は彼我の駆逐艦が最高速度で向かい合い、豆鉄砲と擲掬された12.7cm砲の砲撃を始める。

流石に威力は低いが、駆逐艦自体の装甲も薄いために上部構造物は滅茶苦茶に破壊された。

そこに戦艦部隊も入って来た。

西村は未だ砲撃を続けている軽巡等の軽快艦艇を後方に下げ、大和含む戦艦部隊の邪魔にならないようにした。それを見た草鹿は直ちにレーダー照準を始めた。

大和・武蔵に積んでいるレーダーは実史のものとは段違いに高性能なもので、イギリス製のものとは十分タメを張れる、いやそれを遙かに凌ぎ、恐らくは湾岸戦争時のアイオワ級のものと同等ともいえる。

「距離」

「42000mを切りました」

草鹿の短い言葉で、何を聞きたいのか察した艦長はすぐに答えた。

「よし、艦長もらうぞ。大和、砲撃用意！」

普通戦闘の指揮は各艦の艦長が執るもののだが、草鹿はそれ自分ですることにした。

そして、砲撃用意の命令を聞いた砲術班のものは慌ただしく砲塔を旋回させた。

大和・武蔵の46cm砲が天を仰いだ。

通常の光学照準ならば各砲門が交互に射撃し、微調整を行い斉射（一斉射撃）を行うのだが、優秀なリーダーのおかげでその必要なく初めから斉射を行う。

既に一度、艦隊決戦を経験した大和の乗組員はかなり落ち着いた雰囲気です。大和も武蔵も速力が上がり、照準に時間がかかるのではないかと危惧されたが、そんなことは杞憂に終わりそうだ。

「敵は我々よりも多い！だが俺達には大和、武蔵がいるんだ。46cmの威力見せ付けてくれる。撃エー！」

轟ッ！！

46センチ三連装3基。2隻の戦艦。計18門の砲が咆哮する。

夜の世界がまるで昼のように明るくなった。言うまでもなく巨大な発射炎であるのだが……

約1分たったころ、敵艦隊上空には木枯らしのような音を立てて巨大な砲弾が降り注ぐのが見えた。遠く水平線の彼方から突然飛んできた砲弾をよける術をもたなかった。

単縦陣のまま粛々と進む大艦隊。狙われたのは先頭を進んでいたイリノイ・ケンタッキーの2隻だ。

第一斉射にもかかわらず、降り注いだ巨弾は見事命中。イリノイはその瞬間スクラップと化した。

ここで一応彼我の主力艦の陣容を見て見ると

楯岡艦隊

機動戦艦 帝鳳、神龍、鳳雷

草鹿艦隊

戦艦 大和、武蔵

巡洋戦艦 金剛、榛名

西村艦隊

重巡 利根、筑摩、鈴谷、熊野

軽巡 大淀、能代、矢矧、酒匂

駆逐艦 吹雪型駆逐艦（夕雲型特2駆逐艦）4隻を含む計30隻

ハルゼー艦隊

戦艦 モンタナ、ニュー・ハンプシャー

航空母艦 レッド・ノア、ブラック・ノア

重巡 数隻

キンケード艦隊

戦艦 ミズーリ、ウイスコンシン、イリノイ、ケンタッキー

重巡 ポートランド級、ニューオリンズ級、ウィチタ級、ボルチモア級など多数

サマーヴィル・フレージャー艦隊

戦艦 ヴァンガード、セント・ビンセント、アンソン、ハウ

航空母艦 フォーミダブル、インドミダブル、インプラカブル、インディアガブル

イリノイは戦闘が始まって間もなく、半身不随となりキンケードも戦死した。

ケンタッキーも応戦しようと最高速度で突撃するが、その間にも巨弾が降り続ける。

流石にサマーヴィルも見かねて参戦しようとするが、駆逐艦などは日本軍の圧勝となっていた。更に日本軍の駆逐艦がこちらに近づいてきており、そちらにも対処しなければならない。

戦艦は、勿論バルジを張っているのだが、そう何発も耐えられるものではない。また、イギリス海軍は空母は重装甲であるものの戦艦はとりわけ頑丈なわけではなく、アイオワにも劣る。

「仕方ない、駆逐艦は巡洋艦に任せよう。あの怪物を倒すのが先だ！」

サマーヴィルは決断した。完全に大和の真横。ケンタッキーも射程に入っている。

「Fire! なんとしても大和を沈めるんだ！」

ケンタッキー、他多数のアイオワ級装甲戦艦の艦長が叱咤する。1隻は沈められたが、まだこちらの方が数は多い。射程に入れば互角。いや、こちらが有利だ。と踏んだのだ。

まだ距離は遠いが、はやる気持ちが抑えきれず既に砲撃を始めてい
る。

アウトレンジ
射程外からの砲撃で、大和・武蔵の巨弾に捕えられ1隻が戦線離脱
する羽目になっており、武蔵はイギリス戦艦4隻を相手に戦ってい
る。

内2隻はヴァンガード級、新鋭戦艦であるが、2隻は旧式のキング・
ジョージV世。無視していても何ら問題はない。

一方で大和は頑強な装甲をもつミズーリに手こずっていた。
なにせ、アイオワもモンタナも大和より装甲は厚く、なおかつ曲面
装甲を用いておりこの上なく厄介だ。

「あまり、効果がないようだな。どうしたものか・・・」

草鹿が唸る。

「三式弾でも使ってみるか。よし、九一式徹甲弾から三式弾に変更。
最大戦速でジグザグ航行！」

艦内はすぐに伝令が響き渡り、主砲弾が装填される。

各砲門毎分3発という驚異的な速度で斉射するため、砲塔内部はか
なり忙しい。そのため、砲術員は更に加わった弾の変更という仕事
に文句を言ったことは言うまでもない。

轟ッ！

再び主砲が吼え、ミズーリに向かう。

彼我の距離は現在39000m。まだ相手の射程内ではない。

9発中7発がミズーリに命中し、焼夷弾子をばらまいた。焼夷弾子
は徹甲弾の命中により破壊された、上部構造物の中に飛び込み、激

しい炎を吹き上げた。

流石に数千度という猛烈な炎を消すのは容易ではなく、更に分厚い装甲が、熱が逃げるのを妨げた。お陰で分厚い鋼鉄も熱で溶け始める。

30秒ほど経つと、三式弾がミズーリの船体を叩き、炎が一層強くなった。

流石のダメコンチームも必死で消火に努めたがそれを嘲笑うかのようになり燃え広がった。

第50章 戦艦ミズーリ（後書き）

どうもアマネです

艦隊決戦2回目です

前回のとはまた違う風に書きたかったのですが・・・
まだ続きます

SPACE BATTLE SHIPヤマト公開！

今井「アニメの実写化に成功例はない」

うるさい！ヤマト自体がアニメよりかっこいいからいいんだよ

今井「初めは受け付けてなかったのにな」

そりゃあね

まあ、いいじゃん

てかもうすぐで期末テストや・・・

今井「高校大丈夫なのか？」

正直、メチャクチャ崖っぷち

進学できんかったらどうしょ

今井「死ぬ気で勉強しろ」

え〜

勉強嫌いや

今井「じゃあ諦める」

それもなんかヤダ

今井「じゃあ死ね」

なんで！？（泣）

今井「どつちかはつきりしろよ」

じゃあ勉強頑張る

今井「それならこんなコトしてる暇あるのか？」

ぶつちやけない

今井「早く勉強しろ！」

蹴！

ぶぎゃ

痛い・・・

次回はきちんと更新しますんでよろしくお願いします

第51章 キンケード死ス(前書き)

テストが終わったためさっそく更新

今回は展開がかなり早いかもしれません

何せ文章力が低いから次々書いていかないと、話が続かないんです

第51章 キンケード死ス

ミズーリの船体は既にボロボロであり、あちこちから炎が燃え広がっていた。

艦長はこれ以上戦闘を行ったところで、被害は増える一方だと考え、キンケードに避退を進言した。

「それはならん。ヤマトを沈めるには全艦をもって攻撃するしかない！」

と跳ね付けられた。

しかし、イリノイは初弾で戦闘機能を失い、指揮系統は乱れ、更には沈没の危機にさらされた。そんな相手に満身創痍のこの船体で立ち向かうのは、勇気ではなく無謀である。

幸い、まだ機関は完全な状態であるため、逃げきれないこともないが、速度を上げればそれだけ炎が大きくなる。そのために12ktまで落としているが、ここでそんなモタモタしているといい鴨にしかない。

事実、大和の砲弾は面白いように命中し、そのたびに溶けて薄くなつた装甲が破られ、艦体が振動する。

「長官！やはり撤退すべきです。こんなこと無謀です！」

「イギリスの手まで借りて、我々が先に逃げられるか！アメリカ海軍の艦隊を担うものとしてそんなことは断固として出来ん」

キンケードは再び艦長の意見を突っぱねた。

すると艦長は、徐にあるものを取りだした……

「何のつもりだ？艦長……」

「私はミズーリの艦長として、乗員を守る義務があります。どうしても撤退なされないというなら、貴方にはここで死んでもらいます」

艦長にとっても苦渋の選択だった。

上官に逆らったのだ。

しかし、黙り込むキンケードを見ながら右手に持ったピストルの引き金を引く人差し指に力を込める。

「……分かった。撤退しよう。そう伝えてくれ……」

静かにそう言った。

降り注ぐ砲弾が主砲塔に突っ込むのが見えた。

そんな中突如、爆音が聞こえた。

武蔵と戦っていたケンタッキーの弾薬庫に弾が突っ込んだのだ。

遅発信管の46cm砲弾が見事に装甲を突き破ったのである。ケンタッキーの船体は真っ二つに折れ、ずぶずぶと沈み始めた。

「Fuck（畜生）！もう少し早く決めれば」

「仕方ありません。こうなってしまうては……」

ヴァンガード級戦艦2隻はサマーヴィルの指揮のもと、大和の真横から攻撃を仕掛けているが、アメリカ側が撤退するとなれば、両艦とも沈むのは時間の問題だろう。

また、キング・ジョージV世もコンゴウ・クラスと戦っているが（榛名を除き、イギリスで造られた艦が戦うとは何とも奇妙な光景で

ある) 2センチだけ砲が勝っているとはいえ、連射性能、命中率、速度に於いて劣っているため、苦戦を強いられている。

すると突然、アイオワ級3隻が大きく身震いした。

大和・武蔵の砲弾ではない。更に何発も砲弾が降り注いでくる。

ミズーリの艦橋に立つキンケードは信じられないというような顔で双眼鏡をのぞいていた。

「なんでこんな処に居るんだ……」

30分前

「F7Fは何機残っている?」

ハルゼーは艦長に尋ねた。

「格納庫に残していたため、20機はすぐにも発艦出来ます」

「そうか。ならすぐにも発艦させる。ブラック・ノアの方にも伝えるんだ」

双発機であり、夜間戦闘機であるF7Fタイガーキャットは、爆装したのちカタパルトから射出されていった。

「敵機。数は50機です」

「なんだと? 奴ら、パイロットを見殺しにするつもりか。あの程度

の技量なら母艦には戻れないぞ」

「どうされますか？アラート待機は3艦合わせて12機ですが」

「いや、彼らを出す必要はない。こちらで片付けよう」

「分かりました。それでは中央部VLS、1セルから12セルより短SAM発射用意」

「待て。ミサイルの量産体制はまだ整っていない。CIWSのみで対応する。88mm^{ハチハチ}両用砲発射準備」

楯岡の命令のもと、88mm砲に弾が込められる。砲術長があとを継ぎ、次々と命令を出す。

「敵機編隊、本艦より二百四十度！88mm^{ハチハチ}砲撃ちい方始めえ！」

「了解。ハチハチ、撃ちい方始めえ！」

CICより、砲術班がスクリーンのボタンを押すや否や、88mm両用砲に弾が自動装填され射撃が始まった。ちなみにこの両用砲の艦対空有効射程は約1800m。CIWS^{シウス}改。つまり57mmガトリング砲は1500mの射程を持つ。

正確無比な射撃はF7Fの機体を貫き、信管が作動し爆散した。幾ら夜間飛行ができようが、優秀なレーダーをもつ機動戦艦の前では何の役にも立たない。

「距離は？」

「100海里（185km）を切ったところです」

「そうか。全艦第8戦速！」

帝鳳の機関は独特な音を立てて、一気に速度を増した。

52kt(96km/h)で、モンタナを沈めんと真っ直ぐにハルゼー艦隊に向かった。既に西村艦隊・草鹿艦隊は接敵しており、空母を守る必要もなくなったため、ここで信濃、長門を含む航空戦隊は戦線を離脱した。

機動戦艦の射程は約45km。1時間前後で砲撃を始められる。それまでミサイルによる攻撃を行うべきか迷ったが、トマホークを使うのは惜しいと結局断念した。

「間もなく射程内です」

「よし、敵はモンタナ。砲撃用意！」

「砲撃用意」

CICのメインディスプレイに主砲塔のFCSが起動し、重力・磁力による補正情報、及び風速・風圧その他不確定要素の補正情報が表示され、照準が始まった。

「フラスト Bシールド展開！」

主砲塔の周りに流線型をした鋼板が展開され、強力な爆風を受け流す準備を行う。

機動戦艦の対艦用徹甲弾は、敵艦の分厚いヴァイタルパートを貫くべく特殊な炸薬を使用し、その分爆風も大和より桁違いに強力にな

っている。そのため、上部構造物の損壊を防ぐために、対艦射撃の時のみこのBシールドが展開する。

「撃てエー！！」

帝鳳の巨大な艦隊が後ろに引つ張られるような衝撃と共に、巨大な砲火が閃いた。

毎秒1・5発で次々と砲弾が飛び出し、遠方に戦艦が燃えるのが見えた。

そのまま最大戦速にまで速度を上げ、一直線に敵艦とすれ違った。

3隻が通った後にはレインボウノア1隻の残骸とモンタナ級装甲戦艦2隻の残骸が浮かぶのみとなった。幸か不幸か、ハルゼーの乗るレッドノアは、航空機の攻撃以外の被害はなかった。

そして、大和の居る海域にそのまま突っ込んだのだ。

すぐさま照準を合わせ、再び砲撃を始める。

最早ミズーリは撤退を始めようとしてたため、艦内は大混乱となった。そんなことにもお構いなく、46cm砲弾は次々と降り注ぐ。ここで、キンケードの命運は尽きた。

アイオワ級戦艦4隻は、見事に全艦轟沈。イギリス側も駆逐艦隊は全滅、インディアファガブルも沈没した。

まだ金剛と榛名が戦っていたが、帝鳳を見るや否やイギリス戦艦は尻尾を巻いて逃げだしたため、深追いはせず単縦陣を組み堂々と戦闘海域から離脱した。

日本軍の圧勝と言いたいたいところだが、ヴァンガード級2隻の砲撃を

受けて、またもや大和・武蔵は上部構造物をめちやくちやに破壊され、右舷の機銃や高角砲は、ほぼ全滅した。

これを知ったルーズベルトは、そのまま日米の休戦を申し出た。

東条内閣も、国内情勢が不安定な中、このまま戦争を続けられる状況ではなかったため、これを受け入れた。

今回の戦争での死亡者（軍人のみ）

日本軍 約170万人

米軍 約42万人

圧倒的に日本側の損害が大きいものの、楯岡らが介入してからのアメリカ側の損害がうなぎ上りに増えたのに対し、日本側の死者が極端に減ったことや、神風の出現を抑えられたことなどを考慮すると、機動艦隊の存在は欠かせないものだったと言えよう。

第51章 キンケード死ス（後書き）

第一次太平洋戦争編、完結

と言ったところでしょいか

一回番外編を挟み、中国大陆に戦線は移りますよ
名前だけ出てきた佐藤幸徳中将が活躍する予定です

いやあ

大体半年でここまで戦局を変えるなんて、無茶苦茶だったかな

玲「私の出番少くない？」

だって敵が弱過ぎるからわざわざ戦闘中に出す必要ないし

玲「まあ寝てたしね」

よくあの轟音の中寝れますね

玲「ノイズキャンセリングのおかげよ」

テクノロジーの産物ね・・・
でも中国大陆に戦線が移ったら玲さんの出てくる場面が激減するかも・・・

玲「番外編をたくさんやればいいじゃない」

無理っすね

コメディ系苦手・・・

玲「ストパンみたいなんでいいから」

玲さんが「おつきい」とか言うのか？

ないない

てかムリダナ

R - 15に入る

玲「好きなキャラはユーティライネンなのね」

そうです

てか坂の上の雲始まった・・・

玲「さつそく正岡子規が死んだわね」

命日が・・・親父とエーリツヒ・ハルトマンと同じだ

玲「暗い話するんじゃないわよ」

すみません

てか

高校受験のこととか、通知表のこととか考えると気が滅入る・・・

そんなこんなでグダグダなんですけど、常連さん以外でも感想あればガンガン書いてください

面白くない

とか一言だけ書かれると泣きたくなくなるんで、直せるところがあれば書いてください

第52章 こんな感じで大丈夫か！？大丈夫だ問題ない（前書き）

機動艦隊が時間転移して早半年がたっているのですが、日常書くのが苦手です

短いし、何がしたいのかわかりませんが、一応本編に続いているので読んでくださると幸いです

第52章 こんな感じで大丈夫か！？大丈夫だ問題ない

日米は、両国の直接的軍事衝突を1年間に渡り禁止することで、休戦が成立した。

無論、双方の賠償金などは支払われないことになり、両国間の貿易も行われない。互いの勢力範囲が変化したこと以外は開戦前と同じ状況となった。

そして、日本側はその間に大東亜共栄圏の繁栄を目指し、マーシャル、ギルバート、ニューギニアほか多数の植民地の独立を認めた・・・

休戦とその後

今井篇

「玲さん・・・なんでここに居るんですか」

ダルそうに眼の下にクマを作った今井は、自分の部屋に至極当然のように居座っている帝鳳の艦魂を見て言った。そこに居たのは帝鳳だけでなく機動戦艦3隻全ての艦魂であったのだが・・・

「ここに居候してるからじゃない。それに祝勝パーティをするから」

「ワケ分かん。それにパーティをするほど暇じゃない」

「お願い悠紀 いいでしょ？」

「そんな上目遣いで頼んでも無理ですよ、希さん」

と、どうしてもと2人が頼んでくるが、今井は今井でデスクワークというものがある。第一アメリカのハラは見え見えのため、次に戦争が起こるまで1年。力を蓄えるにはとても短く、この戦いで傷ついた人たちの心を癒すにはもつと短い。

仮初の平和であっても、それが長いことにこしたことはないがそれでも1年は短いのである。

そんなことを思いながら、今井はUSBメモリとノート型PCを持って部屋を出た。真珠湾への遠征の後、マリアナで聯合艦隊の補給を待って、その後淡路島に完成した機動艦隊専用ドックに入る。ミッドウェイの攻略に出た蒼龍、飛龍は直接淡路島へと帰投しているらしい。無論、大規模な地上兵力を送り込んでおり、同時に重土木機械類も陸揚げしている。

「沖田ア、入るぞ」

「どうぞ、開いてるわよ」

「何とか、こっちで改造図面の作成は終わった。後は内地の連中に頼めば良いってぐらいだ」

「あんなに出撃ばっかでよく出来たわね。って何そのクマ!？」

沖田はPCの画面から目を離し、今井の方を向くとそう言った。

「ちょっとは休んだらどうなの!」

「うつせえ疲れてんだよ。大声出すな」

「ああ、ゴメン・・・じゃなくて、なんで少しは寝ようとしな
ないの？」

「オカンじゃねエんだからほっとけよ・・・」

「私だってアンタのママなんてお断りよ」

「ママ？」

「呼び方なんてどうでもいいでしょ、それより細かいとこまで詰めようと思ったけど、今日はもういいわ、部屋に戻って休みなさい」

「生憎、部屋でもゆっくり休めそうにない。それに自分の躰のことは分かってるつもりだ、迷惑はかけねーよ」

そう言ってみたものの、結局この後今井は2時間でグロッキーな姿で沖田の部屋で倒れたことは言うまでもなかった。

神谷篇

「零、休戦したってよ」

「ああ、聞いたよ。結構前から決まっていたらしいけどな」

「いや、だからってその芝居をやる理由にはならんだろ」

「福井・・・本当に大丈夫なのか？医務室に連れて行くところか？」

まだ、顔を青くしながら福井の体を揺さぶる。

真鍋はどうやら福井のことを医務室に連れて行くこと、体勢を変えた。

「真鍋、真に受けんなよ。ただのこいつの芝居だ」

「そうだったのか？大丈夫なんだな？」

少し天然な真鍋は、本気で福井のことを心配していたようで、福井に詰め寄った。

腕をがっしり掴み、逃げようはない。神谷はこの語の展開を既に察しており、触らぬ神に祟りなし。と呟いて、食事を続けた。

「全然ダイジョーブだZE のーぷろぶれえむ！アレ？カズ？なんでそんな顔してんの？え？近いって近いって近いって！！」

「ウギヤアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

断末魔の叫び声とともに、2人は消えて行った。

神谷は食事が終わった後、本当に医務室に運ばれる羽目となった福井のもとを訪れた。

医務室の特有の薬の臭いはどこか昔を思い出させるところがあり、神谷はこの匂いが嫌いだった。しかし、白いベッドにはグロテスクでありながらもきちん息をして

「カズの悪魔」

などと呟き続ける福井の姿を見て、ホッと胸をなでおろした。

第52章 こんな感じで大丈夫か！？大丈夫だ問題ない（後書き）

アレ？

なんで沖田が帝鳳にのってるの？マリアナか淡路島に居るのでは？
と思ったかもしれませんが、詳しく述べていないので、別に居ても
おかしくないか
と、改めて帝鳳に乗らせました

駄文ですが修正できる点があればどんどん書いてください
今後の執筆活動の参考にします

第53章 金城鉄壁、虎頭ノ牙（前書き）

なんか色々遅くなってますいません。

どうも空戦以外は描くの苦手で……

とは言っても元々あんまり情景描写とか上手くないんですけどね

第53章 金城鉄壁、虎頭ノ牙

満州 虎頭要塞^{フイトウ}

「本日より配属となった、陸軍第一機甲師団長佐藤幸徳だ。これからこの指揮を任されることになった」

「敬礼！」

踵を鳴らす参謀たちと、スニーカーのような底がゴムの靴を履く兵たちが、一斉に敬礼した。

兵の大半が徴兵制で甲種（一部丙種）だった者たちであるが、既に半年近く前線における死傷者が減っており、会戦自体もそれほど行っていないため、十分な訓練ができたおかげである。

もともと、陸軍が危惧すべきはソ連であるのだが、ソ連陸軍はシベリアからもシベリア鉄道を用いて2万人の兵と1000両の戦車や重砲などを東部戦線に回したため、関東軍と戦う余裕がない。

「参謀長、現在の航空機や戦車、弾薬の備蓄状況などの報告を」

「はっ、現在は一式中戦車改が50両、チハが80両、弾薬は大体20会戦分と言ったところでしょうか」

「戦車が少ないのは、どういうことだ？」

「はい……言うまでもなく、新型の生産のため本国に一度戻してしまして……。週2回のペースで海軍にピストン輸送を依頼したのですが、生産が追い付いていないため配備がままならない状態となっています。何とか十五糎自走砲が800両程あるのが幸いですが、

・・・あと、航空機は雷薙が40機、火龍が100機近く配備されています」

「それに隼や疾風が加わるわけだな。そちらは何とかかなりそうだ」

陸軍は機甲師団を設立し、空軍の創設とも相まって大きく人事等が変化していた。

海軍がそうだったように3軍+陸戦隊は完全に内閣の管轄下に入った。故に軍部の暴走はある程度抑えることができ、更には外交戦略面と軍事戦略面の二面に於いて十分な国家戦略的な軍事行動がとれる。また、陸戦隊が独立した部隊となっているのは戦後の国防を見越してである。

楯岡は、この世界の日本、大日本帝國を世界・アジアの覇権国家にするつもりは毛頭ない。ただ、日本の国際的な地位を確固たるものにしようというだけである。しかし、隣国との関係は芳しくないものとなる可能性は十分にある。何より、ロシアとは揉める可能性が十分にある。仮に日本が勝ったとしても樺太、千島列島ケルルは戦前に日本のものになったりロシアのものになったり、はたまた両国のものになったりと、国境線がはっきりしていない。

もしロシア（ソヴィエト社会主義共和国連邦）がことを起こせば、迅速な対応が必要となる。その時に3軍のどれがなにをすべきかを考える暇はない。ようは、アメリカ海兵隊と同じ理由である。

「しかし、師団長。陸軍省から早急に露助をチタにまで追い遣れという命令が出ていますが、外蒙古はおろかノモンハンまで獲り返すことすらままなりません」

「取りあえず、シベリア鉄道を砲撃もしくは爆撃するしかないだろう。そうすれば上の命令には背かん。問題はその後だ」

「服部大佐が上に掛けあつて、何とか重砲類は数だけ揃えましたが戦車やトラックがなければ歩兵の輸送ができません。何より戦車の数が少なすぎて八方ふさがりです。ドイツでは自走砲の零距離射撃が有効だそうですが、砲塔が旋回しないためこちらには不利です」

ここで言う、零距離射撃とは俗に言われている0m距離での射撃ではなく、原義である仰角0度での射撃という意味である。

「2月・・・3月になれば、雪解けが始まると聞いたが？」

「はい、そうなると泥濘期となり向こうも戦いようがありません。そうなれば生産ラインも整い最週に10輦は輸送されるはずですが、その間にドイツがどうなっているか分かりません」

「結局、我々は何もできないわけか・・・情けないことだな。20個師団を誇る、関東軍が敵を前に指をくわえて見ているだけとはな」

「だが航空機と歩兵はあるわけだろう？なら問題はなかつた。戦いは数で決まるものじゃないよ」

ふと、後ろから静かな声で、しかしはつきりとした口調でそのようにいう男が現れた。

現れた男は、本来このような軍事施設に居ないはずであつた。

「貴方は・・・なぜこのような場所に居らっしゃるのですか？」

思わず佐藤も敬語を使ってしまうほどの人物でありながら、決して威圧的ではなくそして堂々とした佇まい。場の空気が静まり、一兵卒から参謀長まで啞然としてしまった。

「東條大将から直々に君の補佐をやつて欲しいと頼まれてね。この度、第一機甲師団作戦参謀に任命されたんだよ。改めて、第一機甲師団作戦参謀、石原莞爾いしわら・かんじ陸軍少将だ」

石原莞爾は、白人の支配からアジアを解放するために日本とアジアの諸国は力を蓄えるべきだと説いた人物で、世界最終戦論の著者でもある。史実では、東條大将と折り合いが悪く罷免され、東條英機暗殺まで企てた挙句、軍法会議に召喚され、予備役に投入された。故に退役軍人であるが東條自身が考え方を改めたために再び関東軍の参謀からこの第一機甲師団の作戦参謀に抜擢された。なんでも、航空機と機銃を組み合わせることで攻撃することこそ、最適な使い方だと陸大入試の口頭試験で答えたこともあり、大局を見る目があったともいえよう。

しかし、満州事変を起こした張本人でありはつきり言つて頭がいいのか悪いのかよく分からない人物である。ただ、体が弱く病気がちであるため作戦に支障が出ないかも危惧された。

「ところで、さっきの話聞いていたところによると、こちらは兵力が不足しているようじゃないか。航空機を使ったところで進撃は無理だね？これでは上に背いてしまう。それだけじゃないよ。ソ連も兵力が不足しているとはいえ、こちらの5倍はあるそうじゃないか。逆に我々が攻撃を受ける可能性があることも忘れてはいけな
よ」

皆が虚を衝かれたような顔をした。

誰も向こうから攻めてくるなど考えもしなかったのだ。なんせ極東に集められた兵力は東部戦線での状況の悪化により、3分の2にまで減ってしまった。当初集められていた1000門を軽く超える重砲群は見る影もなくなっており、戦車も減っているようだった。

「師団長がそんな顔をしてどうするんですか。作戦参謀となつたらには必ず命令に沿うような作戦を立てますよ。それに……」
チラツと部屋の端に目をやり、佐藤や参謀長らと同じように正装シロフクに身を包んだものを確認すると。

「空軍も我々に協力してくれるそうじゃないか。ジェット機の手を
見せてもらおう」

石原はそう言い残すと、佐藤に敬礼をして退室した。
それに続き、参謀長も兵員らに体を向け直し、腕を後ろに組むと「
解散!」と言って、佐藤を除く全員が部屋から出て言った。

第53章 金城鉄壁、虎頭ノ牙（後書き）

いやぁ取りあえず中国とソ連への対抗手段への一手がかけたってところかな？

今井「相変わらずトロいな」

うるさい！こついつの苦手なんだよ

明日からは期末試験だしorz

今井「今度は大丈夫だよな？こんなコトしてる暇あるんだったら」

いや。ぶつちやけ自信ないかも。

てか、艦魂出した意味なくね！？

陸戦に艦魂出てこねーじゃん

玲「ちよつと！それどーゆーことよ」

うわぁ。マズった

しゃーないから適当にソ連をフルボッコにしとこうかな

今井「ネタバレじゃねーか」

大丈夫だ問題ない

玲さんと今井のムフフな展開でも入れてやろうかな
ラブコメ路線にパワーダイブ！

今井「それはやめとけ」

まあ取りあえず小説読み漁って、何とかしてみるか

玲「おいしいスイーツいっぱい出してね」

勿論さ！

甘いものこそ正義だ！

テスト始まるんで

勉強する気が出なかつたら来週中には更新すると思います
更新してたら

ああ、勉強出来なかつたんだな
と思ってください

まあ勉強した経験なんてないんですけどねww
感想よろしく願います

でわでわっ！

第54章 冬季攻勢(前書き)

取りあえず通常授業は全部終わって、補習と卒業式だけなんで投稿しました

第54章 冬季攻勢

「空襲警報！」

突然、一人の兵が司令部に転がり込むように駆け込んで来た。

「どうした、空襲警報だ！？」

流石の佐藤も慌てた、何せこちらは戦力を強化しているのに対しソ連は次々とドイツに兵力を回し、弱体化している。こんな中、二正面作戦に出るとは愚行も甚だしい。

「はい、敵機はツポレフSB、ベトリヤコフ2、ツポレフ2の多数の爆撃機、護衛機はラボーチキン5、ヤコブレフ9、そしてイリュージンも確認されます。また、更に上空1万mには見慣れない4発の爆撃機が見えます」

イリュージン

シュトゥルモヴィークと呼ばれることがある。急降下爆撃機。ドイツ側のJu-87スツーカーと同じであり、発音の違いから一種の固有名詞となっている。

また、彼の言う見慣れない4発機はTu-4。B-29スーパーフォートレスのコピーである。しかし、前部と後部を結ぶ通路はなく、その分爆弾搭載量を増しており、手動による部分が多い。これは技術者によると単純な機構にするためと言っているが、恐らく価格と技術不足からだろう。

「分かった。すぐさま戦闘配置、前方の滑走路からは全て戦闘機を格納しろ。恐らく離陸する暇はない。後ろの航空基地より戦闘機は

出せるだけ出せ」

2分後、屠龍・火龍・飛燕・疾風・雷雉が次々と離陸。高高度性能の優る雷雉と火龍は高度12000mに展開。航続距離の短い火龍は矢のように飛び上がったと思うと、4機1個編隊のシュヴァルム隊形を形成しTu-4に襲いかかった。

「あれはB-29？」

もつとも前方を飛行していた火龍のパイロットで飛行隊長はそう呟いた。

間違いではなかったが、翼には赤い星が描かれておりソ連機で間違いはないようだ。すぐさま機体をヒラリとスライスバックのバンクを始め、機体を45度傾ける。そのまま少しずつ角度を増やしそのまま宙返りの途中でパワーダイヴ。一気に距離を詰め、機首の機関砲でコックピットに砲撃を加える。

すると、敵機上の20mm機関砲が吠えた。照準は全く明後日の方向を向いており当たるわけもなかった。なにせ、ここは原型ならば無線照準であるのだが、機銃員がいなければ弾も込められないし、射撃も出来ない。それだけでなく相対速度は1300kmを越えており、互いのエンジン音は遅れて聞こえてくる。そのまま下に向かい5000mにまで降りたところで敵機が全て上空に見える。

ヤク9やラボーチキン5が緩降下で攻撃を仕掛けてくるが、照準を合わせる暇もなく火龍はインメルマンターンからズーム上昇を始めるために後ろに見える。

上昇力で敵うはずもなく、今度は左後ろ下方から突き上げるように攻撃を仕掛ける。

「何だあれは！速すぎてどうにもならん」

「左エンジン被弾、速度落ちます！」

「クソツ、ヤポンスキーが！！」

抗う暇もなくTu-4は落とされていく。

高度の優位と絶対的な爆弾量を誇る原型のB-29であるが、同高度で高速性能を余すところなく生かした戦法と、レシプロ機とは桁違いの大火力の前ではただの大きなでしかない。事実、朝鮮戦争で使われたB-29はMiG-15の前になす術もなく落とされた。

「燃料がもうない、俺達はここまでだ。後の連中に任せよう」

5分もたたないうちに30機のうち12機を落とし、ツポレフSBなどの中爆も7、8機撃墜した16機の火龍は出撃時と同じ高度で去っていった。

次にソ連機と会敵したのは雷薙と屠龍の双発戦闘機と、一撃離脱戦法を重視した機体であり四式単座戦闘機・疾風だった。

今度は護衛戦闘機が多数寄って来た。どうやらなかなかの手練れが揃っているようだ。動きはどこか堂々としており、墜とせるものなら墜としてみろというような闘気オーラを纏っている。

なるほど、自信があるようだ。

そんなことを思っていると二機で襲いかかってきた。

しかし、雷薙の速度は今までの機体とは一線を画すものがあり、綺麗に射線上から姿を消した。

「くそ、双発のくせになんて動きしやがる！」

ソ連機のパイロットは毒づいたが、そんなことを言ったところで何の解決にもならない。

しかし、サッチウィープを保ち、2機一組で襲いかかってこられるとなかなか厄介であり、屠龍や旧式の飛燕などは損害が大きいようである。

屠龍は仕方なく高度を上げて逃げようとするが、ソ連のレシプロ機は優秀な方であり8000mまでついてくる。そこに疾風が到着し、シュヴァルム戦法を展開した。4機一組。更に日本の単座戦闘機の中で最高峰ともいえる性能を持つ戦闘機は、優秀なパイロットに恵まれれば決して扱いに困る機体ではない。確かに高速領域での操縦は思うように行かず、操縦桿は重たいが格闘戦をしなければ問題は無い。雷薙も半数は低中高度域にとどまりそれらの戦闘機を支援、いや最早主力と言ってもいいが、兎に角ソ連機を圧倒している。先ほどまで逃げ惑っていた屠龍もようやく本来の力を発揮しB-29キラー、樫出勇の如く猛然とTu-4に襲いかかった。月光と同じ20mm機銃を斜め上向きに装備したことにより、1000m以上の高見に昇るTu-4を追撃し、次々と仕留めていく。最早空は日本機の独壇場となっており、割り込む隙間もない。

「畜生、畜生！もっと速く飛びやがれ」

無線を解放しているため、向こうのパイロットの声が聞こえてくる。ロシア語は分からないが、声の雰囲気から考えて罵声であることは確かだろう。それが我々日本兵に向けられているものなのかは分からないが・・・

「うわっ！助けてくれイワン！ケツに着かれた」

雷薙は見事に敵機の後ろにつき20mm機関砲を撃ってくる。その

追っているヤク9は急降下、旋回を繰り返して逃れようとするが性能ポテンシャルの差。一種の世代の差からどうしようもない。

「イワン！どこに居るんだ、ぐあああああ．．．」

悲痛な叫びがコックピットに響き渡る。

殺さなければ殺される。目を背けたくなるような光景だが、それが現実なのだ。敵味方問わず常に生死の淵を歩き続ける。それが戦争であり、その原因はやはり人間なのだ。

戦争というものはそのまま人種や民族の種としての生存競争、生きようとする本能があり太古から戦う遺伝子を受け継いできている。そして、この状況はヘタをすれば自分達のものだったかもしれない。いや事実そうであった。史実ならばF6FやP-51に鴨にされ、墜とされるために飛んでいる。それだけではなく自分から死に行くと。神風特攻すら存在したのだ。

「よくも、ボリスをおおお」

戦友なのだろうか、追う側から追われる側へとポジションが変化したが、それでも究極ともいえるそのレシプロ機はエンジンの排気に青い炎を噴かせ加速する。

その自分が落としたものと同じ機体が迫る。冷静さを失っているものの見事な機動で追いかけてくる。それはまるで自らの運命さだめに抗おうとしているようだった。戦友のために。

しかし、それも無駄な努力であった。別の機体の曳航弾に捕えられ、爆散した。

結果彼らの活躍により、爆撃機編隊は残り少ない護衛機と共に撤退していった。損耗率は40%に迫り、これでは必要な戦果をあげる

ことができないと判断したのだ。失った虎の子の重爆、Tu-4ブル。ボーイングスキー。旧式の中爆群。そして戦闘機。これによるソ連の空軍力の損耗は微々たるものだが、圧倒的な性能差。兵員一人一人の技量の差を見せつけられた。

ソ連極東軍はたった一度の戦闘で大規模に極東での戦略の見直しを余儀なくされた。

第54章 冬季攻勢（後書き）

東日本大震災すごいことになってますね

はつきり言って、他人事にしか感じられないのですが・・・
悪いことだとは分かってるんですけどね。

まあ自己満足で関西電力本社でギヤース力叫んでる奴らよりマシだ
と思うんですけど

火力発電所や水力発電所も危険だっということが分かってるのやら・・・
とりあえず、出来ることをしようと募金に参加しました。

ところで、今回はソ連側の視点も取り入れつつ、登場人物を増やさ
ないようにするのは苦労しました

名前は出たけど2人ともなくなりましたけどね。

まあ普段通りの後書きでもやります

さて、おしゃべりでもしよっか

今井「えらく適当だな」

だってテーマ決めても話したいこといっぱいあるし

じゃあテーマ1「東日本大震災」

（・・・）つかンペ

今井「ん？枝のんメルトダウンー」

よし終わり

次行こう

今井「ちよつとマテ、それは被災者に失礼だ」

最初に書いたからよくな？大体俺が何か言ったところで解決する問題じゃないし、同情なんてするつもりはないね。結局頑張るのは彼ら自身なんだからさ。俺らはその手助けをする。それだけ

今井「まあ、そうだな」

????「着弾！」

グヘエ

玲さん登場

現在作者の上に立っています

玲「いつもあたしって途中からじゃない？」

今井「確かにそうだ」

まあええやん

で次のテーマ

テーマ2「卒業」

シロイヒカリノナーカニー

今井「そのオンチな歌を止めろ」

玲「卒業できるの？」

あう、まさかの質問
卒業はできるよ！

玲「進学は？」

ちよつと黙って
俺泣きそう

玲「じゃあ次のテーマは「テスト」で

京大のカンニング事件ですね

今井「ある意味才能だな」

玲「あんたも試験でやればよかったじゃない」

一番前だから無理

テーマ4「前原辞任」

(´・`・´)つかんぺ

玲「何？誠司と金キムの問題？」

今井「後釜もないのに無理にやめさせるなよ」

同感

まあ、こんなところかな？

民主党が炎上してるな

まあ、今回菅さんはある意味リーダーシップを発揮しましたし株が上がったのではないでしょうか？

それでは意見、感想等お待ちしております

第55章 増援Ⅱ 苦悩（前書き）

遅くなつてすいません

メインは機動艦隊のハズなのに陸に上がってしまうと話があ……
上手く機動艦隊と対ソ戦を絡めて行けたらいいんですけど

第55章 増援Ⅱ 苦悩

「え？関東軍の支援に行くんですか？」

柄にもなく素っ頓狂な声を上げる今井。

とは言つても、抑揚がなくどこか他人事のような声であることには変わりがないのだが・・・

「そうだ。大本営からも支援の要請が来ている。美雷ならハードポイントにMERを装備できるからな。十分な打撃力の向上が見込めるからだそうだ」

「AAFS計画はどうなったんです？」

AAFS計画とは、対地攻撃に特化した火力を持つ航空部隊。つまりは攻撃機や攻撃ヘリの採用を見込んで立案されたものであり、主に陸軍の要請によって進められた。

「ああ、アレか。どうやら上手く行っていないみたいだね」

「で、それはいつからなんです？滑走路の整備などの関係もありますし」

ジェット機は前線基地の滑走路は基本的に使えない。

何故なら、この時代のほとんどの基地は地面をならしたただけのもので、エンジンを胴体に内蔵している多くの戦闘機は、インタークと地上のクリアランスを大きくとれないために、土埃を吸引してしまう可能性がある。

不要物を吸引するということは、バードストライクなどの例にとっ

て見られるように、必要な推力を得られなくなり墜落の危険性がある。

「なるべく早い方がいいだろうね。沖田博士がこちらで開発したダストフィルターをインテークの前面に取り付けることでその心配はなくなるそうだ」

「分かりました。2艦の飛行隊長にも伝えておきます」

「ありがとう。助かるよ。満州に到着するのは1週間後だから、それまでゆっくりしておいてくれ」

楯岡はラフに敬礼を済ませると、そのままフラフラと去っていつてしまった。

今井は何故あんな人が司令長官になれたのかと、たまに疑問を持つが、彼のもとに付いていけば損はしないと考えていた。

ところで爆撃で戦局が好転するとは思えない。戦線を押戻すには、やはり歩兵、人の力が必要なのだ。幾ら敵の基地を壊そうが戦車を破壊しようがそれはスコアを伸ばしているにすぎない。それにしても、航空機の力は絶大だがそれを過信するのも問題だ。

南はキンバリー台地まで戦線を拡大したが、採掘できる金属は時間的な制約を受ける。

それに、この時代では鉄・ボーキサイトの採掘が始まっていない。日本に必要なこの2つの鉱石、その採掘が始まっていないということとはまず鉱脈に当たらなければならない。そこから掘り進めていくことで必要な鉱石が手に入る。それを精製、鍛錬することで初めて使い物になる。ただし、日本の炭鉱が難しい坑道掘りをしてきたのに対し、ここ、キンバリー台地は比較的安易な露天掘りができる。つまり、今までとは比べ物にならない速度で掘り進めることができる。

るのだが、米軍、いや独伊連合が侵攻してくるのは早くて2年後だろう。

それまでに資源を蓄えることができなければ、大量生産大量消費の航空機による戦いで優勢に戦うことはできない。

「時間がない……か」

それにしても妙である。

沿海州ならまだしも、攻撃目標はソ連領の奥地であるため、空軍の管轄である。

陸軍は未だ航空隊を保有しているが、それも空軍に移行しつつある。その上日本が、機動艦隊が誇る最新鋭機かつこの時代の戦闘機の性能を遙かに超えるオーバーテクノロジーの結晶とも言える戦闘機『美雷』を酷使することは、戦闘に立てる寿命を縮めてしまうことになる。

先の戦闘で失われた美雷は4機。錐揉み状態で墜落しつつもACSによる機体姿勢の補正と、パイロットの腕により日本の海域優勢の位置に不時着できたために、機体とパイロットを回収することができたためにこの数字に留まっているが、やはり連続使用と言うものは細かい整備が行えないだけに、異常の危険性が高まる。

考えても仕方がない。「問題が多すぎる」その一言に尽きるのだ。

「仕方ない寝るか」

部屋に戻ると、信じられない光景が待ち受けていた。

艦魂が居るのはデフォルトだが

「なんでここに居る」

そこに居たのは今井のウイングマン山城と神龍航空隊の福田、そして技術者の沖田であった。

本来ならば神龍から帝鳳に乗り移るには駆逐艦などを介さなければならぬが、機動艦隊に駆逐艦はない。

「お、お邪魔してます」

福田が弱々しくそう言うが、そんなことより目に入るのは高さ1mはあるうかという紙の束。それも1つではない。軽く10や20はある。

「福田と山城は構わないが、沖田・・・なんでお前もいんだよ。まあこの資料の束を見れば大方分かるが」

「じゃあ手伝いなさい、アンタの分もあるのよ。てゆうかなんであたしは居ちゃダメなのよ」

「何となく」

予想外の出来事に眠気も吹き飛んだ。

自分の仕事があるなら仕方がない。めんどくさがっても自分は帝鳳航空隊の隊長を務め、技術局関連でも仕事は山ほどある。更には機動戦艦、強襲揚陸艦兼空母5隻の全航空隊の人事も受け持っている。もちろん、細かいところは専門としているコンピュータが在るが、現場とトップが分離してしまうと混乱が生じる。そのためには現場にも意見を聞かねばならない。

「そつちの一番低いのが人事関連、一番高いのは技術局からの、そこからへんのも全部。あと今後の行程表」

沖田に言われるまでもなく、人事の資料を手に取り次々とサインを書いていく。

確かに数は多いが空で培った眼を持つてすれば、資料を読むことなど造作もない。

「福田。わざわざ手伝ってもらって悪いな」

「いえ。私も勝手に上がってしまったてすいません「なんで遙ちゃんには言つて、俺にはありがとうの一言もないんスか？」

「山城、少し黙れ」

「煩いわよ」

沖田、今井のダブルパンチを食らいしよ氣る山城。それを見て慰めようとするが、あたふたする福田。

「ああ、もう！左右逆で読みにくいわね」

沖田は現在（1945年）の文の向きと、読み慣れた22世紀の文の向きの違いにイライラして、自分の目の前の資料を薙ぎ払う。

「仕方ねーだろ。てか、読み難いからって散らかすな」

「こっち終わりましたよお」

「じゃあ次そっちの頼む」

「まだやるんスかあ？」

「福田、こっちのと沖田の分の資料もハンコだけ捺して行ってくれ。目は通した」

「分かりました」

「山城、サボるな」

「なんで分かるの!？」

「(今井さん、やけに饒舌だけど、どうしたの?)」

福田は普段の今井とは違う姿を見て、沖田に小声で素朴な疑問をぶつけた。

「(さあ?そもそも話すこと自体が恥ずかしいっていうような性格じゃないからね)」

「(じゃあ何でいつも人と話そうとしないのかな)」

「(男は背中では語るもんとか思ってるんじゃないの?ナルシストだし)」

「(もっと話せばいいのに……。強いし賢いしカッコいいって評判なのに)」

「(ナニ? 遙、今井のこと好きなの!? やめときなさいって)」

「ち、違います!」

「ちょっと遙、声大きい」

「あ、ごめんなさい。(そうじゃなくて、ただいつも周りに無関心
って言うか・・・)」

「(よーするに気になるわけね)」

沖田は福田のことを横目で見ながら「それが好きってことなんじゃないの?」と思っていたが、敢えて口には出さなかった。それに彼女自身の性格も考えればまだ恋愛感情とは言い難いものであることは沖田自身も分かっていた。

「(まあ、こっちに来たことで何か感じるものでもあったんじゃないの?)」

確かに、スポーツにおいて海外に行くことは世界とのあらゆる違いにシヨックを受けるもので、それに近い経験をしたことと、今井らが生まれたころは第3次世界大戦ともいえるような争いにあふれた世界であったために、そこから解放されたことで薄れていた感情を取り戻すことができたのかもしれない。

沖田は心理学は良く分らないが、人として良い傾向にあることは間違いない。

第55章 増援Ⅱ 苦悩（後書き）

沖田「ずいぶん遅かったわね」

アマネ「どうも週6日制は辛いのと、話が思い浮かばないんでね」

沖田「ただの言い訳にしか聞こえないわよ」

アマネ「もつとも、それは自分が一番分かってるつもりなだけだね」

玲「また出番ないし」

アマネ「玲さんを登場させようとしたらツンデレキャラになったから却下した。伊東先生の大和みたいにしたいんだけどね」

玲「本当!?!」

アマネ「俺に出来るかと聞かれれば（・×・）ムリだな」

玲「全く当てにならないんだから」

沖田「ところで遙とのフラグはどーするのよ」

アマネ「モチロン破壊する。今井とくつつけるつもりはない」

玲「だから今回は居ないのね」

アマネ「そのとーり」

沖田「それにしてもこんなにフラグ立ってんのに壊すって、アンタの脳内どうなってんのよ」

アマネ「それは僕も知らん。次回は2カ月以内に更新出来たらいいなあと思ってます」

第56章 増強と戦略

「これで最後だ」

今井はそう言って書類の束を机の上に乗せた。

「ちょっと休憩しましょうよ」

何時間もぶつ通しで書類に判子を捺し続けた山城が音を上げた。福田も大丈夫と入っているが、さっきから手を止めることが多い。ついている。

「休みたきゃ休め。俺は続ける」

自分の性格は自分が良く分かっている。ここで辞めると次に始めるのがいつになるか分からない。

「遙ちゃんも一緒に休もー」

「いえ、私はもう少し手伝います」

「遙、休んだ方がいいわよ」

「そう言う沙紀ちゃんだって……」

「いや、福田も休め」

今井と沖田、2人の上官にそう促され福田も休むことにした。

「それにしてもアンタにしては良く続けるわね」

「俺にしては、は余計だ。出来る間にやる方がまだ。どうせまた増える」

サインと判子。2つの作業をこなしながら長つたらしい文章を読まなければならぬ。流石に疲れが出てくる。こんなときに左手でも文字が書ければ、と思うができないモノはできない。

「今井さん、沙紀ちゃん。お茶、いりませんか？」

「ありがとうございます。貰うわ」

「ああ、助かる」

千早准将の補佐を務めているからか、気を配れるところは本当に助かるな。と思いつながら淹れてくれた紅茶を飲む。

自分で買ってきた茶葉であるために非常に落ち着く。美味しいものに妥協はしないが、茶葉の種類や淹れ方を覚える暇がなかったために、店主にブレンドしてもらい一番おいしい淹れ方のメモももらった。

「これ何かしら？」

そう言った沖田の手に合ったのは1枚の写真。写っているのは不機嫌な顔をした女の子であった。

今井もそれを覗き込んで見ると

「……!?!?」

平静を装いつつも内心では非常に焦った。

その写真の女の子は女の子ではなく、女装した今井自身であった。いや正確には女装させられたと言った方が正しいのであるが。

今井はそれをひったくるように獲ると、部屋から逃げだそうとするが自分は部屋の奥に居たために沖田と山城が邪魔になって逃げ出せない。

「へえーアンタソーゆー趣味あつたんだあ」

「んなことあるか！無理やり着せられたんだよ」

着せようとしたのは山城と、今井が毛嫌いしている秋元である。

秋元は現在陸軍に所属しているが、元々海軍の出であったために顔を知っている。確かに旧時代的な考え方をするが決して馬鹿と言っただけではなく、むしろ総合的な成績なら今井、山城に勝るとも劣らないものであった。

取りあえず、そんな戦略家の秋元の策略と山城の悪ノリによって女装させられたというわけである。

「でも似合っていましたよ。目付きさえ直せば十分女の子で通用しますって」

「そういえば、コレ。着せたのお前だったよな？」

「ソーでしたっけ？」

今井は山城に詰め寄ると、山城は目をそらしながら惚けようとするが、それも虚しく。

「嫌なこと思い出させやがって……」

手元の書類で山城の頭をぶん殴ったのであった。

「イッテえ」

「お前が悪い」

「でも、似合ってますよ？」

「福田、変なことと言わない方が身のためだ」

「そうそう、変態趣味なやつにそんなこと言ったら調子に乗るだけなんだから」

福田がフォローのつもりで言ったが、むしろ逆効果であり、更に沖田が要らないことを言い出す始末。

「誰が変態趣味だ」

「アンタ以外に誰がいるの？」

「俺の趣味じゃない」

「まあまあ夫婦喧嘩はそこらへんにして」

山城が冗談交じりでそんなことを言うが、当事者にとっては冗談ではない。

「誰が夫婦だ（なのよ）！」

「お似合いだと思いますけど……」

見事にハモった

「遥でもそんなこと言ったら許さないわよ？」

と、沖田は黒い笑みを浮かべながら福田の方を見る。

「ところでなんで今更こんなもんが出てきたんスかね？」

「んなの秋元の嫌がらせに決まってるだろ」

半ば呆れ気味に言うが、思い出しただけでも腹が立っていた。それに何より、女の子の格好をさせられたことは屈辱である。

「ああ、なんて言うか。暇なんスかね？」

「だろうな」

今井は嫌なことこれ以上思い出したくないと、次の書類に手を伸ばした。

「もうあなたの分はないわよ」

無駄口叩きながらも手を動かし続けたために、全ての書類に目を通していた。仕事が片付いたと思うと、流石に疲れがはっきりとしてふいに眠気に襲われた。

「悪い、寝るから後は自分の部屋でやってく……」

言い終わる前に今井はベッドに倒れ込んだ。

自分が思っている以上に疲れていたらしい。それも当然だろう、山のようにあつた資料に目を走らせ、更に内容を理解する。

集中したぶん反動が大きかったのだ。

満州国・ソ連国境地域

ウスリー川を挟み、東北軍とソ連軍のにらみ合いが続いていた。

今年に入り小規模な空戦は20回以上、航空隊同士の戦闘も2回は行った。極東司令部がおかれる虎頭要塞とは違い、前線基地には未だ隼等の旧型機が残っている。一度、前線基地を経由した上での大規模な航空作戦が立案され、雷薙・屠龍など足の長い双発機を主力とする新鋭機が駆り出されたが、決定打とはならなかった。

軍令部としては欧州方面で独伊が息を吹き返してる今のうちにハバロフスク以南の沿海州を占領した上で、チタ攻略の先駆けとしたいものであった。

シベリア鉄道は空襲により破壊したが、再建したのか沿海州の兵力が減る様子はない。

「参謀長、やはり陸戦による大規模な反攻作戦しかないかね」

「はい、シベリア鉄道の再建が予想以上に早くこれ以上の空襲はこちらにとって不利かと……」

「一式戦車の方は用途がつきそつだ。海軍さんから輸送の援助を申し出てきた。3月半ばには100輛、いや150輛は使えるようだが」

「それでもやはりこちらの不利は変わりません。敵のT-34は75mm砲を搭載しており速力もあり、小型軽量なため小回りも利くと聞きます」

「なるほど。だが陸戦隊と空母の航空隊も参加すると聞けばどうかね。私はそのジェット機に大いに期待しとるワケだが」

「ジェット機ですか。火龍に比べ優れているのは確かでしょうが、それほどのものなのでしょうか？」

「話によるとそのジェット機は火龍の3倍以上で飛べるそつだ。爆弾の量もこの前現れたTu-4以上のものらしい」

「どの戦闘機より速く、爆撃機以上の火力ですか……。と言つことは空襲の後に戦車を先頭に機械化部隊での占領作戦と言つわけですね。航空隊の攻撃の合間を縫つて、重砲で砲撃を加えましょうか」

「ああ、作戦は任せたよ」

「すぐさま虎頭要塞最大の榴弾砲、試製四十一糎榴弾砲が移動させられ、同様に九〇式二十四糎列車加農も移動することとなった。

移動するに当たり、列車砲のままでは線路がないと不便だと言つこととで台座を鉄道車両ではなく、固定式のものとし、台車に乗せチハを牽引者として使用した。もちろん1輛ではどうにもならないため何台も使われたわけであるが。」

大口徑砲2門でどうこうという問題ではないが、散発的に使用することで「飛んでくるかもしれない」と疑心暗鬼にすることで再建を遅らせ、同時に恐怖心を煽るようにする目的がある。

特に四十一糎砲は陸軍が誇る最大の砲であり、艦砲と同等の威力を持つ。ソ連兵に艦砲射撃を受けた経験があるものが幾らいるかは分からないが、これ程巨大な砲は世界最大の陸軍力のソ連軍も持たない。

巨大な砲と言えばドイツ軍はグスタフ・ドーラの80cm砲や、アメリカのリトル・デーヴィッド砲の36インチ(914mm)などがあり、ドイツは実際にセヴァストポリ要塞攻略戦やスターリングラード攻防戦で数回使用したが、そちらと戦っている兵士は極東にはいない。その点を考えれば大口徑砲による攻撃は十分に威力を発揮できるだろう。

第56章 増強と戦略（後書き）

アマネ「なでしこジャパン、優勝おめでとう！！」

玲「おめでと」

アマネ「いやぁ徹夜したかいあつたな」

玲「でもあんた、興味あつたの？」

アマネ「それ言っちゃダメだしよ。でも自分の出身地からたくさん選手出てるのに見ないわけにはいかないよね」

玲「それって後から知つたでしょ」

アマネ「まあね……（；）でもいいじゃん。努力してそれが実るって！マスゴミは奇跡奇跡って騒いでるけど、僕はそうは思わないね。彼女らが不遇な中でも一生懸命練習してきたことは事実だs(ry」

玲「グダグダ言ってるんで、次の更新はいつになるの？」

アマネ「恐らく8月中。でも課題多いんだよなあ」

玲「どうせやらないでしょ」

アマネ「うつ……痛いところを突いてくる……。話変えるけどさ、今年ヤクルトやってくれるんじゃないかね？めっちゃ期待してるぜお」

玲「アンタの地域って……」

アマネ「オリックスか虎だね。うん」

玲「地元のチーム応援しなさいよ」

アマネ「断る！だって阪神弱いし。鳥谷以外好きな選手いないし」

玲「ヤクルトに好きな選手いないでしょ」

アマネ「うん……でも巨人の内海とか、中日の岩瀬、あと楽天のマー君も好きだ」

玲「鳥谷選手以外、ピッチャーしかいないのは突っ込んじゃダメなの？」

アマネ「昔なら広島のスーツとか好きだったんだけどなあ。最近見てないから」

玲「引きこもってるわりにそーゆーの見るわけなんだ」

アマネ「失敬な。アニメなんて見るのは中学生までだよ？」

玲「疑問形じゃない」

アマネ「いやあ夏目友人帳やってるから見ないとね。アイマスは口ポット系期待してたのになあ」

玲「最近も他のやつ見てたよね」

アマネ「アマガミ……」（小声）「

玲「うわぁ、正直じくかも……」

アマネ「んなこと言っても面白いじゃん。主人公がちょっとヘタレで変態つて、現実味あると思わない？」

玲「言われて見ればそうかも」

アマネ「あーゆーのは嫌味がなくて好きなんだよなあ。まあ人間嫌いだから俺には無理だけどね」

玲「でしょうね。そもそも友達いないんだし」

アマネ「That's right. 弁解の余地はないよww」

玲「壊れた？」

アマネ「コレが平常運転」

玲「イタいわね」

アマネ「（……）（シヨボーン）」

玲「バレンタインとかクリスマスとかどういう過ごし方してるのか疑問ね」

アマネ「バレンタインは義理チョコ2・3個貰える。クリスマスは図書館で勉強しようとしたら人であふれてた。8割は男性」

玲「うわぁ……………」

アマネ「ヒくわ〜」

玲「人のセリフとらないでよ」

アマネ「それが主人公属性かもよ？セリフとられる＝空気でしょ？
アツカリ〜ン みたいに」

gdgdなのでそろそろ強制終了掛けますよ

あっかり〜ん が分からない人は

まあ……………

ググってください

第57章 狼と白頭の鷲（前書き）

できちゃったからさっそく投下しちゃいますよお
思い付きが半分
予定の前倒しだったりもする

第57章 狼と白頭の鷲

AIP（非大気依存）推進を補助動力に用いた新型Uボートを就役させたドイツ海軍は水中速力12ktと言う高速を活かした作戦で沿岸警備を完全なものとした。これにより従来型のUボートは遠洋作戦に駆り出され、地中海及び北大西洋にまで勢力拡大を始めた。

無論、連合国側も指をくわえて見ているだけでなく対抗策を練り出した。

ソナーはもちろんヘッジホッグと言う投射型の機雷は存在したが、従来型のようにあらかじめ爆発深度を決めるのではなく、VT信管同様潜水艦から反射してくる音を探知し爆発する近接信管を採用している。

それでもUボートの優位は揺らぐことがなく、アメリカ海軍は大西洋からUボートを一掃するストーム作戦を立案、発動を決定した。このストーム作戦は対独戦において必要不可欠なもので、全海軍力を注いで実行する以上太平洋が安泰であることは絶対なのである。そのため、1度しか実行できないために失敗は許されない。

広大な大西洋において制海権をいかに確保し、Uボートの位置を特定するかは哨戒半径の広さによってきまる。故に低速性能に優れ、そこそこ航続距離の長い武装が可能なソードフィッシュ雷撃機を大量に購入し、軽空母に乗せることで対潜作戦の中核とした。

対潜空母の存在は二次大戦後に実際に確立されたもので、海上自衛隊も航空母艦建造構想という対潜作戦における中核として空母の保有が考えられたこともあった。

現在ではひゅうが型護衛艦として形になっている。

そしてここ、ジブラルタル海峡は地中海と大西洋を結ぶ重要な拠点となるため南大西洋から進出したアメリカ海軍はここに戦力を集中させた。既に120隻を超える艦艇のうち、駆逐艦は2隻でペアとした哨戒行動に移っていた。一方で対潜空母を中心とした輪形陣を形成し盛んにソードフィッシュ雷撃機を飛ばしていた。

ドイツ海軍UボートXXIB型U2601

「艦長、敵・・駆逐艦と思われるスクリュー音複数」

ソナー員が耳に当てたヘッドフォンから聞こえるキャビテーション（スクリューを回した際に生じる気泡がつぶれる音）に気づき、艦長に告げる。艦長はヴィレンブロック少佐。

水中を潜望鏡深度で航行していたU2601は潜望鏡をあげ、ヴィレンブロックは覗きこんだ。

彼の眼に映り込んだのは2隻でペアを組む駆逐艦であった。

「バークレイ級か・・・。潜望鏡下げ、急速潜航！」

「ベント全開」

「ダウントリム30」

比較的小さな船体のUボート艦内では伝声管などと言う場所をとるものは使わず無線となっており、すぐさま潜航を始める。

「深度100」

「トリム戻せ」

艦首を下にしていた艦体は、後部バラストタンクに注水すると慣性で艦首が若干上方を向き、やがて水平となった。バークレイ級駆逐艦はこちらを見失わないように探信音ヒンガーを打ち続けており、それが艦体を反射して独特の音を鳴らし、艦内に響いた。

「微速前進。ソナー員、敵位置は？」

「本艦直上。・・・爆雷来ます」

「全速前進！前部タンクブロー、アップトリム40」

艦体前部のバラストタンクに空気が入り、海水が吐き出される。密度の違いで浮力を得て船が傾き、徐々にその角度は大きくなっていく。何かに掴まらなければ倒れてしまうが、前線から離れて長かったのと緊張と恐怖心でそれを忘れていたようだった。慌てて海図台の縁を掴んだ。

副長も他の兵員も皆、自分が掴まる前に近くのを掴んでいた。そんなことを考えながらも次にどう動くか、相手がどのような作戦で来るのか、頭では冷静に考えることができている。

アクティブ・ソナーの探信音ヒンガーなのか、何かが艦体に反射してカーンと言っ音を立てる。

爆雷と言うものは基本的に潜水艦と同深度もしくは潜水艦より下で爆発するようになってる。なぜなら、爆発のエネルギーは水圧の影響で真上に行くからである。

U2601は爆雷の被害を避けるべく投射された位置からすぐさま離脱しようとしたが、そこで奇妙なことが起こった。爆雷が艦体に触れる音がするや否や爆発したのである。

ヴィレンブロック自身サブマリナーとしてベテランであるため、敵の裏をかいたつもりであった。何より、圧壊深度が深いこの新型Uボートは従来型に比べて無茶な操艦にも耐えられる。故に100mまで一気に潜った。爆発音の後、各所より被害報告が入る。

「燃料槽破損！」

「魚雷はまだ生きているな？ソナー員敵艦位置を報告しろ。これより前部発射管より魚雷攻撃を行う。その後更に浮上、第2波を掛ける！」

「敵艦、本艦後方！」

「バッテリー室は被害ありません」

「1番より4番発射管注水。30度ずつ角度をつけて雷撃だ」

「了解」

U2601は直ちに転舵。魚雷発射管の扉を開く。

バークレイ級の艦長2人は攻撃後、ソナーが使えるよう10ktで航行し続けていたが、一向にして圧壊音が聞こえないため、ジグザグ航行に切り替えていた。

ヴィレンブロックは再び潜望鏡を覗き込み、駆逐艦の位置を確認する。

「1番発射！・・・2番発射・・・」

確実に30度の開きを与えながら雷撃を行う。音響誘導魚雷は積ん

でないため、命中率は著しく低い。扇状攻撃は命中率の低さを補う方法である。

「第2波攻撃準備！」

「魚雷命中。1発です」

「よし、1、2番発射管のみを使用する。」

「1番2番発射管注水完了。いつでも行けます」

潜望鏡をぐるりと一周させる途中、スクリューがやられたのか、停止した駆逐艦が眼にはいった。もう1隻は転舵してこちらに向かっ
てきている。

「好都合だ。よし、進路そのまま。Feuer！」

アイピースに顔を押し当て、戦果を確認する。

第2波は半ば当てずっぽうだ。当たることは期待していない。

「4から6番発射管注水！第3波を掛ける」

side バークレイ級駆逐艦

「右舷より浸水！」

「左舷注水！復元しろ。ダメコンは浸水を食い止める」

注水すれば速度は落ちるが、傾いたままだと横転・沈没する可能性がある。艦長は止む無く注水を命じた。

「艦速はどうだ？」

「22から24ktが限界です」

「十分だ。ソナー員、探知を続ける」

バークレイ級は艦体を揺らしながらUボートがいる位置まで出来る限りの速力で突貫する。もちろん、時間の機関音のせいで探知能力は大幅に落ちる。しかし2度にわたる攻撃と先ほどの探知でおおよその位置は分かる。

潜望鏡を出していればすぐにでも攻撃に移れるのだが、敵も慎重なのか中々尻尾を現さない。

そのためこちらの攻撃機会はまだ1度だけである。恐らく向こうはあと2、3度行えるだろう。

「畜生め。ジャガイモ頭が調子乗りやがって」

艦長は思わず毒を吐いたが、その怒りをぶつけるべき相手がちょこまかと逃げ回り、余計に怒りが増す。

Silent Service（潜水艦戦力）の恐ろしさ、と言うより群狼作戦を駆使した第一次世界大戦中のUボートと違い、単艦でもここまでの能力を発揮する。

目に見えるヤマト・ムサシそしてフリーク（機動戦艦）と違いこちらの方が恐ろしいのではないかと考えてしまう。目に見えない恐怖と言うものは人間の本能である。

「ヘッジホッグを使う、ソナーも使えるように速度を落とせ」

「了解」

V T信管付きの爆雷で仕留められなかった、ならば史実で脅威となつたヘッジホッグにV T信管が付けばどうなるのか。恐らく、今までのUボートなら仕留めるのはより容易くなつただろう。しかし、このU2601は違う。水中速力は15ktと言うこの時代では完全に規格外である。

side U2601

「機関停止。艦内無音を保て」

水と言うものは良く音を伝える。艦内でのわずかな音が外に漏れればソナーに音を拾われる可能性がある。潜水艦と言うものは安価で強力、そして頑丈なように思われるが、ひとたび外に出れば狩る側にも狩られる側にもなる繊細な兵器なのである。音だけでなく、艦の水平を保つのに中の人間の位置さえ重要なのだ。

コーンコーンという、探信音が聞こえ見つかるのではないかと艦内に緊張が走る。

ソナー員は相変わらず耳にヘッドフォンを当てたままである。こちららは100m以上潜っているため、キャビテーションは発生しないが、それでも機関音などが探知される可能性がある。

「魚雷発射管扉開け」

「ソナー員敵位置は分かるか？」

「本艦前方、真っ直ぐこちらに向かってきています」

「角度を30度ずつ開いて再び扇状攻撃だ。全ての発射管を使うぞ・
・・・撃てえ!!」

第57章 狼と白頭の鷲（後書き）

アマネ「入江選手、背泳ぎ銅メダルだってね。おめでたいニュースが多いな」

今井「中国では鉄道爆発したしな」

アマネ「遺族の方は可哀想だけど、本音を言つとめっちゃ嬉しい。JR東日本の新幹線のパクリ&アニメのパクリ疑惑のすぐ後だからね」

今井「羽根なし扇風機もパクリ製品あっただろ」

アマネ「あれも爆発するんじゃないかね？てか中国の鉄道に付いた名前が世界最速の棺桶って。センスにあふれてるね」

今井「ところでおめでたい話題どこ行つた」

アマネ「そうだねえ。世界水泳見てないしなあ。未だに録画した女子W杯見てるぐらいだし……」

今井「どんだけ好きなんだよ」

アマネ「いやサッカーは嫌いだよ。学校の体育で3回も顔面に当てられたし」

今井「ある意味才能だな」

アマネ「うるせーよ。それよりも高校あがって夏期課題多いなあ。

美術館の鑑賞文とかめんどいんですけど」

今井「一昨年ならルーブル美術館ので書けたのにな」

アマネ「今年は京都市立美術館？でフェルメールか誰かのやつやってるよな」

今井「あれだろ？美術の教科書に乗ってる」

アマネ「見て見るとすげーとは思っけど、実際価値ってわからんしなあ。去年も校外学習で四国の美術館言ったけど、ミケランジェロの最後の審判以外特に興味もてるやつなかったしな」

今井「お前にとって、あにめいととかの方が価値あるだろ」

アマネ「ああ、うん。夢幻の軍艦大和が全巻揃ってるの近くじゃあそこだけだからね」

今井「9巻から14巻とか読む気あんのかよ。沈黙の艦隊も16巻中12巻しか読んでないだろ」

アマネ「ダイジョーブ。ハガレンなんて1巻と25巻しか持ってないから」

今井「ふざけてるのか？」

ただの雑談コーナーと化してしまっただけど、気にしないでください。次は8月半ばまでに更新出来ればなあと思ってます
てか……不定期更新にもほどがあるだろ

って自分で突っ込んでうぐらい不定期なんですけどね

ちなみに双頭の鷲はロシアの象徴でした。訂正します

第58章 白と黒と灰色（前書き）

遅くなつてすいません

予想以上にアイデアが浮かばなかったために、更新できませんでした
その場の思いつきで書いたりしている分、話が飛躍したりしています
ですが、どうかご容赦ください。

第58章 白と黒と灰色

真つ直ぐ向かってくる敵駆逐艦に対し雷撃準備を行う。艦長の指示に従って魚雷発射管の扉を開き、発射管に注水すると、発射準備完了のランプが緑に点灯する。

水雷員がヴェレンブロックの号令と共に発射のボタンを押し、ランプが緑から赤に変わる。

しばらくの沈黙の後、ソナー員が懐中時計で確認しながら命中までカウントする。

「・・・3 / 2 / 1。外れました。次・・・命中！」

6発の魚雷のうち2発の爆発音が響き、その後に数度の爆発音が続いた。駆逐艦に搭載されていた燃料若しくは弾薬に引火したのだから。ソナー員が圧壊音を確認し、艦内が一瞬沸き上がる。

その小さな歓声の後に、再びの静寂が訪れる。

「浮上後、浮かんでいる乗組員を銃撃。処分する」

非情な命令だが、戦争のセオリーとしては正しい。

敵の人的資源を減らすことは理にかなっているからだ。その者が熟練の兵士であればなおさらである。

ただし、この行為は人道に背くため戦後処理で大きな傷跡として残る。

「メインタンクブロー。浮上する」

U2601は徐々に速度をあげながら浮上していく。かなり深く潜っていたため、圧縮空気タンクの残りの空気量が見る見るうちに少

なくなっていく。

「ハッチ開け」

ラッタルの真下にいた乗組員がハンドルを回し、水密扉を開く。

ラッタルを上り、海面を見下ろすと重油と船の残骸焼け焦げた肉片と思しき物体などが浮かんでいた。いや、爆発に巻き込まれた駆逐艦の乗組員の躰で間違いないだろう。その中に生きている乗組員がちらほら見える。

「撃て」

静かにそう命じるとヴィレンブロック自身も腰のホルダーから銃を取り、一人ひとり撃ち殺していった。

そして、戦いに敗れ、死んでいった兵士たちに敬意を表して敬礼をした。

「またか……」

「はい、ストーム作戦の発動から1週間がたつて投入された駆逐艦70隻のうち5隻が撃沈3隻が何らかの損傷を受けています。対してこちらの戦果は旧式のUボート4隻だけです」

「新型のUボートに関する情報は入ったのか？」

「いいえ、まだです。敵の乗組員からも情報を聞き出そうにも新型の情報は重要機密らしく、存在を知っていても性能まで知っている

者は居ないためはつきりしません。ただ、諜報部や遭遇した者による情報などで判断したモノがこちらです」

参謀が脇に抱えていた鞆から資料を取り出す。

「ふーむ。水中速力は書かれているが、水上ではどうなのだ？」

「水上航行中に遭遇した者が少なく、分からないと言っているところですよ」

「なるほど・・・な。しかし、20ktとは、いささか過剰ではないのかね？各国の潜水艦はおおよそ10kt以下だ。まあいい、各艦の艦長にも伝えてくれ。何か新しい手掛かりが掴めるかもしれないからな」

世界第3位の海軍力を誇る日本に対し、有効な手立てがないまま太平洋戦争を停戦させたはいいものの、本来陸軍国であるはずのドイツに大西洋の覇権を握られようとする中、こちらも解決策が見出せない。

もちろん、いくつか手は打った。

新しい爆雷と対潜作戦、そして優秀なソナー。それでも見えないUボートの前には無力である。

核爆雷。フォレストルの脳裏に原子爆弾の存在がよぎる。

既存の爆弾とは比べものにならない威力を誇る原子爆弾なら制海権を握るもの時間の問題になるだろう。しかし、フォレストル自身はこの爆弾の使用には賛同できなかった。

故に原子爆弾を使用しない戦略を立てたのだ。

「対潜魚雷の開発は進んでいるか？私はこいつに期待しているのだが」

潜水艦を相手取つての魚雷戦。今までなかった戦術である。

現在となつては当然のように語られるが、太平洋戦争当時は非常に稀なものであつた。それを魚雷の改革により実現しようと言つのだ。ドイツ軍も音響誘導魚雷は実用化していたが、ダミーの音源を用意することで簡単に逸らすことができたため、あまり有効な手とはならなかつた。

「はい、ただ誘導装置が大きすぎるため近接信管が装着できません」

「それなら問題ない。どちらにせよ当たればいいのだから。確かに向こうにはノウハウがあるが数の面ではこちらが有利なのだ。そもそも潜水艦と言うものは軍艦を沈めるためのものではないのだから、こちらに分があるのは言うまでもないだろう」

確かに、フォレストルの言うことは正しい。基本的に潜水艦の戦い方と言うのは目標を発見した後、水上航行で目標の前方に先回りした状態で攻撃を行うものである。そのためには目標の視野の外を大回りする必要があるため、一般的に相手の1.5倍の速力が必要とされる。軍艦を狙う際、巡航速度を16kt〜18ktと仮定すると必要な速力は24kt〜30ktとなる。Uボートの水上速力はおよそ20kt程度。つまり軍艦を相手にするには遅過ぎるのである。また相手に視野の外と言うことは哨戒半径及びレーダーの索敵半径の外を移動しなければならぬため、更に追いつくのが難しくなる。

「また魚雷自体も大きめになるため、潜水艦に搭載するのは難しいかと・・・」

「その点は仕方ない。新兵器に欠点は付き物だよ。装置の小型化なら技術者の仕事だ、我々軍人が入る余地などないのだよ。我々に必

要とされているのは一刻も早く大西洋からUボートの脅威を取り除くことなのだから」

そういうフォレストル自身、誘導魚雷の実用性がいか程のものか分からないために使い物になるかどうか実際に使わなければ何も言えないという現実にはライラしていた。しかしそれを表に出すわけにもいかないと言うのが自らの地位なのである。

世界大戦では性能や信頼性が実証されていない兵器が多数投入されたり開発されたりした。バンジヤンドラムやMe163コメートなどが良い例である。もちろんそれなりの結果を残すものもあれば、まったく期待外れのものもある。しかし戦局が膠着した際、それを打開するためにどうしても必要なのであった。

「ともかく、早急に対潜魚雷を実用化できなければ奴らに先を越されるぞ。ソナーの性能次第で^{デコイ}囷を無力化できるのだから」

参謀が出ていくとフォレストルは机を叩きたくなった。核爆雷の使用を推し進める軍上層部に対し、世界で初めて大量殺りく兵器を使用すると言う自らの倫理観に背く行為。合衆国は中立を貫くのではなかったのか。

ファシズムを悪と見なし、人々を殺すことが正義と言えるのか。

一人になるとそんなことを考えてしまう。フォレストルは頭を^{かぶり}振った。軍隊は国家の暴力装置である。政府の出した決断ならばそれに従わなければならない。大統領の出した決断こそが正しい。そう副大統領の反対がない限り。

しかし、ローズヴェルトは副大統領にマンハッタン計画の存在を示していない。これでは日本やドイツと同じではないか。独裁者と大差ないではないか。

そんな葛藤がフォレストルの中でくりかえされる。

レインボウ・ノアの文字が目に入る。12隻の超大型空母建造計画、

そしてかつての7つの海を統べる海軍の創設への先駆けである。大義を抱え、世界をアメリカの下に置くことで自らを正当化しようと言うのだ。だがその計画も日本に敗れたことにより水泡に帰そうとしていた。レインボウ・ノアは機動戦艦フリックに敵わない。それにむしろ、アメリカの一国支配が望ましいとは思えないのだ。力による支配はいずれ崩壊する。ローマ帝国しかり、蒙古しかり・・。歴史が証明しているのだ。

「一体何をお望みなのですか、大統領」

フォレストルの悩みは誰も聞くことはなかった。

第58章 白と黒と灰色（後書き）

幾ら文献を読んだところで人々の内心と言うものは読めないモノです
ね

今回はUボート戦略によって少しずつ露わになった本心を書ければ
いいかな、と思い書きました

世界を戦争へと巻き込んだローズヴェルトと、価値観？の違いから
最後まで悩み続け、うつ病になったフォレストル。この2人を白と
黒、正義と悪に見立てて話を書いてみました。2項対立的に書くの
は簡単だと現代国語の教師に教わったもので書きましたが、世界は
そんな単純じゃないですよねww

終戦記念日に投稿する予定だったのですが、前書きに述べたのと帰
省していたので投稿が遅くなりました。すみません
あと、今回は下らない雑談はありません

もし楽しみにしていた方がいらっしやいましたら、こちらもすいま
せん

ご意見感想お待ちしています

第59章 無双(前書き)

今回もいつも通り説明調で平常運転中です

第59章 無双

5月9日

前日の雨雲から抜けると、高い空とまだ暖かいと言うには程遠い太陽が不格好なゲルで埋め尽くされた草原を照らす。

その付近にはまたもやこの草原には不釣り合いな鉄の塊が多数見える。ソ連軍の誇る大量の重砲及びT-34中戦車。そしてチハ、1式中戦車改。

1式中戦車は一度手をくわえられてからマイナーチェンジを繰り返して、何とか列強の陸軍と並ぶ程度の能力を手に入れた。

陸軍第一機甲師団は恐らく世界初の近代化仕様の機甲部隊だろう。戦車の装弾はトーションバー方式、最高速度80km（整地）ほかHEAT弾と呼ばれる類いの砲弾。75mmライフル砲を備えているがそれ以上の攻撃力を持ち、増加装甲もある。更に自走砲も多数、今で言う歩兵戦闘車のほかにも輸送トラックがあり、夜間戦闘能力を有し非常に優秀な無線も積んでいる。

一一三〇

低い爆発音と地響き

が、日本軍陣地に降り注ぐ。ソヴィエト軍自慢の重砲による砲撃である。

先日の大敗北から断続的に行われた陸海空軍の爆撃により、復旧しようにも進まないシベリア鉄道とトーチカ。そして数もなかなか揃わない戦車の他自走砲・ロケット砲など……

日本側は敵の通信を傍受し、攻撃予定日を正確に把握していた。相

手はスターリンに尻を叩かれる形で攻撃を余儀なくされたに過ぎないため、真正面からぶつかっても勝ち目はあるだろう。だが佐藤幸徳はそれを良しとしなかった。人命の尊さゆえである。否、正確には貴重な戦力をみすみす失いたくなかったための合理的選択ともいえる。

彼の本心はともかく、ソ連軍を追い詰めるにはなるべく多くの戦力が必要になる。兵器の質や兵士の士気はもちろんであるが、何より数には数で対応しなければならぬ面も出てくる。

「始まったか……。こちら反撃、と行きたいが準備はできているか？」

「はい、問題ありません」

参謀長の顔はやや紅潮している。緊張と興奮が入り混じっているからだ。

「砲撃開始。」

「砲撃開始！繰り返す、砲撃開始い！！」

佐藤の命令がくだされ、平原の中にも巧妙に隠された自走砲が火を噴いた。

15cm自走砲の初速は980m/sおよそM2.88。無論水平撃ちつまり零距离射撃ではなく曲射での砲撃のため、こちらの位置が割り出される危険がある。それは向こうも同じ。それどころかトーチカなどは爆撃によって剥き出しになっており、空から観測すれば丸見えである。

弾着を確認し、修正する。戦車はまだ出てこない。戦車相手では自

走砲は不利である。なぜなら自走砲の使用用途は低位置に留まり長距離の敵を多数の砲弾を短時間で投射することであり、装甲などは無きに等しい。

ならば目には目を、戦車には戦車を、だ。

「そろそろ来るころかな？」

佐藤は呟いた。双眼鏡を手にして覗きこむ。地平線にはT-34が見える。恐らく体パンター用のT-34/85も交じっているだろう。

S i d e

狭い車内のなか無線もない状況下で、運転士は前方の戦車についていくのに必死であった。砲塔は低く、居住性は劣悪。それがソ連軍の主力戦車、T-34の実態であった。

オペレーション・ヤポン・バルバロッサ。それが日本軍の侵攻作戦のソ連国内での呼称である。

「前方敵戦車多数！！」

照準器やペリスコープの精度は低く、アテにできない。コマンダーキューポラは一部の戦車にしか搭載されておらず、単一種でありながら連携が取れないと言う史実日本軍の弱点がそのまま体现されていた。

距離はおよそ1200mにまで迫ったが、この距離では命中は難し

い。戦車長は仕方なくキューポラから頭を出し、首から下げた双眼鏡でおおよその距離を測っていた。すると、日本戦車の砲身から火炎が閃いた。

当たるわけがないと高を括っていたが、日本戦車の照準はジャイロ式砲身安定装置の能力も相まって、非常に優秀なものとなっていた。それだけではない。75mm砲はT-34を相手にするには分が悪いのだが、HESH弾の使用により、敵戦車の装甲をホプキンソン効果により剥離させることができるのだ。現代のような複合装甲が用いられていない以上、HESH弾は非常に有効なのである。

前方の戦車が撃破され、戦車長は一瞬頭の後ろがすつつと冷たくなる感覚がしたが、すぐさま我に帰り車内の砲手に撃ちかえせと命令を下した。当たる確率は低いながらもしなりました。この距離なら届くことは分かっているのだから。

Side Japanese Armoured Division

アウトレンジ戦術。

それが彼らの戦術であった。戦車と潜水艦を優勢な間は強力な兵器となるが、同時に鉄の棺桶とも呼ばれることもある。つまり、当たればすぐさま死が確定するのだ。

一式戦車改は複合装甲を採用しているが、その防御力を体験してはいない。当たらないように早く敵を撃破するか。それが生き残るための方法である。

戦車だけで事足りるのではないだろうか、そう思った瞬間だった。敵が撃ち返してきた。照準はいまいち良くないが、なるほど確かに高射砲を転用しただけあって射程自体は同程度のようにだ。

しかし、こちらの目的は迎撃作戦ではなく侵攻にある。そのための楔形隊形による戦車戦を行っている。敢えて後の先を取ったのは有

利な交戦角度、つまり敵に対する自軍の角度をとり突破点を正確に捉える事ができるからだ。

正面を向いて進むこちらに対して相手が斜め方向にこちらを捉えることになれば、端の戦車から撃破できる。また、敵の両翼は中央よりも突破しやすい。

「進めえ!!」

戦車長が叫ぶ。ただっ広い草原に無限軌道の後が残る。

横列隊形相手に全速の楔形で突っ込んでいく様は古代ギリシアのフアランクスを彷彿させる。

しかし、ペルシア戦争と違い、人と人の戦いではなく兵器対兵器。数の上では劣っていても士気及び質では圧倒的に日本軍が有利である。

再び古代ギリシアを例に出すが、自らの信念のために戦う重装歩兵と、金のために戦う傭兵では士気が違うことは明白だろう。事実、ペルシア戦争では重装歩兵が活躍したためにマラトンの戦いではギリシア軍が少数ながらも勝利を収め、ペロポネソス戦争以降のアテネの墮落ぶりに表れている。

また、いつの時代も勝利に欠かせないものとなって来るのは兵器の質である。青銅器に対する鉄器もしく、零戦に対するF6Fもしくりである。

兵器の質、量、そして兵員の士気、戦術、戦略。何れかが欠けるとそこは弱点となり、敗因となる。

そして士気を保つのに最も効率的な方法はやはり勝つこと以外にないだろう。

一式戦車改は無線と練度を頼りに楔形隊形を維持しつつ、日本軍から見て左翼側の戦車が発砲を続ける。右翼側も参加したいところだ

が、むやみに撃てば同士撃ちとなり後方の車両まで停止する羽目になり、ソ連戦車の言的になつてしまふ。200輜少しというわずかな戦力ながらも作戦通りうまくいっているためにじわじわとその数の劣勢を埋めつつあつた。

Side

「航空支援を要請しろ！爆撃機はなくてもシュツルモビークは残っているだろう！？」

「既に何度も要請していますが、返答がありません」

重砲は先だつての砲戦で消耗しており、撃とうにも弾薬が残っていない。重砲は力なりとは何だつたのだろうか、ソ連の陸軍力の源が断たれてしまつては、残る戦略は人海戦術。肉薄攻撃のほかあるまい。しかしその攻撃を得意とする日本軍相手にその手が通用するものか。

それでも決断しなければならぬのが彼の役目であつた。撤退という答えはない。その瞬間、政治将校の餌食になる。軍人たるもの味方に撃たれて死ぬなどと言うことはしたくない。

「突撃い！！」

それが結論だつた。

モロトフカクテルは持っていないが、数の優勢が残っている間に行わねば勝ち目はない。せめて刺し違えてでも日本軍の進撃を止めてやる。そう決意した。

まるでノモンハンの戦いの逆転であつた。

日本側にとって、この作戦は十分予想できたことであつたが、やはり実戦となると損害は避けられない。いかに早く攻撃の芽を摘んで反撃の手がかりとするか。出された答えは先の先を取ること。戦車ごと撃てばいい。

車載機銃は12・7mm砲が1門。主砲動軸に7・7mm砲が1門のみではなかなか厳しいだろう。機甲師団などと勇ましく名乗ってはいるが、実際の戦力はまだまだ少ない。主戦力の戦車の数すら揃っていないのだから仕方がないのだが。兎にも角にも歩兵部隊を食い止めるには今ここに居る戦車部隊でどうにかするしかない。敵に支援はないことは分かっている。既に味方の戦爆連合が司令部に向かっている。

「ウラーー!!」

歩兵部隊が雄叫びをあげて突貫してくる。戦車長及び連隊長も思わず恐怖で凍りついた。死をも恐れぬ神風特攻。お株を奪われる形となったがそんなことを言ってる暇はない。すぐさま反撃するよう全軍に達した。

Side Japanese Armoured Division

ここで思わぬ兵器が活躍することとなる。97式中戦車、通称チ八である。この戦車は中戦車を名乗りながらも対戦車戦に対応していない旧式であるが、対歩兵戦を想定されて製造されたために実は歩兵戦闘車にうってつけなのである。主砲は機関砲とまではいかないが、48口径47mm砲1門、7・7mm機銃2門、12・7mm砲1門と言う重装備である。

この旧式戦車は敵歩兵部隊をなぎ倒していった。

第59章 無双（後書き）

アマネ「いやあ文化祭も終わったし、中間も終わったし、何か疲れ
たあ
」

今井「2カ月以内に更新したのはいいが、もう少し何とかならない
のか
」

玲「相変わらず私の出番ないし
」

アマネ「多分後何はかでネタ尽きるから出すかも
」

玲「いつもネタ切れでその場の思いつきじゃない
」

アマネ「どうでもいいけど玲さんの声がかぎゅで脳内変換される。
ツンデレじゃないって言うてんのに
」

今井「イメージとかあるのか？
」

アマネ「特にない・・・と思う。ただ秋元の声は石田さんだろうね
」

玲「釘宮さんじゃいけないの？（CV釘宮理恵で脳内変換よろしく）
」

アマネ「かぎゅ＝ツンデレの恒等式が成り立ってるから無理。俺ん
中で
」

今井「ハガレンのアルはどうなる
」

玲「そもそもなんでこの話題になったの？」

アマネ「その場の思いつき」

玲「（駄目だコイツ）」

アマネ「（うわぁ玲さんの心が荒んでるよ）」

今井「（何だこの重い空気）」

アマネ「全員黙って心の声でしゃべんなよ」

今井「お前がそうさせてるんだろ」

アマネ「That's right」.

玲「地味に英語しゃべるのやめなさいよ。英語分からない癖に」

アマネ「それは言っちゃダメだ。今回の中間も結果が悲惨だったとは分かっているさ」

今井「馬鹿だからな」

アマネ「俺よりバカな奴なんていくらでもいるさ。模試の結果も全国平均を大きく上回る結果だったからな」

今井「ドヤ顔ヤメロ。ついでに模試を受けた中にも底辺DQN高校とやらもいるんだろ」

アマネ「多分」

玲「全く当てにならないわね」

アマネ「グサア」

久々なんでグダグダ感MAXですが一応不定期更新ながらも2カ月1回ペースは最低でも保ちたいと思いますので今後ともよろしくお願ひします。あと感想とかもお待ちしてますよお

第60章 低空優攻(前書き)

1ヶ月以内に投稿できるって素晴らしいね!

第60章 低空優攻

「進め進めえ！！」

チハの戦車長は叫んだ。何しろ今まで動く棺桶だとかブリキ戦車だとか馬鹿にされてきたはずの愛車が今はいよいよに敵歩兵をなぎ倒していくのである。旧式を操る彼らにとって、活躍の場が与えられることは稀である。故に更に士気は上がる。

しかし、果敢にも突撃してくるソ連兵は、それで引くことはなかった。なにしろ彼らの後ろには督戦隊がいる。督戦隊は少しでも逃げろそぶりを見せれば容赦なく味方を撃つだろう。前から後ろからも狙われている彼らに逃げ道はない。味方の死体乗り越えてどうにか刺し違えてでもこちらを殺そうとしてくるのだ。

流星に人海戦術を繰り出すにもそれ相応の損害があれば、それは作戦として成り立たない。得てして九七式の活躍により大損害を被った歩兵部隊は後退した。督戦隊はこれを処分することはなかった。前線の部隊が撤退すれば、自分達が危険にさらされることは百も承知である。もちろん、これがスターリンの意思に背く行為であるために、後に制裁が加えられる可能性は十分にあるのだが。

「作戦は極めて順調です。現在のところ報告された我が軍の損害は一式中戦車三輛、九七式中戦車一輛、死傷者は64名です」

「戦車の損害が予想以上に少ないな。やはり機動艦隊なるものの恩恵と言うべきか。しかしまだまだ油断はできん。アメリカもロシアも決して腰ぬけではないからな。さて、参謀長。我々も行くとしま

すかな」

佐藤は机の上の地図やら資料やらを軽く整え、脇に抱えて立ち上がった。

「行くと言われると、前線にですか？」

「その通りだが？」

「お止めください。長官自ら前線に出て亡くなられたら、どう責任を取るつもりですか」

佐藤の意外な発言に、参謀長は必至で止めに掛かる。折角ここまで上がった土気に水を差すような事態になれば、作戦に支障をきたす可能性がある。

「大丈夫だ。私はアノ男ほど無謀ではないよ。ただ、私が後ろで腰を据えていると兵士たちに示しが掴んだらう。ある程度の危険は伴ってしかるべきだよ」

司令官自ら前線に出ると言うのは割とよくあることだ。彼のドイツの英雄、エルヴィン・ロンメルやアメリカの戦車団を率いて自らも戦車の愛称となったジョージ・S・パットンJrなどがそれに当たる。

佐藤の言うあの男とは、元連合艦隊司令長官・山本五十六のことである。

「何心配することはないさ。ただ“我々は戦車がかつての騎兵とおなじように考えねばならない。かつて將軍たちが馬上で命令を下したように、今は移動する戦車の上で命令を下さねばならない”だよ」

そう言うと、流石に参謀長も納得して一緒に車に乗り込んだ。現在日本軍唯一の本格的な機甲部隊であるこの部隊には輸送トラックの他、側面装甲にセラミックプレートが張り巡らされた高官用の自動車も配備されている。もちろん専属の運転手が要るのは言うまでもない。

二人が乗り込むと、運転手はすぐさま車を出した。

戦車部隊の通った後には肉眼で十分見える距離に頓挫したT-34が転がっていた。途中赤十字のマークを付けた負傷兵を運ぶ輸送トラックや、運悪く無限軌道に弾が命中し動けなくなった戦車が牽引されていくのとすれ違った。

Side ソ連軍後方基地

「なんだって言うんだ！！敵に攻撃予定日はおるか、時間までバレていただと！！」

極東軍のトップであるワシレフスキーは憤慨した。誰のせいでもない、忌わしいヤポンスキーのせいだ。自分の部下に当たらずとも、その怒りを向ける矛先が欲しかった。故に近くにあった机に拳を振り下ろした。参謀たちもそれを止めようとはしない。その近くでも爆撃が行われていた。ようやく届いた増援の航空機も空を飛ぶことなく、地上で見るも無残な姿を曝していた。

出来る限り奥地まで下がり、縦深陣地を構築したはずにもかかわらず、それは奴らの前では何の役にも立たなかった。自分達をあざ笑うかのように高度8000m以上で侵攻してきたジェット機。

無茶苦茶だ。神懸かっているとしたか言いようがない。アメリカのB-29を見たときに感じた未来的な存在感以上のものを感じる。そのジェット機は事実未来から現れた存在であったのだが、ワシレフスキーがそんなことを知る由もない。

「撤退をお考えになった方が良いのでは？」

参謀長が口を開いた。それを聞くとワシレフスキーは俯き加減だった顔をあげ、参謀長をじつと見た。

「滅多なことを口にはするな。そんなことをすれば首が飛ぶのは君だけでは済まんのだ。同志スターリンの御心に沿わなければならぬ。それがソヴェイエト陸軍の将軍の使命と言っちゃつだ」

「申し訳ございません。しかしこれ以上の抵抗は無理かと・・・」

それでも食い下がる参謀長。彼は恐怖心故にそのような弱気な発言をしているのではない。

「臆病者と怒鳴りたいところだが、それは私も分かっている。ならばせめて一矢報いようじゃないか。とりあえず今使える戦力をかき集めてくれ。持てる力を以ってしてこれを叩くぞ」

ワシレフスキーの判断は果敢であった。しかしそれが間違いであることに気付く者は居なかった。

機動艦隊の航空部隊のうち、全ての美雷は虎頭要塞近くの飛行場に集められていた。

対地攻撃の際も普通は中距離もしくは近距離対空ミサイルを積んでいるものだが、そんなものは一つもつけずに爆弾のみが、翼及び胴体下面に吊り下げられていた。

「T-01・発進する」

今井の乗るF-5A美雷。戦闘機としては不釣り合いとも言える大出力エンジンをつみ、満載状態でもスーパークルーズを可能とする。吸気音が高鳴り、エンジンが唸る。計器を確認してタービンの回転数、燃料供給量そして燃烧室の温度が適正であることを認める。ランディングギアのブレーキをオフ。機体は一気に地上を駆け、空へと飛び立った。

空で取るべき行動は周辺警戒だが、上がってくる敵機もなければ、こちらを狙う高射砲陣地もない。非常に退屈なものだ。正直眠ってしまいたいところだが、そうもいかないのが戦争と言つものだ。警戒を怠れば体のいい的になる。しかし、自動操縦オートパイロットと自律機動オートマニユーバがあれば仮に寝てしまっても充分コンピュータの制御だけで戦える。ただ、体が緊張していなければ急激にGがかかり、血流などに異常をきたす可能性がある。

「T-01から各機。周辺警戒を怠るな」

今井は自分に言い聞かせるように、全員に達した。もちろん皆分かっているだろうが、口に出して確認することで、より意識することが出来る。

マッハ1以上で飛行すれば1000kmに満たない距離などあつと

いう間である。正確にはもう少し短くすることも出来るのだが、パイロットの心理としておよそ1時間飛行した時がもつとも調子がいとのデータがある。故に敢えてある程度の距離から出撃させている。

24機的美雷は低空侵攻を行う。レーダーモードをルックダウンにMTI（移動目標インジケータ）を起動、目標はない。マスターアームスイッチをオン。マルチファンクションディスプレイに地上の目標が表示される。

>RDY GBU - 12<

エアインテイクトランク角の兵器搭載ステーションからレーザー誘導爆弾12発を選択し、TFリーダーに従い投下する。

>RDY GBU - 24<

>FIRE<

続けて翼下及び胴体内ステーションから24発のレーザー誘導爆弾を投下し、中枢コンピュータによる誘導を行う。

命中を確認すると、そのまま24機的美雷は高度12000mにまで上昇し離脱する。

敵の迎撃はなかった。味方の損害もゼロ。

オートパイロット自動操縦オン。今井はサイドスティックを握る手を緩め、シートに体を預ける。若干のGがかかるが、空戦時と比べればなんということはない。

ほっと息を吐く。

第60章 低空侵攻（後書き）

いやあ昨日のマラソン大会はきつかったよ
俺は運営役員で参加だったけどねwww

今井「いきなり関係ない話から始まるな」

玲「そろそろ出番が欲しいんだけど…」

アマネ「この次の次ぐらいにはあると思う」

玲「本当!？」

アマネ「モチロン。あとTFリーダーって言うのは地形追隨リーダー
のことでTFは”Terrain Following”の略だ
よ」

今井「まともな話が出たな」

アマネ「失敬な!俺は何時もまともだよ」

アマネ「ちよつと待って!何その玲さんの冷たい目!」

玲「別になんでもないわよ」

アマネ「ところで対ソ戦だけど予定では次で終わる予定。正確には
終ると言うよりまた海に目を向けようと思う」

玲「私の活躍が見られるわけね」

アマネ「それはありません」

今井「太平洋には戦う相手がないからな」

玲「じゃあソ連相手に」

アマネ「まともな艦隊をもっていない」

玲「またタイムスリップは？」

アマネ「ない。なんでWW2を舞台にしたのか意味がなくなる」

今井「どういう意味があるんだ？」

アマネ「ぶっちゃけない。その場の思いつき」

今井「威張って言うことか」

アマネ「すみません」

玲「出番があるだけいいわよ。もう」

アマネ「玲さんもすいません」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7742h/>

天空の要塞

2011年11月18日18時40分発行